

通俗礮石集

前編

18854

R18t

017144-001-9

188.54-R18t

通俗礮石集（譬喩因縁）

蓮体／著

前

M27

ABE-0476





說教學全書第四編 前編

譬諭  
曰緣 通俗礦石集

法藏館藏版



188,54 R 18t

礦石集叙

一切衆生本有薩埵。爲業煩惱之所縛故。不能如實知見本淨心寶。豈止不知而已哉。又爲利寶傷毒氣深入也。是以世尊。往替大悲願之故。以種種方便道。開示寶處矣。其教也。有權。有實。有舟車。有乘神通之人。雖巧拙難易不同。而獲寶終無異路也。粵有聰慧導師。号曰地藏。獨受三十三天之親囑。普導二十五有之羣迷。有一毛一滯一沙一塵之善。必度不令墮於惡趣。速俾得入金剛寶藏也。本誓踰衆聖。而神力智慧不可思議也。重障根鈍。應歸者唯此大士。邊地末代。有賴者斯尊悲願也。振古垂靈應也。居多。既備乎載籍也。頃年妙幢禪師。復撰利生記。及利益集。宇宙之感應。昭昭乎可見焉。而予所見聞。數十條。獨漏二部之搜羅。復不能無遺憾矣。肆不顧鄙醜。漫作編輯。因載報應之說。終歸



於秘密。顯曰。礦石集。分爲四卷。配于彼四親近。亦有微意耳。若夫震多  
摩拏在礦石之中。世人不識棄置路傍。別寶者即便識之。取置家中。鑄  
去鈍石。洗以灰水。磨以淨甕。既得光顯。安置高幢。滿足希願也。此集  
雖狂言綺語。似彼頑石。解寶之人頗有取焉。或因是一得淨菩提心之  
寶土。誰復痛毒氣。耶。置在高幢。兩種種寶。亦是地藏之三昧也。故目焉云

昔

元祿第五歲次壬申孟春二十四日

林下乞士無盡藏自題

通俗礦石集目錄

卷一

- 第一 地藏菩薩種々利益の事
- 第二 佛孝を説き玉ふ事
- 第三 大坂の女現に地獄の相を見る事
- 第四 河内八尾の女現に火車に取れし事
- 第五 勢州の愚夫母を踏む事
- 第六 攝州天王寺の人母を踏て厭癪になりし事
- 第七 生類及び器物を踐踏すべからざる事
- 第八 蟻蝮人の恩を報せし事
- 第九 鼠を愛して死難を免る事 附不空三藏兵を加持し玉ふ事
- 第十 鼠は多聞天の眷屬ある事 附不空三藏兵を加持し玉ふ事
- 第十一 天竺千闥國の因縁並に鼠の墳の事
- 第十二 猫妖て人を害する事。並に高野山に猫なき事
- 第十三 猫種々に妖て人を害せる事



- 第十四 猫主人に毒を食し事
- 第十五 猫火車と成て人の死骸を取る事
- 第十六 猫に十二種の過失ある事
- 第十七 唐の則天皇后の事
- 第十八 讚州香古の地藏の事
- 第十九 江戸魚籃寺の観音利生の事
- 第二十 泉州牛瀨の五郎兵衛三十三所巡禮の因縁
- 第二十一 洛東清水寺の前にて巡禮者異相を見る事
- 第二十二 或武士現に鬼の責を受ける事
- 第二十三 攝州の人現報を受ける事 附天狗の事
- 第二十四 大阪の信土地藏菩薩を造立せんと誓て病痊し事
- 第二十五 観音を念して聾瘂りし事 附大師瘡の灸を教玉ふ事
- 第二十六 地藏如意輪観音一昧の事
- 第二十七 大坂玉造石地藏の事
- 第二十八 大坂伏見鍛冶町地藏の事 附佛罰の辨

- 第二十九 謗三寶の人臨終に惡相を現する事
- 第三十 唐の宋尉佛法を破して地獄に墮する事
- 第三十一 濫大乘の人僻見の事
- 第三十二 眞言は末世相應の法なる事

卷二

- 第三十三 地藏菩薩の告を蒙りて石像を掘出せし事
- 第三十四 河内高安郡。山畑村石地藏の事
- 第三十五 河内鬼住延命寺地藏尊の事
- 第三十六 河内長野村阿彌陀寺地藏尊の事
- 第三十七 阿州伊津の人所持の地藏尊の事
- 第三十八 河内石見川薬及び薬師如來の縁起並に佛を偷ひの辨
- 第三十九 天竺健陀羅國の畫像の事
- 第四十 和州の石地藏童子の供を受玉ふ事 附阿育王前生の事
- 第四十一 德行才智ある童子の事
- 第四十二 大坂天王寺屋父子地藏の引攝に預りし事



- 第四十三 唐の惟岸法師及び童子淨土に往生せる事
- 第四十四 河内鳩原村の童子解世の歌よむ事 附白樂天道林和尚と問答の事
- 第四十五 千手三河か事
- 第四十六 或人の寵童死して後に夜々來る事
- 第四十七 少年を畜ふべからずと云の辨。並に智增悲増の菩薩の事
- 第四十八 梁の慧布法師。及び三種菩提心等の事
- 第四十九 念佛者の癖並に闕支分念佛の事
- 第五十 十 如來出世の本懐の事
- 第五十一 唐の法照法師生身の文殊を拜する事
- 第五十二 法華經は阿彌陀の三昧ある事
- 第五十三 法花經を誦して舌根壞せざる人の事 附唐の少康法師の事
- 第五十四 叡山の東塔院の圓善法師の事
- 第五十五 熊野の比丘死して後も經を誦する事
- 第五十六 春朝法師慈濟の心深き事
- 第五十七 定照法師の墓の事

- 第五十八 唐の遂端法師口中より青蓮花を生ずる事
- 第五十九 播磨の平願法師法花を誦して蓮花を感ずる事
- 第六十 一宿上人の事
- 第六十一 常 法華を誦して妙法蓮花を感得せし人の事
- 第六十二 念佛三昧を修して蓮花を感ずる人の事
- 第六十三 慧心の僧都胸より蓮花を生ずる事
- 第六十四 讚岐源太夫發心往生の事
- 第六十五 畜生佛を念して靈感を得る事

卷三

- 第六十六 河州八尾の地藏の緣起並に種々利益の事
- 第六十七 同地藏尊の佛舍利の事
- 第六十八 同地藏尊の寶珠蓮池より出る事
- 第六十九 同寺内に盜賊の難かき事
- 第七十 同西郷に横死の難かき事
- 第七十一 大坂佐渡島屋地藏尊の加被に依て壽命を延る事



- 第七十二 同地藏尊火難を告示し玉ふ事
  - 第七十三 大坂の童女母の壽命を祈りて感應を得る事
  - 第七十四 同寺の看功碩首座横死を免る事
  - 第七十五 大坂安道寺町油灌の地藏の事
  - 第七十六 大坂天王寺西門通地藏尊利生の事
  - 第七十七 和泉寶滿寺地藏尊の事
  - 第七十八 洛陽の繪師中西氏か父地藏尊の加被を蒙りて往生の事
  - 第七十九 臨終用心の事 附たり五條和光院の辭世の事
  - 第八十 南部岩手の想九郎が子の事
  - 第八十一 陸奥國四十九院氏が事
  - 第八十二 京の愚夫死して後る女の方へ來りし事
- 卷 三 末
- 第八十三 上總州馬槽大師の事 附たり新羅國義湘法師の事
  - 第八十四 大坂の女生身に人の妻を噉せし事 附たり心法白色圓形の事
  - 第八十五 下總國般若塚の事 附たり河内木の本のたくく飯の事

- 第八十六 長州三隅村に大師稻を時玉ふ事
- 第八十七 河内の人高埜山に燈籠を釣りし事 附たり高貴寺賊の事
- 第八十八 河内の人大師に歸命して業病痊る事
- 第八十九 河内の人死して後に追福を乞ふ事
- 第九十 浪花の人死して後に夜々來る事
- 第九十一 幽靈現れて回向を望む事
- 第九十二 讃岐の人回向を蒙りて他化自在天に生せし事
- 第九十三 河内の人兄を殺して現報を受ける事
- 第九十四 犬を殺して生身に犬々ありし事
- 第九十五 犬能く人の語を知り人の恩を知る事
- 第九十六 犬を殺して現報を受し事
- 第九十七 蛇を害して即時に報を受んとせし事
- 第九十八 或人疱瘡の鬼を追出す事 疱瘡の符の事
- 第九十九 或人疫神に逢て談話せし事
- 第壹百 世伯死して多く舍利を得る事



卷 四本

- 第百壹 唐眞表律師地藏菩薩の教授を蒙る事
  - 第百貳 讚州白鳥郡安宅の教清が事
  - 第百三 元魏洛陽の慧凝法師冥中所見の事
  - 第百四 河州の希勤阿闍梨祕密の益を得る事
  - 第百五 和州生駒山般若窟寶山和尙の事
  - 第百六 祕密念佛並に阿彌陀佛四重祕釋の事
  - 第百七 大佛頂陀羅尼功能の事 附たり唐の崇慧禪師大佛頂を誦して通を得事
- 卷 四末
- 第百八 定照法師枯木を加持するに再び榮る事
  - 第百九 玄海法師大佛頂を誦して淨土に往生せし事
  - 第百十 高野山教懷増延等大佛頂を誦して往生の事
  - 第百十一 大隨求陀羅尼功能の事
  - 第百十二 佛頂隨求を誦して邪鬼僻る事 附たり幽靈人に託して回向を望む事
  - 第百十三 千手陀羅尼功能の事

- 第百十四 尊勝陀羅尼功能の事
- 第百十五 賀州の僧生身に魔道に墮せし事
- 第百十六 密教を知らずして謗する人の事
- 第百十七 日本は密教相應の國にして相承絶す 謬ある事 附たり慶圓上人の事
- 第百十八 餘慶法師の事
- 第百十九 池上の皇慶阿闍梨及び性空上人の事
- 第百二十 地藏菩薩梵号の祕釋 附たり勝軍地藏の事
- 第百廿一 地藏菩薩四重祕釋の事

通俗礦石集目錄終



通俗礦石集第一

◎第一 地藏菩薩種々利益の事

夫地藏菩薩の。過去不可思議阿僧祇劫に國王となり。又大長者の子と生れて。大悲願を起し。又聖女光目女として。亡母の地獄の苦を救ひ玉ひ。不度衆生界盡ま不取正覺の大誓願を立玉ふ事。十輪經並に本願經の説分明なれば。勞しく書顯すに及ばず。毎日晨朝に恒河沙等の定に入て。所度の機を觀じ。恒河沙等の身を現じて。各々に恒河沙等の世界に於て。各々に恒河沙等の衆生を濟度し玉ふ。豈三十三身のみあらんや。無邊の身を現じて。種々の趣に應じて拔苦與樂し玉ふ。天竺にては伽羅帝耶山は所居の淨土あり。眞丹にては池州の青陽縣の南。九華山は分身金地藏所住の靈區なり。昔九子山と名く。唐の李太白來て山の峯蓮華に似たるを以て。改めて九華山と号すといへり。或人朝鮮の李學士に。金地藏の事跡を問。李氏答て曰く。唐の初新羅國敬順王金傳の子。宗社の亡るを見ま忍す。二十四歳にして出家し。金剛山の百川洞に隱れ。岩居して道を修すること三十年。國民燈慕して。城を築て護るを以て。喧を厭ひ白犬善聽と云を携て海を渡り。唐の肅宗の至徳二年に。五十三にして。九華山に入て住す。或時村人鹿を追て山に入り見れば。岩間の白土を。飯に雜へて食して。常に坐禪し玉へば驚歎せずと云ことあり。後に閻老闍



公に隨て。袈裟を覆ばかりの地を乞玉ふ。公許すに袈裟普く九華を覆ふに依て。公歎伏して皆喜捨す。諸人徳風靡て化城寺を翫めて居す。新羅此を聞て海を渡りて投歸する者許多。寺院繁富して百楹餘れり。徳宗の朝に張公巖。此州に知たる時。奏して額を改めて官寺とせり。終に貞元十九年六月廿四日。九十九歳にして寂す。全身散せざれば。塋を築て窆る。費冠卿事を序して存せり。後に墳塔顯り光りを放つ。故に其處を神光嶺と号す。是地藏菩薩の應身なり。宋高僧傳の二十。大明一統志の十六に傳あり。三才圖會の七に山の圖あり。山高こと數千丈。中央に一の峯あり。四方に八峯圍繞せり。蓋し神仙の所居として。八十餘の峯巒峭壁岩洞飛泉怪石。具に記しがたし。又唐詩英華集の中に。金地藏の詩一律を載す。格律高奇なり。日本にては。淨藏貴所は。地藏の化身なりといへり。寔に是大倉の一粟恒河の一沙なり。其の顯れざるもの。幾百千萬と云ことを知がたし。殊に神明權現。多の佛菩薩の垂迹なれば。其の内證を量りがたし。往古より山城の愛宕山。伯耆の大山。下野の岩船。伊豆の木崎の明神等は。地藏權現なりといへり。具に記することあたはず。且く一二を述るのみ。阿波國住吉郡。徳成寺の地藏菩薩は。高祖大師の御作あり。昔し永祿中に。大守三好實休長治。共に暴虐にして。或年の暮に徳成寺の僧を差て。京都の三好長慶が許に使せしむ。僧頗に歎ども不可。僧大に悲んで。文箱を持して歸り本

尊の前に置て泣て曰く。國主我をして。京都に使せしむ。窮陰晦朔に連り。積雪山川に遍し。豪客路を塞つて。風濤海惡し。禪誦を止て危險を越ゆ宿業の果すところ。嗚呼如何せんと。至心に懺悔して臥し。明日發せんとして。文箱を見るに長慶が返東なり。僧大に驚て三好に白す。三好封を發さ見るに。實に返東ありければ。地藏の神變を感じて。後に長慶に逢て問に。其夜一りの僧文箱を持參するが故に返答せりと云。時刻を考れば。符節を合せたるが如し。故に文使の地藏と号す。予曾て此尊像を拜し。而會寺僧の説ふ聞り。殊勝の靈像なり。又高野山にハ靈像多し。中にも地藏院の地藏は。地藏房仁濟の持尊として。小野の靈の作なり。嘉元中。池魚の災あつて。移して補陀洛院に安置すること三年。後に地藏院に還し安せんとするに。薩埵夢中に院主慶賢に。四印二明を授け玉ふ。今に相傳せり。又何の時代にか關東下妻の領主。田賀谷大夫高野に詣せんとて。紀川の邊まで來られしに。洪水にて渡ることを得ず。空しく歸んとせられし時。小僧一人船に棹來て大夫を渡し。同道して地藏院に到る。大夫大に悦び。寺僧に問ふに。小僧を知らずと云。大夫怪んで。後に堂を拜するに小まさ跡あつて泥著たり。正しく此の尊像の小僧と現じて。引導玉ふこと疑なしとて。感涙を流して信伏し。國に歸りて後。領分の人をして。皆永代此院の檀越とせりとかや。又最勝院の地藏尊は。巽代住持の僧貧にして。獨住せる



時。小僧の身を現じて薪を採。火を焼て僧をして背炙り臥しめ玉ふ。後に尊像を拜するに。面貌煙にふすばり。手足灰炭に穢させ玉ふといへり。○又花王院の地藏尊は。土佐國金剛頂寺の千體の中の一尊なり。大師の御作にして。御長九寸六分なり。然るに何なる故にか。紀伊國海士の郡に鹽を焼て。世を渡る姥か家に。二體を求め得て小棚に安置して。此を棚佛と号して。朝夕食物の上分を供養じけり。文永七年五月雨のころ。其處の地頭の計にて。葛城の麓にて。女谷と云山一所を。鹽木の料に充免しければ。村人群集りて恣に刈取ける。老婆足立ずして泣て曰く。我久しく佛に仕まつれども。木像はと無聊ものはあらじ。我が爲に少しき薪をこり玉ふ事もあるし。間を枕として臥しければ。夢に小法師二人婆か上を勝けて外に出玉ひ。暫あつて復勝けて内に歸り入玉へり。一人の小僧婆に告玉はく。汝が望むところの鹽木の刈て來ぬと。驚き覺て見に。薪擔に等しく積重ねたり。尊像を拜むに手足に泥著たりける。此より木積の地藏と号すとかや。後に故あつて此院に相傳し供養じ奉る。具には通念集に見たり。○又十輪院の地藏尊は。大師の御作なり。或時光棍窺ひ來つて。院主を害せんとするに。僧へ臥具を蒙り臥たり。賊此を見れば。最美若なる小僧あり。さては人違へりと思ひ。小僧を覺し院主の臥處を問んと擧起して見れば。地藏菩薩の尊像なり。賊大に驚き慚愧の涙を流すに。伽子も目を覺して。賊を捉

ふ。賊始めよりの事を語りて見びことすといへり。又一代の住持三冬。嚴寒に伽子に課せて曰く。地藏菩薩は。毎日晨朝に六道の衆生を濟度に出玉ふ間。庭上の雪を搔除よとて。毎朝拂はしめられければ。僕豎大に苦しみて。一日つぶやきけるは。地藏のいはれざる朝あるさし玉ふ故に。吾們寒を侵して掃治す。責て一度は自らも雪かき玉へかしと云て。庭に出て見れば。何人の掃除せるやらん。皆掃ひ弄たり。大に怪んで堂の櫺を見るに雪ゆり。内陣まで足跡あり。知ぬ此尊像の自ら雪を掃ひ玉ふなりとて。涙を流して貴みけり。其より雪かき地藏と号すといへり。○又清雲院は。昔は花園院と号す。本尊地藏菩薩は。持經上人の安置し玉へるあり。毎年八月二十一日より。晦日までの勸學院の講談。一山の大役まで。毎歲十人。二十五卷の本書を誦誦して。圖取にして諳に講ざるなれば。魯鈍の人の勤むることあたはざる。晴の儀あり。能く講じ畢ること三年すれば。學頭と成。後には一山の貫首に進むなり。一代の住持常に此尊像に祈誓して。恙なく勸學院の學頭を勤め畢しめ玉へと祈るに。其日に至て此僧圖を取り當れり。大に愁へて至心に祈念するに。背後に一りの僧あり。衆人の眼に見ざれども。無碍の妙辨を以て。深義を談説すること。妙吉満慈もかくやと。諸衆驚歎せずと云ことなし。己の刻より申の刻の終りに至るまで。宣暢すること懸河のごとし。爾時上座の曰く。日既に暈なんどす。講を止玉へ。明日の講讀無



にしもあらずとありければ。寔に然なりとて止られける。諸衆は此の院主の記憶辨才を感歎しけるに。實には本尊地藏菩薩背後より講じ玉へるありと。後に思ひ知りけり。爾よりこのかた勸學院の講を勤る僧へ。必ず此尊像を祈念すといへり○又養泉院の地藏尊へ。相傳へて曰く小野の尊の作なりと。何のところにありけん。寺の傍に菩提心を祈求する僧あり。然れども天性慈悲少くして慢心多し。或夜夢ともなく幻ともなく。化人來りて我が往處に誘はんとて。一つの曠野につれゆいて曰く。是六道の街なり。汝常に我を供養すといへども。惡心未だ除かざれば。今三途の苦患を見せ。速かに菩提心を起さしめんが爲に。具して來れりとて。刀山劍樹湯爐炭火河糞屎銅柱鐵床の報。一百三十六地獄の苦相を見せしめ玉へば。此僧身の毛豎ちて惡心を斷じ勇猛の菩提心を起す。時に化人即ち地藏菩薩と成て。善哉々々自今已後只今の心を退することなかれ。必ず佛土に生じて證果すべしと。宣ふと思へば夢さめぬ。僧大に啼泣して信心怠らず。精進に勤修して。臨終正念に密嚴佛國に往生すといへり○又山の堂の地藏尊は。高祖大師の御作なり。昔に貧僧あり。毎夜此尊像に參籠して。福を祈りしかば。或時菩薩の御手より如意寶珠を授け玉ふと夢みて後。衣服財貨穀米珍寶庫藏に充溢せり。されば振古富で驕らざるものまれければ。此僧も後には心懈り。放逸にして奢侈を極めけるほどに菩薩夢に見させ玉ひ告玉はく。

汝に世福を與へぬれば。未來の苦果を忘れて。懈怠緩慢にして種々の惡業を造る。如何に無上菩提を求めざるやとて。寶珠を取り還し玉ふと思ふに。其より後忽に貧乏になり。大に愧悔にて勇猛し菩提心を起し進修して。安祥正念に往生淨土の素懷を遂といへり。已上最勝院より以來の六尊を。高野山の六地藏と号す。具にの通念集に記せり○又何れの寺にかありけん。金銀を畜へたる僧あり。豪客是を知て。五七人夷中の參詣人ありと偽り。寺に來りければ。住持甚悦び。水風呂を沸して入しむるに。彼が曰く。先院家様浴し玉へとて。捉へて押込蓋して。上に大石を重ね置。下より熾り火を燒さ。光棍等藏を開いて財寶を奪ひ取んと。ひしめさけるを。院主は袂かぶりて臥せられしか。私に此を見て驚き恐れて。至心に本尊を念じ隣寺に走り往て告るに。諸人來り集りければ。光棍等畏れて空しく逃去りぬ。後に水風呂を見れを蓋して石を重ねたり。怪んで開き見れば。中に本尊地藏菩薩の木像あり。是に於て察するに。賊は院主を捉へて押込と思ひしに。本尊身代りに立玉へること。疑ひなしと。其より湯入の地藏と号し。諸人禮拜し供養し奉るといへり。寺の名も聞しかど今は忘れたり○又奥の院の汗流地藏は。毎日己午の刻には遍體に汗を流し玉ふ。其故を知りがたし○又泉州堺の邑岡圍の外廓に石地藏あり。誰人の造れんと云ことを知す。罪人死刑に逢べきの前日には。必ず遍體に汗し玉ふに依て。獄中の人悲み



歎いて。至心に念佛するに。果して翌日刑せらる、者ありといへり。奥の院の石像も。地獄に遊化して其の劇苦を悲しみ憂惱し玉ふ故に。汗かき玉ふあるべし。されば因位は聖女の光目女として。亡母の地獄の苦を救ひて。僧那を起し玉ふなれば。地藏本願經を。釋門の孝經なりと判せり。故に父母の師長に孝を盡せる人を。別て愛敬加護し玉ふといへり

◎第二 佛孝を説き玉ふ事

儒には孝の百行の本と言ひ。至徳要道ともいへり。五帝三王周公孔子は唯孝を教ふるを本とせり。釋氏の孝彌廣大なり。佛成道の最初に華嚴經を説き玉ふ。其の始の梵網經は孝順父母師僧三寶。孝名爲戒。亦名制止と説き。觀經には孝養父母奉事師長と説けり心地觀經に四恩を説くには。父母の恩を廣大なりといへり凡そ一代説教の中に孝を説くこと無量なり又佛成道の後悲母の恩を報せんが爲に。一夏九旬忉利天に居して摩耶夫人の爲に説法し玉ふ。此を大報恩經と名く。地藏本願經も此時説玉へり。又佛昇忉利爲母説法經二卷あり。父母恩重經等の中に殊に悲母の恩を深重なりと説けり。摩訶摩耶經に曰く如來涅槃し茶毗するに炬火皆滅す。大衆所以を知らずして號慟して如來何の因縁有てか未だ畢り玉へざると。阿那律は忉利天に上て佛の滅度し玉ふことを摩耶夫人に計ぐ。摩耶夫人下て茶毗の所に至るに。金棺自ら開けて。世尊起て合掌して白さく。遠く來下を屈と。復阿難も

告玉はく。汝當に知べし。後世不孝の者の爲に。今金棺より出で、母を問訊すと。又淨飯王の崩せんとし玉ひし時。佛慈峯山に居して。遙に天眼を以て見て阿難。難陀。及羅睺羅と共に。空を飛行して。忽に王宮に至り。種種に説法し玉ふに。淨飯王阿那含果を得玉へり。乃至佛御手を白淨王の胸の上に置て。種々に説法し玉ふに。阿羅漢果を得て。即ち泥洹し玉へり。さて阿難は伯父の棺なり我昇べまを請す。羅睺羅は我祖父の棺なりか、しめ玉へと請ひ。難陀は父の棺なり昇べしと言ければ。佛の前を擔ひ。難陀は後を擔ひて葬送し玉ふに。無量の諸天樂を奏し。花を雨して供養じ。四大王降て。願くは如來大悲を以て。淨飯王阿羅漢の棺を擡昇しめ玉へと請ひければ。佛許して擔はしめ玉ふ。五百の羅漢。各手ごとに。牛頭梅檀の薪を持して擡げ。積木として圍維して。舍利を収めけり。竊に惟るに。佛は三界の獨尊にして。棺を擔ひ玉ふ事はあるまじけれども。末世の衆生に。孝道を知しめんが爲に。此の儀を現じ玉へり。今時の人父母に不孝にして。常に其意に違逆し。或は惡口し。或は飢渴に及ばしめ。或は打擲するあり。恐しき罪なり。さるる不孝の人は自らも横難に逢ひ。又は餓餒し。或は狂亂し。我が子も亦不孝にして。種々の不祥のみ多かり。未來永劫無間の苦しみにくばくそや。恐れざるべけんや

◎第三 大坂の女現に地獄の相を見る事



近比攝州大坂北久寶寺町。櫛屋の久右衛門と云者の妻。邪見放逸にして姑に不孝なり。平生惡口罵詈せしかども。久右衛門去さりしが。終に姑を餓死せしめたるどなん。此女五十餘にて。膈噎を病て。四十日も。水穀喉を通らず。而も目に種々の餓鬼見へたり。或時は大なる法師の青色或は赤色の形にて。可畏が來れり。彼の女あの人を見玉へ。腹の壺の如く。手足はやせて大なる法師の。青色赤色なるか來れり。あらをそろしやく。何方より來り玉ふぞやと。ひたすら云けり。衆人の目には見へず。此の女の目にのみ見へけり。夫あさましく思ひて。念佛を勸めけれども。一遍も唱へず。或時は身中をかき拂ふ。夫此を問に竈の下より。火來て我が身をやくとて。あらあつくとをめき叫びけり。然れども竈の下には火も見ず。又病中に衣服に虱み無量に生じければ。新しさを改め著しむるに。一夜か中に又初の如く重々無盡生じけり。蓬亂の髪には胡麻をふるひかけたる如くに半風涌けり。夫あはれみ髪をばさみ切りけるに。重くして一さげもわりしとあり。さて死する十日ばかり前より。初の餓鬼の形は失て。又牛頭馬頭阿防羅利多く來りて。彼の女を引立て往くとて。足すりして號びけり。是の如くして遂にさけび死せりとあん。此現に阿鼻地獄の相あらはれたるあり。皆人慳貪不孝の。現報なりとあはれみけり。此事面會見て念佛勸めたる人の物語を。予が弟子具に聞けり。過にし天和年中の事ぞかし。而る

を世人此の現報と。佛説の未來無間の苦患とを聞なから。孝慈の心なきこそ。かへすくも。をろかかれ

◎第四 河内八尾の女現に火車に取れし事

河州若江郡八尾に豆腐屋あり。其の妻性慳貪邪見にして不孝なりしに。延寶年中久しく病みて。今日明日をみしらぬばかりなり。相知たる人。姨辻村と云所へ行て。夜陰に及びて歸るさに。八尾の河原を通りけるに。南より北へ火車來るを見る。牛頭馬頭の羅刹より輓。後より推て行。車の聲雷の如く。其の疾と鐵砲の如し。彼の者あまりにをそろしくて。堤より取付念佛唱へて密かに見るに。火炎の中に一りの罪人あり。二手を擧て。空をかきて叫ぶ。聲を聞ば。彼の豆腐屋の女房なり。刹那の間に北へはるかに行過ぬ。此者惶怖して早く走りて八尾へ歸り。我が妻に豆腐屋の妻は。病如何と問ければ。只今の前に死せりと答ふ。さて密に我が妻に此事を語りければ。火車を見しと。死せしと時刻たがひざりけり。後に此事を看病人に語りければ。さもあるらん。息絶ると等しく。屏風の後ろと明かりけりと云て。各悲しみ恐れけり。此も近き事あり。貧道か知己。火車を見たりし人の物語を。再傳して聞けり

◎第五 勢州の愚夫母を踏事



過にし寛文の始め。伊勢の山田に。儒學流行けるに。或る愚癡なる男。一人の老母を養へるが。孝の説を聞いて。晨昏定省すと云ま、に。今までは心安く。母子の大底の儀なりしに。忽に改めて。日々に袴肩衣を着て。慇懃に安否を伺ひければ。老母事の外に窮屈に思ひて。或人に語らく。我無比日備學して。諸事あまり慇懃にて。一向の他人よりも過たり。却て昔の何事もあかりし時こそ。眞の孝行なれ。孔子の母は。いかばかり苦しむ玉ひぬらんとて。かこちけるを。彼の子傳へ聞て。大に腹を立て。母に向て惡口し捉て投。我母どもをばぬぬことをの玉ふ物かな。我かくのごとく。能孝を行にと言て。散々に踐けり。最可笑かりける孝行なり

◎第六 攝州天王寺の人母を踏て躰癩まなりし事

過にし寛永年中。攝州天王寺。石の鳥居の前より一町半程北西の南稜に。九兵衛と云者あり。平生母に不孝なりけり。或時母を蹴れば。即時兩足跛て起ことあたはず。此にも急ずして又母の頭を挫ければ。即時に手もなへてげり。母不便に思ひければ。或時諫めて曰く。汝我に不孝にして。或は蹴。或は打し罪にて現に手足なへたり。心を改めて。神佛にも祈り。慚愧懺悔の心を生せよと。かき誨て勸めけるに。彼の頑才母を躰程の狂人なれば。なじかは少も聞入るべき。却て母を睨み罵て曰く。他人の母ならばこそあらめ。我か

母を我蹴に何の罰やはあるべきと。言ひ訖はに。兩眼引くりかへりて。二の舞の面の如くになりて。其より癩癩になり。漸々にくさりけり。寛永十二年乙亥七月十日に。願まで腐り落て死にけり。かく因果を知ること。あさましきかな。勢州の愚夫は。初め善心より起れる故にや。現報もあかりけり。未來の報は。掌を指か如し

◎第七 生類及び器物を踐踏すべからざる事

夫れ人の小天地なれば。我か奴婢なりとも。踐踏することは既に天理に乖けり。況や我か母をや。母尾の明慧上人は。幼少の時犬子を踏げ玉ひて。若し我か前生の父母にてやあらんと云て。立回りに拜し玉へり。又密教の中には一切の有情及び器物を騎踏せざれと説けり。此は諸尊の三摩耶形。契印等あるが故なり。蓮花は彌陀觀音等の三形。柳枝ハ滅惡趣の三形にして。觀音の持物なり。又柳及夜合木は過去の佛の菩提樹なり。佛手柑。栢樹。蘿蔔等も諸尊の三形なれば。踏踏べからず。鉤。索。鎖。鈴。香爐。瓶。鉢。寶鏡。錫杖。念珠。白拂。甲冑。弓。箭。刀。劍。鉞。斧。戟。又。棒。杵。輪。碓。傘蓋。檀帽。簫。笛。琴。瑟。篋篋。篋篋。羯鼓。羯鼓。螺貝。團扇。筆。札。孔雀尾。線句形。までも皆三形。或は持物なり有情には師子。象。馬。牛。猪。羊。麋。虎。孔雀。鵝。龜。鯨。蛇。螃蟹。蠅蟲等。或ハ三形。或は所乘の物なり。故に明に騎踏去惱ますべからず。殊に牛ハ大威徳



の所乗。馬は觀音の三形なり。吾朝に昔より三十三所。巡禮の者疲極すと云へども。馬に乗ざるは馬頭觀音あるが故なり。又鹿。猿。鶴。鷹。鷄。鳩。鳥。狗。鼠までも吾朝神明の所使なれば。殺し惱ますべからず。神明の四足二足の生類を食せる人を諱玉ふも。内證は皆佛にて。慈濟を本とし玉ふが故なり。菩提心論云は。一切衆生畢。竟成佛すと知るが故に敢て輕慢せずと説き。大日經には我即ち心位に同なり。一切處自在にして。普く種々の有情及び非情に遍せりと説。疏には毘盧遮那と鬼畜等の尊と其心平等にして勝劣の想をしと釋せり。されば成佛を求むる者は非情艸木風雨をも瞋罵し輕慢せず。况や有情を輕慢し。惱し殺さんをや。何に矧や我が能生の母をや。問然らば牛馬に乗り器物を騎蕩する者は重罪を得べきや。答然らず在家の人。牛馬に乗るべきは定れる事あり。然れども巡禮の時に牛馬に乗ざること上の如し。平生も無益の時に乘て鞭答せば罪少なからじ。弓箭鏡團扇等をも蕩て重罪はなくとも平生に踏こへざるは。又士の篤行なるべし。出家の牛馬輦輿等に乗ること佛制なれば。あるべからず。一日車輿に乗ずれば五百日の齋を滅すと云へり。况や惱他販賣は梵網の禁なれば。惱し賣べからず。且つ眞言師は上に述るが如く佛制なれば。器仗等を蕩ば罪を得んこと必せり。況や畜生を惱し殺し販賣せんをや。されば畜生も愛すれば必ず恩を報ずることを知れり。震旦に昆明池の魚。隋侯の蛇。漢

の楊寶が黃雀。唐の毛寶が白龜。皆を恩を酬ひけり。本朝も猿猴。及狗。蟹等の人の恩を報せし事。古記に具に載たり。毛舉に違わらず

◎第八 蟾蜍人の恩を報せし事

過にし寛文の初め。大坂に老尼あり其家の浴室の下に。蟾蜍晚になれば匍匐出けるを。小兒ども群り集りて。捕へ索付て引まはりけるを。彼の老尼小兒に向て言く彼れ濕冷の地を好のみて浴處の下に潜み居を汝等取出して。かくおせそとて。取り放ちて舊の處へ入れて。此に安處せよとなん云ける。さて五七度もかく小兒の取なやましけるを。免しければ。蟾蜍心中にうれしくや思ひけん。或年の冬。老尼の夢に見て曰く。我久しく君の恩を蒙りて。此の家に住せり。然るに三日の中に。此の近處に火災あるべし。我は足遅ければ先に出る。君も用意し玉へ。微意聊か恩を謝し奉ると。老尼夢覺て。不思議に思ひければ。若もや虚夢あらんかと。子どもにも語らず。獨り衣服財寶穀米調度までも取した。めけるを。子共倚合て。こはいかにと訝れば。少所存あり。汝等も用意せよと云けり。老尼の所以にや。狂じ玉へるとて。嘲り嗤者多かり二日を経て。夜中風冽しく吹に。やれ火災よとよば。る聲しければ。老尼起て此こそ我か此比用意せしありとて。ひたくと家財調度を土藏へ入て。扉を堅く塗り。早く火災を免れけり。火收りて後に。子孫に夢の事語りけ



れば。人皆を不思議の思ひをなしけり。後に家を造りければ。彼蟾蜍も何地ともなく來りて。其の家にぞ住ける。彌あはれみけり。是蟾蜍は小蟲なれども。人の恩を知て報せるあり。又畜生に報得の通力あり。狐狸にも亦通あり。故に狸狸は往を知とも來を知ず。人の先祖數百年の事を知れども。未來は明日をも知ず。乾鵲は來をしれども往を知ず。往末の事をしれども。過去の事をしらすといへり。今蟾蜍も乾鵲の類もや。又鼠なども火災のあらん家には。半月も前より。皆な出去といへり。蟾蜍の類にや。

◎第九 鼠を愛して死難を免る、事

大坂西横堀大津屋長兵衛の船頭に武右衛門と云者あり。平生大黒天を信仰しけり。世俗の説に鼠は大黒の眷屬なりと云ことを聞て。常に愛して食物を充飼て。曾てより殺さざりけり。延寶八年庚申の七月九日。江戸回船に乗て。熊野浦を通りける。忽ち惡風吹來て。類船數十艘沈没けり。武右衛門船も破れてげれば。船板の片端に取付て。海上に漂泊すること一日二夜。飢と寒とに迫て。最早息絶なんとしけること。數度なり。武右衛門心に諸神諸佛に祈りければ何地ともなく。薦一枚流れ來れるを。取て背に覆ひ。數日の疲に暫く眠るかと覺ぬしに。忽ち數百千の鼠來りて遍體に取付と思ふ。飢寒へたる肌煖まりて。心安穩になりけり。さて阿州の船。遙に見けるを。喚はりて乗り。命を助りて大

坂へ歸りけり。同船の篙工共の皆な死しけり。是も鼠を愛せしと。大黒天神を信せしと。力なり。万里の海上に鼠の來るべき道理なれども。大黒天尊の神力にや。大黒は本不動明王の化身にして。荼吉尼を降伏し玉へる尊あり。内證の大慈悲重の佛なれば。さもあらんかし。又大黒は即ち大日如來なり。梵語には摩訶迦羅と云。摩訶に大多勝の三義あり。迦羅に時作黒の三義を具す。時と日と義同し。豈大日にあらずや。されば大福神といふも理はりなり。疏に大黒天の事を出す。胎藏曼荼羅の外部に尊像あり。又佛說摩訶迦羅天經一卷あり。義淨の南海傳には僧厨に安して我を供養せば。日に一千人を養はんとの本誓なりといへり。故に竺乾支那。日域の諸寺諸山に皆食堂に安て常に供養し奉る。右の手に錘を持し。足下に俵を踏像は本説なし。仁和寺に鼻祖御作の大黒あり。左の手ハ囊。右の手は拳にして。足下ハ荷葉あり。是を標準とすべし。鼠も實に大黒の眷屬あらば。人の恩を知りて報すべきなり

◎第十 鼠は多聞天の眷屬ある事

鼠の神靈ある獸あり。詩にも相鼠有禮とて食を食するに。必ず両手を以て取り。頂戴して食せり。又或人鼠の死せんとするを。一飯を施して救ひければ。後に一顆の珠を捧げ來て。恩を報せしと異苑に見たり。珠を以て恩を報せしは。福天の眷屬ある故もや。又毘沙



門天の眷屬なるか。昔し唐の天寶十二年に西蕃大石。康の三國軍兵を起して。大唐國の西涼府を攻けり。西涼府より長安へ早馬馳來りて急を告ぐ。玄宗皇帝。不空三藏に詔して此を加持して敵を退けしむ。三藏みことのりを奉て。即ち禁中の内道場に入り玉ふ。玄宗も傍に坐し玉へり。三藏即ち手に香爐を乗て。仁王般若の陀羅尼二七遍を誦じ玉ふ。忽に神兵五百騎ばかり。庭の上に現す。玄宗驚いて三藏の曰く。是毗沙門天王の太子。兵に將として西涼府を救ひ玉ふなり。急に供養を設けて撥遣し玉へと。帝。悦て即ち種々の珍供を辨して供養し祈願し玉ふた。神兵空を凌で去る。四月二十日西涼府より。奏して曰く。二月十一日に。城の東北三十里ばかりに雲霧の間に神兵の長高く威勢あるが。其數を知らず。旗旌天にひるかへり。鐘鼓地を驚して來る。又西蕃。大石。康の陣の營壘に。金色の鼠數多來りて。弓弩の弦を昨切。甲の鎧。胃の組。悉くかみさり。又城の北の門樓に。光。明ある天王現して。西蕃の軍士を怒り睨む。西蕃は此に恐れて。矢一筋も射ことあたはずして。敗北しけりと。玄宗皇帝大に歡感あつて。不空三藏へ厚く禮謝し玉へり。其より大唐國の法。天下の處々の城樓に於て。皆多聞天王を安置すといへり。此も鼠は多聞天王の眷屬たる故あらんか。

◎第十一 天竺三國の因縁。並に鼠の墳の事

西域の瞿薩旦那國は。唐に地乳國と云。或は于遁とも。豁旦とも。屈丹とも。于闐とも云。皆梵音の轉なり。抑此の地乳國の因縁を尋るに。國王は多聞天王の後胤なり。昔此國荒て人なし。多聞天王是國に降て棲止し玉へり。或時震旦の帝皇の太子。龍を蒙りて流徙せられて。此國の東に居して王と号せり。又天竺の阿育王の太子。繼母の謀に依て。目明を失ひ玉へり。後に阿育王此を知て。此輔佐の過ありとて。其諸臣を流徙して此國の西界に居せしむ。其の中に豪酋を擧て。其借して王と号せり。終に風をあして國となる。其後二王政に依て。山野に會して互相に種姓系圖を争て。既に鬭諍に及ぶ。時に智ある臣あり。曰く此狩に依て。戰に及ぶこと然べからず。若雌雄を決せんことは。各の國に歸て。甲冑を擧兵を習はして。重て此に會せんと。兩方此義に同して。各國に歸りて。戎馬を習し。弓矢を稽古し。兵方を學ぶ。さて約束の期に臨て。兩方の兵會して。旗鼓相望て鬭ふに。西主利あらずして。敗北せるを。東主勝に乗て。遂に西主の頭を斬り。此の國の王として都を建たり。城の要害も。よからずといへとも。他國の軍兵終に此國に勝ことあたはず。國豊に民榮へたり。王既に年老遂に及て。太子なし。宗緒の絶んことを恐れて。乃ち多聞天王の像の前に至て。祈禱して嗣を請に。不思議や多聞天の像の額の上。剖て。嬰兒を生せり。捧げ抱て太子とす國民万歳と唱ふ。然るに此の兒。人間の乳を飲ず



○王太子の壽短からんことを恐れて。又神祠に詣でて重て養育を祈るに。神前の地忽然として隆起して。其狀爛の如し。中より乳涌出づ。神童飲吮て。遂に成立せり。智勇威勢人間の流まならず。武威遠國まで聞へけり。依て多聞天の神祠を營んで。先祖の廟と号す。此より累代相承て國を持ち。其子孫今にあり。地乳の養育する所なれば。地孫國と号す。即ち多聞天王の後胤なり。王城の西百五十里。五町一を去て。大沙磧の正路の中に堆阜あり。此鼠の壞墳なり。其沙磧の中に鼠あり。大さ螬の如し。其毛は金銀色を異にす。鼠の中の王なり。毎に穴を出て遊時。群鼠隨從すること。世の王は諸臣扈從するが如し。曾て匈奴數十方の軍兵を率して。地乳國を攻めて。鼠墳の側に對陣せり。時に地乳國の王は四五万ばかりの人衆を率て。向いければ。多勢は無勢なれば。此度の軍は決定して負なんことを思て恐れ悲しむことかぎりなし。本より磧中の鼠。神靈あることを知ば。君臣共に珍供を備へ。名香を焚て鼠の墳に至て。祈念すらく。今匈奴大軍を以て我國を攻む。我國人衆少して。敵することあたはず。伏して願くは神靈あらば。敵軍を退けよ。丹誠を抽で。祈りけり。然るに其夜地乳王の夢に。金色の鼠王。告て曰く。敬て相助んと欲す。願くは大王早く兵を勅せよ。明日。質明に合戦せば。必ず勝べしと。王歡喜して靈祐あることを知り。やがて戎馬を整へ。甲冑の組をしめ。未明に鐘鼓地を驚かし

○旗旌天にか、やかしめて進みければ。匈奴は甲をぬぎ。鎧の組を解て。安く眠りたれば。今どはいか白波の。鯨波の音に夢覺て。左右周章騒ぎければ。遂に驅立られて。震は懼る、こと限なし。卒に馬に乗んとすれば。馬鞍の組皆な切たり。鎧を擲んとすれば。鎧の系皆断たり。衣服弓の弦。甲の縛。帶の系。夜中に無量百千の鼠出て。皆齧切たれば。一矢も射ことあたはず。面縛して戮せられけり。瞿瞿且那王は。魯陽が戈。田單が火牛をからず。韓信が囊沙背水の謀にも依らずして。小勢を以て安くと大軍に勝。終に匈奴の大將を殺し。其餘を虜にえけり。匈奴は神靈の祐る所なることを知て。愈々震懼れ再度軍を起ざりけり。王鼠の厚恩を感して。宮を建て。祭を設く。代々尊敬して。上君臣より。下黎民に至るまで。咸く禮祭を設けて。福祐を祈る。其宮の前を通る者は。必ず下乗して拜す。或は衣服弓矢香華肴膳を供して。誠を輸して祈れば。感應のること鐘谷の如し。若享祭せざれば。災變に逢といへり。此鼠は多聞天王の眷属なれば。其の後胤の王の國に住して。國を守護すどみへたり。大日經に云何鼠心。謂思惟断諸繫縛と説り。弓弦。甲縛を断せること。宜なるかな。福を得んと思ふ人は。別して鼠をば殺すべからず。又猫を畜ぬざれ。涅槃經にも此を誠の玉へり。又猫は主人の恩を思はず。却て主人を害せること世に例し多し



◎第十二 猫妖て人を害する事。並に高野山に猫なき事  
 高野山は古佛の轉法輪處にて。不殺生の地なれば。猫あることなし。大師のさらひ玉ふ  
 と言ならんせり。大日經疏に猫狸は種々の慈育を蒙れども。亦恩分をしらすといへり。高  
 祖の惡み嫌ひ玉へること宜ならずや。寛文中に。武州江戸隅田川の側に住ける人。常に  
 猫を愛して飼けり。或夏の夜の月くまなく明かなるに。妻蚊帳つりて獨り臥たり。猫を愛  
 して同く蚊帳の中に入れて臥しむ。然るに猫彼の女が鼻孔に手をあて、見けるま、あや  
 まみて眠入りたるまねして居たり。さて猫をろりと山、小袖箆筒の引出の。引手を銜へ  
 て引出し。中に入置し。染手巾を取出し。足を以て柱を踏。手にて腰障子を推排て庭前へ  
 出けり。妻不思議に思ひて。静よ起て障子の穴より。覗みるに。隣家の猫共五六疋聚りて  
 。面々に染手巾を冠さて踊躍りけり。又人語を作して。各の少女の名を付て。お松。お糸  
 。お夏。などと呼て踊躍こと宛る人の如し。妻身の毛いよ立て。静よ蚊帳に入りて。又眠  
 りたる體にて居ければ。猫も亦障子を排て入り。箆筒へ手巾を入。舊の如くにして。同く  
 蚊帳の中に入りけり。妻おそれおの、くこと限りなし。夜の旦を待て。夫に此由を語り。  
 猫を殺すべきことを圖ければ。猫傍に在て是をさ、走り出て。何地ともなく失けり。  
 七八日も過て。夫板橋の堂弟の方へ往て見るに。彼の猫某に在。夫喜びて即ち捕へて殺

さんと思ふに。即時走り逃て見ざりけり。堂弟に來由を語りければ。驚き懼れけり。さて  
 其の晩方に隅田川の妻。湯殿にて沐浴して。浴衣を被て出んとするに。彼の猫何地ともなく  
 走り來て。妻か亢を嚙切て逸けり。妻の號々聲を聞て家内隣家。驚き騒ぎて。衆人聚り  
 醫師を呼て。種々に療治せしかど。翌日終よ死しけり。此の事療治せし。外科の物語を。  
 予面會り聞り。隅田河と板橋とは三里餘を隔たり。其の後。彼猫終に行方しれずありぬ。  
 猫曾にやなるらん。最可畏しき事どもなり

◎第十三 猫種々妖て人を害せる事  
 下總の國。花の露の花藏院の猫。出家の貌に妖て。七八里近處の。花藏院の知己ありし僧  
 の寺へ往て。吾の花藏院の同宿にて侍り。宿かし玉へと請けり。寺の内外能知れば實  
 りと思ひてありしに。俄に花藏院より使价來れり。猫此に驚きて逃さりけり。只今花藏院  
 の同宿來れりと語りければ。彼僧。それこそ猫の妖て所々に往侍るなりと言を聞て。人  
 皆みそれあへり。○又丹後の惡石衛門は。武勇の譽天下に隠なかりき。後に長病にて四五  
 年も臥して起ざりけるを。京の禪僧に知音ありて尋訪けり。平生は病臥の床にも相見しけ  
 るに。今回は暗ざりけり。又家人も其面を見ず。食物をも常の如くに食すれども。其時をば  
 内豎。嬖妾にも見せしめず彼の禪僧あやしみ。定て惡鬼の所以あらんと思て。食時に私に



戸の隙より。のぞき見れば。老て古き猫にてぞありける。禪僧さてこそと思ひ。私に家老を呼て。語りければ。家老手を拍て曰く。二三年來。一月に一人二人づゝ。奥方の女人。小官共往方しれずなりけり。定て此猫の所爲にや。無念なりとて。やがて取巻て。殺しけり。さて居間の板敷の下を見に。人の手足。觸體わまたありけりぞ。又或諸疾の祖母。久しく病て引籠り。悪右衛門か如く。年を経て人にも唔ず。子孫にも對面なく。食物言語の常の如くなりしを。孫あやしみ戸の隙より。闚着れば猫なり。孫大に怒て即ち其猫を殺して尙あきたらず。猫は我祖母の敵なりとて。領分國中の猫を。一頭も残さず皆殺しけり。其より其疾の領分には猫なしといへり。此事近代の事なり。其國は恐多ければ名を斥す

◎第十四 猫主人に毒を食し事

肥前に一人あり。平生猫を愛しけり。又家に曾てより鶏あり。時あらぬに度々鳴けり。主人尾籠と思ひければ。夜鶏を捕て薦につゝみ。翌日は遠方へ弄べしと。伽子に言付けり。然るに其の夜某の村の寺の僧の夢。鶏見て曰く。我久しく彼人に養はれて厚恩を得たり。故に夜不時に鳴て告ぐ。如何とをれば。猫主人を害せんと云心ありて。種々思慮を廻し。間を伺けるまゝ。我鳴て驚し侍るなり。然るを主人我過なりとて。明日遠

く弄られんとす。願へくは君明日質明に。彼家に往て。此事を私主人に告玉へとて。涙を流しけり。彼僧怪しく思ひながら。主人と膠漆の友なりければ。明日夙に興て往けり。主人怪しみ喜びて。何の故にか早旦には來り玉へるとて。互相に寒暄を問。竟て。主人伽子に命して。鶏を某處へ弄よと言はけり。其時僧驚きて主人に語らく。先暫く待玉へ。此に付て白すべきこと侍りとて。しかくの由を語りければ。主人も驚き夢の事違はず。不時に鳴ること不思議なりとて。俱に茶を飲けるに。猫來りて主人の茶碗の上を跳り。諭けり。怪みて此を見に青土龍を咬切て入たり。若謬て飲なば命を失はんこと。決定せるに。早く判て其の茶を飲ず。終に其猫を殺して。彼鶏を愛して畜けり。此事泉州堺の津の事と云一説あり。但し同じ事二處にあらんも。疑にたらず。又攝州の内の代官に。猫毒を食しこと。肥前の事と相似たり。事繁ければ記するに遑あらず

◎第十五 猫火車と成て人の死骸を取事

洛陽の或浄土宗の寺。何某の長老とかやありけり。此人少年の時より。別して猫を愛して。夜も懷に抱て寝けり。然して三十年にも及べり。成夜障子の外より。人の聲して呼ければ。彼猫いで。人の言如くに耳語けるが。先の人腹立たる氣色にて歸りぬ。猫も亦長老の懷に入て臥しけり。長老あやしく思はれければ。即ち捕へて。汝今外に出で。人



と言聲しけり。我に對しても言語とて責ければ。彼猫答て曰く。今い何をか藏し侍らんや。我年久しく厚恩を蒙り侍るま。朋輩の契約を乖き侍り。故に先の者腹立て、歸り侍りき。如何となれば。猫は數十年を經れば。必ず妖る法にて侍り。我は京中の猫の長として。年も高く才も勝れて侍り。若世に邪見造悪の人ありて。死し侍れば。吾儕火車と成て。死骸を取り侍る。其の黨の中に。我こそ主宰にて侍れ。然るに尊師の檀越の中に。某町何屋の某甲と申す尼公。明日寅の刻に死すべし。此者平生邪見放逸にて。慈悲の心なく。三寶を毀謗じ。侍れば。吾朋輩共彼が死骸を取るべき。評議に來り侍るといへども。彼尼公は尊師の檀那にて。尊師必ず引導に出で玉ふべきなれば。恥辱を與へ奉るあり。されば數十年の厚恩を忘る。にて侍れば。我は出べからずと約を乖き侍り。朋輩ども忍りて。已往は徒黨を追出す由を申て。還り侍るありと。明に言けり。長老は驚き且は悲しみ且は恐れて曰く。汝が言こと實ならば。寔に不便あり。汝既に通を得て能く未來の事を言。汝等火車と成て死骸を取時に。若怖畏の喜もありや。猫の曰く。持戒の流清く。忍辱の衣柔かに。慈悲の室淨よく。智慧の劍き利して。普賢道場の窓の前に。中道實相の月圓かに現じ。金薩灘頂の壇の上にて。本有不生の蓮盛に開たる尊宿の。引導し玉ふ時には。其の人極重惡人なれども。即ち成佛するが故に。我等種々に方便を回すといへども

。取ることあたはず。若し慚愧の衣破れて。名利の風膚を侵し。智慧の刀さびて。煩惱の賊常に隨ひ。破戒の高き原に。瞋恚の炎熾りに起り。放逸の深き澤には。愛欲の波遠く漲る人の。下火するには我等便りを得て。安くと取り侍る。但無戒の人なれども。心勇銳なる人には。卒爾に近き難し。故に雲外より遠く雷電となりて。どろ／＼と。どろめかし。黒雲驟鷲として。暗夜の如くなして。其心を動轉せしめて。死骸を擲取り侍る。さて物の中、數珠はどおそろしき物はなし。中にも達磨を以て打る、時に。多くは打殺され侍るなりと語りければ。長老暫く打案して。さてこそ不便あれ。明日我引導に出なば。汝隨分に力を出して死骸を取べし。我も亦心を正して隨分に取りべし。但極めておそろしき時は。數珠にて打べし。汝力を盡して打れぬやうにせよと言ければ。猫喜びて又外へ出で。暫く有て歸りけり。さる程に長老は。夜の明を遅しと待けるに。曉に至て頻に門を敲く聲しけり。伽子興て門を開くに。此の寺の檀那なりし某町の尼公。今朝寅の刻に死しぬ。今日申の刻に引導に出たまへと告來れるあり。長老は胸打騒ぎて。さては皆買ありと驚きけり。猫もそれより見ずなりぬ。今日も亦午の貝こそ吹つあれ。羊の歩み近付て。申の時よもなりければ。長老は忍辱の衣を被。智慧の數珠を拵ぐりて。引導に出られけり。常よりいよく心を堅固にして。三尊の來迎を仰ぎ。一心に念佛して。葬送しけり。



比しも霜月の事なるに。晴天俄にかき曇りて。遠く雷の聲どろめきければ。長老は心付たりと思て。勇猛に念佛せられけり。雷の聲次第に近くなりて。空の暗夜の如く。霹靂電光おそろしと云はかりなし。大なる氷り雨て。ぐわたくびしやりと唱て。棺の上よぞ落ける。衆人の逃散て。傍に居人なし。長老は肝魂も身にそはずといへども。兼ての約束あれば。ぬいやつと云て。數珠を擲うたれければ。暫くありて空露て。雷も静りけり。さて衆人集りて。棺を開き見るに。別の仔細なし。衆人異口同音に。長老の手柄ありと匂けり。葬儀既に畢て寺へ歸て見るに。猫ハ歸らず。達磨にて打殺されたるにこそと悲しまれけり。其後三日を経て。猫歸りたるを見れば。達磨にて打れたると見ぬて。一眼打出されたり。長老不便に思はれければ。目薬などさして。療治せられければ。終に死してけるとぞ。此は主人の恩を能く知たるあり。さもあらん。魔は悪者あれども。光徳國の魔は。佛法を護持すといへり。又天魔も佛の前にて。菩提心を發せるあり。維摩居士十萬の魔女を教化して。菩提心を發さしむといへり。されば菩提心ある魔は。人の善根を障礙すべからず。却て能守護すべし。今の猫も主人の恩を知るに此例なり。但し性具の悪なれば人の死骸をとらんとせしあり。此事洛陽の老宿。物語せられしま。書付侍るあり。此猫年久しくありて。魔民とあれるなるべし。世に邪見の人の死せるに。葬の時雷電す

るあり猫酋の所爲にや。一可畏しき事どもなり

◎第十六 猫に十二種の過失ある事

右にも猫を迎ふことは。其田鼠を食ふが爲なりと云て。鼠ハ田苗を食か故に。猫をして鼠をとらしむ。依て字苗に従へり。猫の目は卯刻酉の刻にハ圓なり。日中及夜半には細にして線の如し。鼻の端常に冷。唯夏至の日。一温暖なりといへり。蓋し猫ハ鼠の類なればなり。夫鼠を捕へ。或は人の爲に益ありといつべきか。然れども猫は山野等にも。必しも鼠大なる害をなさず。然れば猫ハ好むにたらざる者なり。又猫に十二の過失あり。一には好んで竈の下に入て身に灰をぬる。二には濕たる土地を歩みて疊の上ハ衣服臥具の上に登る。三には藥等を乾かれば。其中に糞し尿す四にハ障子を破りて出入す。五にハ爪を以て疊を爬破る。六には圍爐裏に糞す。七には蝦蟇等を食べひて。或時には疊の上に嘔吐して不淨狼藉たり。八には鼠を追て棚に跳り騰りて。茶碗油器を落して破る。九には高顯の處に於て葶尾す。十には他人の養る鴿。鴉。等を捕る。十一には食物を食殘して食器不淨なり。十二には鼠を捕へ希にして多くは乾魚及び肉肴を盗み食ふ。右十二の中に初の十一は道俗共に憎み嫌ふ。後の一ハ別して在家の惡む所なり。鼠も數多の過のりといへども。猫よりも優れり。猫は主人の恩分を思はずと云こと。大疏の説なれば總しての



大過失。大僻に當るべし。然るを世人猫を養て鼠を捕しむ。是猶塚を揚て塵を弭。溺を避て火に投するか如し。却て害を増のみ。又牛馬猿猴。狗。蛇。鸚鵡。雀。鶴。雉。蚌蛤。魚鼈。蟋蟀の類ひ。誦經誦呪の音を聞て。苦趣を脱去。人間天上及び淨土に生せるは。唐吾朝に古より例多しといへども。猫の聞法の力にて苦趣を脱せるはなし。予か寡聞の故にや。蓋し猫は罪深き獸なる故なるべし

◎第十七 唐則天皇后の事

大唐の則天皇后ハ武氏あり。故に武后と云。高宗皇帝の後なり。始め出家して寺にありしを。高宗見て悦んで后とせり。厚く佛法を信すといへども。淫放にして嫉妬の心も亦深かりけり。吾朝の孝謙帝に相似たり。高宗の永徽六年に。皇后王氏。淑妃を廢て庶人となし。別室に囚へたり。高宗憐んで問行して訪に。王后泣て曰く。若し昔を忘れ玉はずば。願はくハ再び日光を見しめ玉へど。高宗涙をかさへかねて言はく。此皆武后ハ所爲なれば。朕いかにともしがたし。暫くまで處置あらんと。武后此を聞て嫉妬彌盛になり云かば。大に怒て王后蕭妃の手足を切。酒壺の中に入れて曰く。二婢をして骨まで酔しめんと。四五日わめて王后蕭妃共に死せり。武后其の屍を斬て快しといへり。蕭妃死する時に咒して曰く。願くは武氏は鼠とあり。吾ハ猫と成て生々世々に。汝か喉を扼ん亦悲しむべし

と故に。鼠を天子の妃と云なり。此嫉妬の心深が故に。漢の呂後の戚夫人を殺せしが如くにせり。後に王氏蕭氏。數々崇りを爲を見て。武后懼れて多くは洛陽に居て。長安へハ歸り玉はざりけり。此事唐書及び通鑑綱目に見たり。此も猫は惡願より起れり。然らば鼠も惡なれハ強に鼠を愛して猫を惡へからざれども。則天皇后に大に功德を修せし人なれば。よも鼠の身をうけじ。蕭妃ハ自ら既に猫とならんといへり。鸞頭藍弗か。惡願を發て飛狸となりしが如く。蕭妃も猫とされること疑あし。又日本の俗説に。猫は姪女の再生なりといへり。唐の説と事殊なれども意相近し。然ともも猫も本有の獸なれば。大日經よも説り。但恩を知らざる獸なれば。養ふべからず。涅槃經にも猫を養はざれど誦め玉へり。沙門何ぞ願みざる高野山に猫なきこと一貴こそ侍れ

◎第十八 讚州香古の地藏の事

讚岐國鶴足郡。香古村に往年地藏堂あり。御長八尺の地藏尊の靈像ましくて。感應殊よ揭焉あり。天正の比兵革しばく起て。伽藍皆灰塵とされり。爾しより來た。百有餘年。古老相傳へて。此の地藏尊の靈驗明かあることを知れり。若し瘡病を患ふ者あれば。老翁老婆をど。我よく此瘡を治すべしとて。夜半に四衢道中へ出で。虚空を召さて呼て曰く。香古の地藏様。香古の地藏様。某甲か瘡を落し玉へ。鉢袋をして供せんと。等閑に白て歸



夜中に剽を磨て。佛前に供養せ。此を香古の地藏に上ると想に。翌日瘡影もなく落  
けり。國中皆此風にて。何人も瘡を治せり。其外の靈驗居多なり。此を以て推すに。往年  
伽藍ありて。万人信仰の掌を合せ。四衆歸依の頭を低たりし時の利益。いかばかりなる  
らん。傳記もなければ。聞ゆること少なり。唯老宿の口碑に。瘡病の落ることのみを傳へ  
て。今に靈驗新なり。靈驗記に誌せる。善度寺の地藏尊と云ふ此事にや。不審。不思議や  
。時地藏尊の利益を施し衆生を攝化し玉ふ運數にあたりて。元祿四年に。彼香古の地藏尊  
の御首ばかり残りてありしを。村民大守に奉れり。前の讚州刺史從四位左近衛少將源  
頼重公。此事を開玉ひて。本より淨信決定の人なれば。即ち佛工に命じて昔の如くに。  
坐像八尺の尊像に作り。莊嚴美麗にして。香古村に一字の堂を建立し。供料若干を入。僧  
某甲を供養の承事とて。毎日の修供怠らすありけり。初め尊像を修飾して。高松の城下  
に暫く安置し。諸人に告て禮拜結縁せしめ玉へり。衆人渴仰の歩を運び。歡喜の眉を開け  
り。ありかたかりける事どもなり。抑古老の傳に。夜半に四衢道中に出て召くは。實に  
地藏尊の六道を回りに。有縁を救ひ玉ふ時にや。沙石集に記せる。老翁の。地藏尊の晨朝  
に門前を通り玉ふを拜せしに心同じ

◎第十九、江戸魚籃寺の觀音利生の事

武州江戸。芝に魚籃寺と云あり。本尊は魚籃觀音あり。天和年中の事なるに。細川越中守  
殿。廐の水過失ありて。首を刎らるべきに定りて。太刀執後に廻りて。振擧ければ。太刀  
段々折てけり。若太刀のあしき故にやとて。又餘の太刀を代るに又三つに折けり。奉行  
不思議に思て。主君へ消息を白しければ。即召して問玉はく。汝何の術あつてか。かゝる  
不思議はあるぞ。若奇特の守や帯せると。彼者答て曰く。僕何の守もあらず。又術を習へる  
ことも侍らず。只毎日寅の時に起て。魚籃寺の觀音へ詣り。南無大悲觀世音今世後世能引  
導と。唱へ奉ること既に多年なり。疾風雷雨すれども終に怠ることなし。只今死地に赴  
くにも一心に觀音を念じ侍ると主君此を聞て即ち罪を免し玉ひけり。其者今に存命して仕  
へけるとなん。此事諸人普く知れり。普門前に刀尋杖々壞と説ること虚しからずとて。或  
人此を描て魚籃寺へ掛たりければ。江戸中の貴賤男女。夥しく參詣して。信仰日々増長  
せり。今に繁昌の地なり。予元祿二年に往て親たり此を拜せり。彼の紀州の女と相似たり  
。紀南江東地異ありといへども。地藏觀音の利益趣き一般なる者なり。

◎第二十 泉州牛瀧五郎兵衛三十三所巡禮の因縁  
泉州牛瀧は大威徳明王應現の靈區なり。寺院三十餘宇。台徒密宗相半せり密宗を本坊方と  
号す。十七宇あり。其餘は皆台家の徒にして穀屋方と名く。西室院と云あり。台徒なり。



元祿四年十月廿一日に。佛餉を取に諸方へ出すべしと思て。村人五郎兵衛を雇ふ彼男種種に辭しけれども。強て雇て。廿一日の夜は西室院に宿せしめ。廿二日より出すべしと思ひけり。さて廿一日の夜五郎兵衛起て外へ出けるを。東司へ往ならんと思て。戸を閉と言ひれども。唯諾もあくて出けり。住持起て自ら閉て寐けり。廿二日の旦五郎兵衛を呼に在ず。親の所へ尋に人を遣はせども亦居ず。渾て往方しれずありにけり。諸人集りて種々に僉議せしかども。遂に知ざれば。諸人あされてぞ居ける。西室院の傍に瀧上院と云あり。無住にて久しく荒たり。廿四日の晩に瀧上院にて。人のちめく聲しけり。諸人怪みて能く聞ふ正しく人の聲なりければ。寺の中へ入て種々に尋ね求むれども人なし。天井へ登りて求むるに。片隅に纏にて縛られたる人あり。こはいかにと燈を挑て見に彼五郎兵衛なり。五を縛られて半死半生の體なり。諸人仰天して縛りながら。西室院へ昇ゆきて。藥なと飲せければ。漸く人意付けり。さて是は何人の所爲ぞと問に。五郎兵衛涙を流して答て曰く。我夜起て便所へ往んとする。僧衆二三人來りて呼玉ふま。隨て瀧上院へ入りけり。僧衆笏を持して我に與へ。繩を糾しむ。各四尺にして六筋あり。我糾るに。僧衆一筋へ我帯にせしめ。五筋を以て五體を縛り玉へり。而も聽て曰く。汝は大惡人なり。汝か父祖より伽藍の木を偷み伐てと數度なれども。我慈悲を以て免せり。汝も幾度偷めり

。日汝先年木を伐時に。謬て材木に壓れて死せんとす。其の時に願を發すらく。若命を全ふせば。必ず三十三所を禮すべしと。故に我汝か命を延ることを得せしめたり。然るに汝が難を免るといへども微塵も佛力あることを知す。其後終に巡禮の願を思ひ出すことさへあらず。況や巡らんをや。汝若是より十八回巡禮し。始め三回は既の行にて巡りは。壽命を延ることを得て。現世安穩後生善處なるべし。若し巡禮せずん壽算二十五歳にして。未來には地獄に墮すべしと。呵嘖し玉ふ。其の恐しさ喻ん方なし。我偷みしことは月日時刻も違はせ。父祖の偷みしも亦爾なるべし。材木を壓れし時の立願も。聖僧の仰に違ふことなしとて。悲しみけり。今年廿四歳なれば。二十五歳の壽算の明年にて盡ぬ。父母親族此を聞て。悲歎すること限りなし。關山の大衆群り集て。驚歎怖畏しけり。父をば市兵衛と号す。左右明日より巡禮を出て懺悔せよとて。廿六日より。父子共に三十三所の巡禮に出けり。聖僧の教の如く。先跣の行にてぞありける。見人聞人且は悲しみ。且は懼れせと云ことなし。此事五郎兵衛が繩を。解たりし僧の物語を予面會聞り。故に殊に此するなり。凡そ世人の常の情。厄難に逢時は。種種の願を發すといへども。難を免れて後は。終に打忘れて善を修せず。是佛菩薩を欺誑し奉るなり。今此人は佛物を盜せる罪のみにあらず。又諸佛を欺く罪あり。故に大威徳明王。聖僧の形を現して罪苦を救ひ。又諸人よ



罪を恐れて。修善を勵ましめ玉へり。抑此明王は。西方蓮花部の教令輪身なり。六面六臂六足を現するは。六道の衆生を濟度して。六蔽を對治して。六波羅蜜を満足し。十八界を淨めて。六大平等。本不生の。一實際に引入し玉ふ相貌にして。即ち觀自在尊と。内證一體あり。六面六臂六足は。六觀音を表す。十八は緣日と義相互れり。準胎佛母の十八臂。又此義なり。故に三十三所の巡禮を。教玉ふあるべし。三を以て六に乗する數なれば。初め三度は跣の行といへり。合して十八回は。本尊の面手足と相稱へり。又十八は金界の九會。胎藏の九尊なり。十八道に觀音を本尊とすること。相叶にあらすや。况や觀音は。此土の衆生に有縁にして。三十三身を現えて。十八地獄。六欲天。十八梵天。凡そ三界六道の衆生を濟度し玉ふ。されば古より。人多く巡禮して。福を得ること少なからず。有智有行の僧の。必ず此を善とすべからず。俗士女の修善まは。最も相應なり。巡禮の間。潔齋して房事を止。肉辛を斷し。或は至心し念佛讀經し。眞言を誦するあり。豈末世相應にあらすや。然れども巡禮の間。諸方にて偷盜をあすあり。又伽藍の柱壁等に。明に書付する等の事は。大罪なり。慎ますんばあるべからず。若巡禮せば。其間は八齋戒を護持せよ。若齋戒に堪ざる人へ。必ず五戒を護持すべし。尙勤めて常に念佛し。經を誦し。眞言を唱べし。然らざして放逸無慚ならば。又損を拍くこと多かるべし

◎第廿一 洛東清水寺の前にて巡禮者異相を見る事

貞享年中に。關東の巡禮者二人。清水に通夜しけるに。夜半過に忽然として青色赤色の二鬼現して庭前に火を燒き。遅し〜と云て居けり。二人は心魂も身にそはず。恐ろしと云計なし。息を合せず一心に觀音を念して住す。暫く有て齒二十餘なる女人。泣く〜來り。二鬼其女を捉て火中に投入れ種々責て。二鬼及火忽然として消ゆ。其女も蘇りて泣く〜歸りけるを。二人の巡禮。怪しみて見送りければ。三條通系尾の何某と云人の家。二階の牕より中へ入りぬ。巡禮彌怪しみて。夜の旦を待て。物買體にて店へ入りけり。さて内を見るに。彼の清水にて責られし女人。二階より降けるが。色青く憔悴して。あらくろしといへり。巡禮聞て。主人に問く。輕忽の事にて侍れど。病者と見侍るハ。君の妻にて侍るや。何なる所勞ぞやと。主人の曰く。我妻にて侍り。何の病と云こともなく。唯夜々恐怖夢を見侍りて。安く眠ることを得ず。かくは焦萃侍るなり。其時巡禮耳語て曰く。稟は恐れ多く侍れども。仰を承はれば。若し所勞の平愈も有べき歟と。覺ぬ侍るありとて。昨夜清水にての消息を具に語りければ。主人腹立て入りけり。さて妻が病ひ醫師の力にも及ばず。夜眠らざれば羸瘦日に増して。今はかうと見ければ。夫も爲方なく。私に妻に語けるは。先日巡禮我に語りしは。しかくの事なり。汝が夢は何事ぞや



と。妻顔うて赤めて。暫くありて曰く。今は何をか隠し侍るべき。巡禮の白す條。一も詐はりにては侍らすとて。終に暇乞て。出家して懺悔せしかば。後に其の苦しみを脱れるどなん。此の女も何なる宿業現業のありけるやらん。夢中ながら。現に鬼の責を受たり。莊子が不善を幽暗の中に爲ものは。鬼得て誅すといへる。實あるかな。又此事二人の巡禮の見けるも。觀自在尊の神力を加して見せしめ玉ふにや。男子も此例ありといへども。女人は殊に罪深ければ。さもあらんかし。但し法滅盡經には。法滅の時は。男子は不信にして沙門を見ること糞土の如く。壽命短促にして。四十にして頭白く。姪姪として精盡て中天去。惡人轉多して海中の沙の如く。善人甚少して。若は一若は二からん。諸天泣して。水旱不調にして五穀登らず。疫氣流行せん。其時に女人へ正信にして。多く善行を作し。壽命長遠にして。八十九乃至百歳をあらんといへり。今世に儼尼女に淨信の人あるは。如來の懸記に叶へるならし悲ひかな

◎第廿二 或武士現に鬼の責を受る事

或城主の家中。村松佐助と云武士あり。此者病ありて。奉公もならず去て醫店せり。其病は癩癩などに似たれども。而も病証當時の名醫も見定ることあたはず。多人聚れる中にても。彼の病發ると面色青くありて。後には宛轉て號叫終に絶入す。一日一夜ばかりあり

りて。又蘇りて常の如し。其外風寒暑濕等の病あることなし。食物も常の如し。既に蘇りて後に。人其病の消息を問ふに。我が膠漆の友に語て曰く。病の發ると人の見る時。遙に虚空の中に老婆の音にて。ふかうち。とよぶ。我耳にのみ入りて。諸人はしらす我れ此の音を聞と。恐ろまき喩ひんかたあし。其聲漸々に近くなりて。可畏しき姥來りて。我を捉へ遍體を拈る。其痛み言語も申がたし。終に拈り殺して去る。されば絶入するなり。十日も安穩にして。又發る時右の如しと。此を聞人不思議に思ひ。若し汝が生來。大惡を作りやと。問に。佐助答て曰く。我生れてより大惡あることなし。傳へ聞に我祖父。家に使ひし老婆を。非理に殺せしことありと。若此の怨靈にてやあらんと。種々に追福すれども。其効しなして悲しみけり。業力の持する所。命も全くて今現に住せり。若し此人出家して懺悔し。大威徳明王の眞言を持念せば。此苦みを免るべきに。其程の信もなきにこそ。一不便の至りなり。大威徳尊の三昧は。怨家を降伏し。惡靈邪魔退治す。又惡夢多き人は。此尊の眞言を念ずれば。即ち止む。隨求陀羅尼の功能の中にも。惡夢不能侵と説り。此人の目にのみ見て。餘人の見ざるは。此も夢の類や。夢は獨頭の意識の所爲なり。大威徳明王は。西方妙觀察智の教令輪身あり。九識を轉して五智を得時は。第六意識を轉して。妙觀察智を得。故に意識の惡をば。此尊能消除し玉ふなり。問祖父の殺せ



る姥あるに。孫に害を爲し何事ぞや。答殺せる人自ら受ざるは過去の善力強くして。惡靈便を得ことあたはざるあり。其子孫に酬は宿善の力弱く。積惡の報來れる人あるべし。されは惡も積らざれば身を亡ぼすに足す。故に惡積で後に其報を受く。嚴母か預め墓を掃ひしは是あり。今諸侯の家にも多く怨靈ありと聞。皆二代三代五代までに終に止す。此れ惡の積れるなり。史記にも累代の將ハハ祥の家ありといへり。此天子の勅を受くといへども。多く人を殺すが故なり。善も亦爾なり。積て後に名を成す。于公か門を高くせしは是なり。但し怨靈ある家なりと云。或は德を修め。或は出家せば。何の祟りかあるべき。不祥は德に勝すといへり。設復吉祥の事あるべくとも。不善を作ば。即ち滅すべし。呂氏春秋に。祥は福の先あり。祥を見ても不善を爲し福に至らず。妖は福の先なり。妖を見ても善を爲し福に至るといへり。故に聖人は未然を慎む。太公か作置に曰く。黃帝の上に居て。備々として深淵に臨か如し。大舜の上に居ては。矜々として薄氷を履るか如し。禹人の上に居て。慄々として日を満ざるが如くす。敬怠りに勝則は吉あり。義欲に勝則は昌なり。日に一日を慎むときは。壽終るまで殃あしと。又詩に曰く。天の蓋し高しといへども敢て局まらずんばあらず。地は蓋し厚しといへども敢て躋せせんばあらずと。是聖人の常の用心なり。常人の災殃を受るは。皆怠慢の作すところなり。儒工既

に爾なり。況や釋氏をや慎まざるばあるべからず。恐れずんばあるべからず

◎第貳十三 攝州の人現報を受る事 附天狗の事

攝津國六甲郡。森部村に。なげさんと云相撲提あり。攝州にて名を得たる上手にて。力を恃んで貢高なり。妻あり互相に情深かりしが。産難にて死しけり。なげさん愛別離苦に逢て。道心や發りけん。出家となりて。宗林と云けり。一兩年は念佛唱へて。能勤めけるが本願道心なれば。程なく衰て。圍碁を好み。飲酒食辛。度なく。任侠の物語のみにて。日を暮し夜を明しけり。貞享の比。武庫川の側を通りけるに。後より彼の亡せし妻追來れり。何となく可畏まきて。足ばやに我庵へ歸りて見るに。武士三人在たり。何人ぞと問ば。武士答て曰く。我々の尼崎の者あり。汝何ぞゆるくとするや。しらすや此村の人。皆不曰く。汝が壯年の時に。種々の惡事を作が故に。今聚り議す。汝を捉へて殺さずんば。後の害あるべしと。即ち一の珠を以て。宗林か眼まわて、見せしむるに。諸人聚り議するを見る。宗林驚て。昔の脅力を出し。我遣次には人に殺されじと。獨言しけり。傍るを見るに。小兒草を刈に出けるを。即ち往て鋤を奪ひ取りて持す。小兒ども。宗林か狂せ

るを見て。村に歸りて。語りければ伯父來りて見るに。即ち彼鋤を以て害せんとす。而も我卒爾にハ村の人に殺されじとの、しりけり。又三人の武士も。我等此にあらは。何ぞ卒



爾に人に殺さすべしやと言けり。伯父仰天して村へ歸り。今は實に村人聚りて如何すべきと議しけり。遂に種々に賺して捕へ。鎌を取りて縛りけれども。力常より強くなりぬ。木臼石臼材木などを前後に結付て。動ぬ様なしけり相撲の弟子ども來りて。笑て曰く。攝州にかくれなきあげざんと云れま人の。かくあさましく他人に制せらるゝことやはある。若し此の結付たる物をあげば免すべしと。即ち石臼等を擧。人恐れていよく材木などを添て。堅く制しけり。親族聚りて曰く。是大魔の所爲ならんとて。或僧を請して心經を誦せしむるに。彼の武士は去りて。宗林か目にも見ざりけり。後には漸く正氣になりて。本末の因縁を自ら人に語り。懺悔して念佛しけり。宗林壯年に非理に三人を斬れり。出家となりしけ妻か菩提の爲なるに。後にの懈怠して園基をせし故に。妻か靈境して恨みたるならん。又三人を殺せるが。今三人の武士の形を現して。迷はしたるならん。されば苟且には重罪の人なりとも。死罪に行はざれ。況や罪なきを殺さんや。宗林が殺せるは。一人は盜人なり。我物を盗みたるにもあらず。他人の物を偷みたるを。其人既に免せり。しかるを宗林殺せり。二人は乞食あり。此は罪もあさに。只なぐさみに斬れり。故に現報を受たるあるべし。此宗林左右道心發らずして。終にの又念佛も懈怠しけるが。近比中風をよみて苦しみ。今現に森部村に居す。此事の宗林が自ら語りしを聞たる人。予に語れり。故

に殊に記す。三人の武士眼に一の珠を當て、見せしは鬼神の所持の珠ならん。寛文の末に隱岐の國に。圓清首座と云禪僧あり。生身に天狗となりて。日本の名山靈窟等を巡り。三年天狗の中に住せり。後に還源の心生えて。又故郷へ歸り。初めは忙然として正氣をかりし。漸く人心付て。天狗の中の事を語る。小天狗大天狗と云あり。大天狗となれば。一の珠を得。赤色にして瑪瑙の如し。此の珠を目にのつれば。三千界の事皆見ゆ。若身に當れば。三千界の事皆を聞ゆといへり。宗林が見し珠は是ならん。三人の武士の天狗あるべし。又百喻經に曰く。昔し二りの鹿舎爾鬼あり。共に一の籠。一の杖。一の履あり。二鬼共に三器を諍つて。各二を得んとす。二鬼紛紜として竟日平ならしむることを得ず。時に一人あり。來て見て問て曰く。此の籠。杖。履。何の奇異あつてか。汝等諍ふて各怒るや。二鬼答て曰く。我か此籠の能く一切の衣服飲食牀褥臥具資生の物盡く中より出づ。此杖を執れば怨敵歸伏去て取て與に諍ふ者なし此の履を著は。能く人をして飛行去て聖礙あることなからしむと。此人聞竟て。鬼に語らく。汝等小らく遠。我當に爾が爲に平等に分つべしと。鬼聞て喜て遠く避る。此人即時に籠を抱き杖を捉。履を著て飛。其時に二鬼愕然さて。竟に一をも得ず。人二鬼に語て曰く。爾等をして諍ふ所をからしめたりと。二鬼は人にたぶらかされて。我が稷揉る體にて。空しく虚を仰きぬらん。吾朝に右



より傳ふ。天狗には隠鏡。隱笠。打出の小槌と云物ありと。今の三器能類せり。宗林が見し珠も亦此類あるべし。天狗亦毘舍闍鬼のたぐひならん。又大和の初め高野山に壘屋の忠兵衛と云者あり。極月廿七日に掛を乞に回りに。腰に帳を付たり。或所にて知己の僧に逢ふ。彼の僧の曰く。我の伊勢へ參詣せんと欲す。汝をつれてゆかんと。忠兵衛極めて正直なる者なれば。即ち諾して帳を近處の寺に預けて。廿七日の己の時に彼の僧と共に高野を出で、即日の午時に伊勢へ參り。又近江の石山。三井寺。京の清水。愛宕等を経て。竹生島へ參り。其より富士山を経て。廿八日の午の時に江戸の日本橋に忙然としてあり。相知たる人。高野寺より小石川へ使に往たるか見て。汝は何事に此にゐるぞと。問へとも答へず。此者高野の事を能く知たれば。天狗の所爲なることを知て。即ち芝の寺へつれ往てければ。漸く正氣になりて。正月廿三日に高野へ歸りけり。後に語らく。富士をどほる時は山を足下に見たりと。此も彼の履をはけるならんか。高野山に此例多し。故に煩はしく記せず

◎第廿四 大坂の人地藏菩薩を造立せんと誓て病痊し事

大坂北御堂の前に。書林毛利田氏の人あり。相知たる人一向宗にて。佛は但阿彌陀佛のみありと堅く執して。餘尊を信することなかりき。元祿三年の夏大に病けるに。凡そ藥の治

する所にあらず。齋拵。倉公。扁鵲。華佗の術も。及ばざるばかりあり。然るに森田氏は本より地藏尊を信じ奉り。常に寶号を唱けるが。或時彼の病人の方へ尋訪て。あまりに不便に思ひければ。密かに地藏尊に祈願すらく。今菩薩の加持力にて此病を平愈せしめ玉は、必ず彼者に孔方兄一緡を出さしめ。地藏菩薩の尊像を造り供養し奉ると。等閑に祈りて。寶号を唱ぬけり。さる故やらん藥餌をも飲ざるに。彼の病ひ漸く軽くなりて程なく愈にけり。然に森田氏も彼事久しく打忘れて。言出さざりけるま。或夜彼の人の下女か夢に。一人の僧杖つきて來り告玉はく。汝か主人病める時祈願して。我像を作るべしといへり。故に我病を平愈せしめたり。何ぞ忘れて我像を造らざるや。早く作るべしと。彼女夢覺たれど露ばかりも。しらぬ事なれば。何なるわだゆめならんと。人にも語りざりけり。然るに十餘日を経て。又夢みらく。前の僧來りて。何ぞ早く我像を作らざるや。作らずんばあしかりなん。此事は本屋毛利田可右衛門よくしれりと。あら、かに告玉へり。夢覺めて。あまりに不思議に思ひて。主人に兩度の夢を語りければ。主人膽を潰し。さることこそあれとて。即ち森田氏を召て語り。共に喜べることを限りあし。森田氏予に此事を語りけるま、いそぎ像を作り玉へと。予も勸めけり。其後程なく石像を作り。比丘僧某甲を請て。開眼供養し奉り。攝州澤上江村。母恩寺に安置しけり。不思議なりける



夢想なり。爾菩薩の催促し玉ふあらば。など其主人に夢みへずして。家婢か夢に入玉ふや。答佛菩薩の物に應ずるや。月の水に印するが如し。水清ければ即ち現す。濁る時ハ現するに由るし。豈江海池沼溝渠潢潦の差あらんや。今主人は地藏尊を信せず。されば地藏の月の泛ひべき信水なし。現せざることも亦宜からずや。曰く然らば何ぞ森田氏に告玉はざるや。曰く森田氏は本所願せし人あり。若此人自ら夢想といはば。聞者言べし。人を誣ど。或ハ又先の病人も此を肯はずして。毀謗の罪を得ん。故又菩薩能鑒て彼の婢が夢に。再度まで入り玉ふなり。思ふよらざる婢が夢みたることなれば。衆人の信伏すること雷電の如し。誰人か此間に疑を入れんや。

◎第廿五 観音を念して雙痊りし事附大師灸を教へ玉ふ事  
 浪華に久堀養宅と云醫士あり。三年の間耳聾して聞えず。此を悲みて種々に。療治すといへども効しなし。今は佛力にあらすんば。あたへじと思ひ。一心に観音を念して。毎日普門品十卷誦誦す。知友大津屋長兵衛。準胝佛母の印板を摺て。表背を具し。予をして開眼供養せしめ。養宅に贈て曰く。御邊観音を信じ玉ふ間。観音の像を贈ると。養宅倍信して怠らず普門品を誦じけり。二十餘日を経て後に。夢中に一人の老翁。枕上に來て告て曰く。汝か病は他の方劑にては瘳じ。四物湯に知母。黃槩を加へて服用すべしと。夢覺て不

思議に有がたく思ひ。即ち夢想の如くに藥の調合して服用せまかば。耳漸く明に聞ぬけり。彌力を入れて服せしかば十に九までハ平愈せり。此事元祿三年の春の事なり。予も養宅に判識して。始末の因縁面會聞けり。又讚州の笹山禪閑は本京の人あり。寛文の始め江戸にありて。久去く瘡を病けり。切樂秘灸。呪禁符守り。神道佛道。巫覡山伏までを頼みて。種々に治すれども。其効しなま。あまりハ疲れて思らく。我何の宿業にか。かゝる病をけ得たる。我久く密教に歸して。大師に歸命し奉る。然るに今種々の事をあせども効しなし。無頼かを如何せんと。暫く眠りたる夢に。香染の衣を著たる高貴僧。來りて告玉のく。汝か瘡は。他の術にてハ落べからず。何ぞ大椎に灸せざるや。早く大椎に灸せよと。夢覺て見るに。猶縹の如く。煙の如にして。大師の立玉へるを拜す。即ち喜びて。大椎に灸すること十壯せしかば瘡落けり。予笹山氏の説を面會聞り。予智て瘡ををやみて。久しく苦しみけるが。大師夢想の灸ありと思て。大椎に灸すること十壯せまかば。即ち瘡落けり。笹山氏は篤信の人なれば。大師告玉ふならん。曾普賢延命の眞言を誦すること若干百萬遍。観音の眞言を誦すること數百萬遍。又大佛頂陀羅尼。一万八千遍を誦せり。未來の得脱たのめしくこそ。

◎第廿六 地藏。如意輪觀音一體の事



地藏如意輪の。内證一體の習ひあり。高野山寶性院有快法印の讚じ玉へる。地藏の和讃の中に。さて又三部の曼荼に。觀音持寶金剛と。一體大悲の門に出で。衆生を攝化し玉へり。といへり。持寶金剛は。如意輪觀音の金剛名号あり。如意輪は蓮花部の中の寶部の尊なり。地藏は南方の金剛幢菩薩にして。寶部の中の蓮花部の尊なれば。同體あること明かなり。又地藏は六道の能化にて。六地藏の形を現じ玉へり。觀音も六觀音とて。六道の能化なり。中にも如意輪は六臂廣博の體にして。普く六道に遊び。衆生を救度し玉ふ。六臂は六道に當れり。右の第一思惟の御手は。地獄道の劇苦を如何が濟度せん。思惟し玉ふ相あり。第二寶珠の御手は。檀波羅蜜の如意寶を持して。所求に隨て。一切の財と。法と。無畏とを施し。餓鬼道の慳貪惡習の業を救ひ玉ふ相なり。第三念珠の御手は。畜生道の能化なり。念珠は智慧を表す。一百八顆は百八三昧。一百八尊の智にして。百八煩惱を破す。粒々斷せるは。斷漏の相なり。母珠は即ち果位。阿彌陀佛を表す。達磨と号するこの。達磨は法の梵語にして。西方の法師を云なり。線貫の觀音を表す。觀音は因位。即行者なり。大師の秘鍵に觀在薩埵は即ち諸乘の行人を擧と云は是なり。因位の行人は。百八三昧を皆證する身あれば貫けり。念珠は總して智慧を表すれば。畜生道の愚癡の暗を照して。百八三昧を得せしめ。光明遍照の德在す。西方阿彌陀佛。智慧門の佛の果位に至

らしむる相あり。觀經は淨土に生ずる者は。百法明門を得と説く。義相近し。左の第一按山の御手は。山は安住不動の相なり。然るを今按す。倍安住不傾動の義あり。阿修羅は天帝釋と常に鬪諍して。心は恐怖多ければ。無畏を施して。安穩に住せしむる相なり。第二の蓮花の御手は。人道の能化なり。一切衆生の内心に八分の肉團あり。此を心藏と号す。菩提心論には凡人心如合蓮花。佛心如滿月と説く。觀經には密意を以て。念佛者。人中芬荼利花と説く。此妙法芬陀利花を。人人具足し。箇々圓成せり。早く開て佛果を成せよと示し玉ふ相なり。第三輪寶の御手は。天道の能化あり。諸天は利根なれば。法輪を轉して度し玉ふ。是は輪の廻轉の義あり。又六欲天は。六塵の欲に耽り。色。無色の天は。三昧の味に耽著せり。彼の著を破し玉ふ相あり。是は輪の摧破の義なり。されば如意輪觀音は。一體に六臂を現して。六道を救度し。地藏の一身を。六體に分て利濟し玉ふ。大悲本誓一般なる者なり。此意地藏延命經にも見たり。○又準胝佛母の蓮花部の佛母にして。喻へは世間の母の如し。故に別して大悲深重あり。故に準胝觀音を念すれば。男子を求め。女子を求むるに願ふ隨て孕妊し。産生までも。安穩なることを得と説けり。天台の止觀には。準胝觀音を人道の能化なりといへり。又準胝の眞言を念誦するには。身服の淨不淨をも擇ばず。五辛酒肉を食し。及び妻子を帶すれども。常に念誦するに。必ず悉地を得と



説けり。但し是は在家に約す。末世の僧は極めて清淨にすと思へとも。不淨なること甚多し。况や在家の人をや。光明眞言。如意輪觀音の眞言。大佛頂。及不動の眞言等も。淨不淨を擇ばざる旨あり。別して佛の大悲深き故なり。中にも準胝の軌の説。文言明かなり。喩へば世間の母の。子に罪犯多けれども。矜愍して過を見ざるが如し。ありがたき本誓なり。末世今時の人は。越三昧耶の罪多し。又身は破戒無戒なれば。不淨少からず。貧窮無福の身なれば。衣服も亦淨きことを得ず。最も準胝。如意輪。大佛頂等に歸依し奉るべし。かくいへばとて。身服不淨にても善と云はわらず。能く清淨にすといへとも。謬りて不淨なること多去。故に隨分に清淨にすべし。若此説を依憑として。怠慢の心を生せば。彼の專念の宗に。本願に誇ると。何ぞ異ならんや。又如意輪地藏は。内證同體なれば。地藏の眞言も。淨不淨を擇ばず。常に念誦すと苦しからじ。如何とあれば大悲闍提の菩薩なれば。順縁逆縁皆な救ひ。智者愚者同く度し玉ふが故よ。又大佛頂。如意輪。不動。地藏尊は一體の義あるが故に。大佛頂經には妙湛總持不動尊。首楞嚴王世希有と説り。長水の意の上の一句は如來の三身を讚すと解せり。然れとも今祕密の釋を作し。菩提義に約すれば。妙湛總持は大佛頂の咒の德を歎也。總持の陀羅尼なるが故に。不動尊とは。即ち咒の心。咒字本不生。堅固不動の德を歎するなり。地藏經は中心不動咒字本不生と説

けると一般あり。又經の長行に。十方の如來も此咒の心よ依て正覺を成すと説も。即ち咒字あり。大日經の普通眞言藏品に曰く。是中一切眞言之心。汝當諦聽。所謂阿字門。念此一切諸眞言心。最爲無上。一文又轉字輪漫荼羅行品に曰く。善男子。此咒字。一切如來之所加持。眞言門修菩薩行。諸菩薩。能作佛事。普現色身。於咒字門。一切法轉是故祕密主眞言門修菩薩行。諸菩薩。若欲見佛。若欲供養。欲證發菩提心。欲與諸菩薩。同會。欲利益衆生。欲求悉地。欲求一切智智。者。於此一切佛心。字也。當勤修習。文又阿闍梨眞實智品に曰く。所謂咒字者一切眞言心。從是遍流。出無量諸眞言。文是等の文皆を咒字を眞言の心と説り。大佛頂經に呪心と説るは咒字なること明けし。又大佛頂は金輪佛以なり。悉字を種子とす。悉字は不字を體とす。即ち釋迦如來の種子。不字と同あり。如來頂上より光明を放ちて。此咒を説玉ふ。即ち此を釋迦金輪と号す。胎藏の釋迦院は諸佛頂の種子こと知ぬべし。又不字の中に不の聲あり。されば不字は不字を躰とす。故に大佛頂の種子。悉字をれとも。直に不字を呪心と云に防げし。又大佛頂の二千七百三十餘字は。皆不字より生して。不字に歸す。是甚深祕奧の義なり。此を不動尊と云あるべし。若佛陀義に約すれば。不動尊と者。即大聖不動明王あり。不動は菩提心の躰にして。不字を種子とす。或は不字を種子とす。即ち不字一躰の深旨。又地藏尊に相互る。不動の天魔を降伏し



。煩惱魔を摧滅する本誓なり。宜なるかな。文殊一たび此光を誦するに。摩登伽女。煩惱即ち滅して。不生の妙果を獲ること。故に不動。地藏。及大佛頂の内證。融通一味にして異あることをければ。地藏の眞言も。大佛頂。如意輪等の呪に例すべきあり。又金輪。如意輪。一鉢の習われば。地藏尊に同じ。凡そ諸尊の深旨を談すれば。悉く異あることなく。眞言の字義を説ば。皆一味あり。無盡の故に此に贅せず

◎第廿七 大坂玉造石地藏の事

大坂玉造。越中町。或人の浦に。古き石地藏あり。何人の作れるやらん知人なし。久しく井の側にあり。近比其近處の女人。内裙を洗濯て覺ぬす。彼の石地藏の上に掛て晒けり。其夜より彼女狂して口ばしり。赤裸にて走り回り。袂を両手にて覆て曰く。汝ぞ何ぞ不淨の内裙を以て。我か上に掛て晒すや。其罪甚深也。急ぎ洗ひ淨めて。罪を謝せずんば。あしかりあんど。自ら喚はりけり。隣家の人々。こはいかにと騒ぎて。正しく地藏尊の罰あらんとて。其女の母に教へて。淨水を以て洗ひ奉り。香花を供養して。懺悔せしかば。狂人も痊りけり○又或小兒彼の邊に溺りせしかば。謬て地藏尊に迷りかゝりけり。即時、彼の兒が肌葩大に腫て痛みけり。此も地藏尊の罰なりとて。清淨に洗ひ。香花を供養して。懺悔せしかば。身分の腫も痊りけり○又京東山稻荷の近處に。坐像八尺ばかりの地藏

尊あり。矮屋の中にありて。誰人の安置せると云ことをしらす。星霜此に古りたり。或時尾を葺改す時に。傭人草鞋を著ながら。地藏の肩及頭上へ上りけり。朋輩見て諷めて曰く。佛像の上へ勿躰なく。草鞋はさながら上ること。罪深かるべし。足代を搦へよと。彼者聞て曰く。他人の家ならばこそあらめ。地藏の宅を屋葺に何ぞ肩に上ることを尤め玉はんて。用ひざりけり。傍若無人の賤男の風俗さるありけり。彼者其夜より五躰身分。大に腫痛みて。三日の内に死しけり。初めより知さらましかば。免かる、ことらまらしむのを。既に善人の諫めを聞ぬさへあるに。身腫て後も改悔の心起らざりけん。別て不便にこそ侍れ

◎第廿八 大坂伏見鍛冶町地藏の事附佛罰の辨

大坂伏見鍛冶町に石地藏あり。何の時代に誰人の作れると云ことを知す。或女人は裙を。此の尊の上に掛て晒ければ。其より癩病を患みて。一生苦しみけり。又或人飛磔を此尊に中ければ。彼尊に石の中りたる所に。我身にも瘡生して。久しく患みけり。越中町。伏見鍛冶町。兩處の地藏へ。罰の事をのみ聞て。其餘の利生を聞ずといへども。是を以て推すに。香花を供養じ。寶号を唱ぬ。信仰歸依まなば。定めて揭焉の利益あらん。請後の君子重て記せよ○因みに記す。河内石川那。小吹村の淨土寺に。寶頭盧の木像あり。貞享



年中に。基村に五兵衛と云座陋の者あり。枅を以て。賓頭廬の頭を打破ければ。其より狂人となりて。何地ともなく失けり。尋ね求めければ。終に往方しれずなりぬ。現報かそろしき事ともなり。問佛菩薩は衆生を濟度せんと誓ひ玉ふ。中にも地藏尊は。大悲闡提の菩薩にして。順縁逆縁皆な救ひて。安樂を與玉ふと聞けり。然るに今現に罰を蒙りて。苦しむこと何ぞや。諺に神。佛と。漆の木と。蜂巢との邊には。立よらずといへり。請其説を聞。答是に三あり。一には佛菩薩の。諸法平等の心に安住し。無縁の大悲を以て衆生を利益し玉ふ。無縁の慈悲の。一切處に周遍して平等あり。能縁所縁を絶せること。猶虚空の如しと云こと。諸經論に明に説けり。中にも大日經には。心。虚空界。菩提。三種無二と説玉ふ。若人虚空を汚さんと思つて。仰で唾する者は。却て我面を汚すが如し。佛に所受あることなし。故に却て我が身に受く。又佛菩薩は我か身中。所具の功德なり。故に敬すれば必ず福を得。或は打或は踏ば。我か身を自を打踏なり。今尊像に石を擲らち。頭を打破りて。快よしと思は。出佛身血。殺阿羅漢の罪。五逆罪なれば。現に我身に瘡の生せる。及び狂せること。あやしむにたらず。此は花報なり。未來には必ず無間に墮すべし。此佛の罰し玉ふにはあらず。自ら我身を打。我頭を摧くなり。二には佛菩薩は罰し玉ふ事あらざれども。諸天護法善神。此非法の逆惡を見て。怒て罰を加ふ。性空上人の乙

護法。役夫の上人の上供米を偷めるを。怒て打殺せるが如し。又高野。丹生。新羅。山王。明神等。衆人に罪を恐れしめ。信を生せしめんか爲に。罰を與る等の如し。佛菩薩は。父母の子を思ふが如くに。衆生を愛愍し玉ふ。故に法花よ今此三界。皆是我有。其中衆生。悉是吾子と説けり。佛菩薩の父母なり。衆生は子なり。若子として父母に不孝にして。或は汚し踏。或は頭を打破ば。官家何ぞ此を罰せざらんや。且高野山の女人を禁する山あるに若し女人。或は邪見の人登る時は。護法神怒て掴み取て殺すが如し。此例多ければ。具に記しがたし。三は攝取の門には極重惡人ありといへども。一念十念にて。淨土に往生すと説き。逆縁も終に引攝し玉ふと説く。然れども抑止の日は密教に教令輪身とて。降三世。大威德。太元帥明王等は。極惡の人を降伏し。天魔を退け玉ふ。されば地藏尊にも。教令。輪。身を具して。是を大矣明王と号す。即ち軍荼利尊なり。何ぞ攝取の力のみにして。抑止の方便なからんや。諸法に遍して。攝取。抑止の二門相離れざるごと。鳥の二翼の如く。車の兩輪に似たり。但し梅檀香を取て。怒り罵り摧き磨して擲弄んも。其の香の餘薫。身に襲て久しく馨しきか如く。遂に逆縁も菩薩の引攝にあづかるべきなり。此意密教に殊に談する所なり。故に密嚴上人の釋にも。疑謗逆縁猶優三權教戒行。信歸順因誰比ニ顯乘智觀。何況信修。何況深行をや。といへり



◎第廿九 謗三寶の人臨終に惡相を現する事

世に三寶を誹謗する輩多し。此も吾が所尊とすべきを毀謗すれば。現に罰を蒙る例し多し。近比大阪久寶寺町、漆屋の十兵衛と云者あり。一向宗あり。平生邪見にして。露ばかりも信心あることなく。慳貪にして殺生を好む。佛法の世の費ありとて毀り破して。因果を信せず。僧を見ること賊の如く。佛像經卷を見ること塵堆の如に思へり。臨終の砌り。苦痛甚しかりしま。親類倚合て念佛を勧めけれども。一遍も唱へず。二手を以て虚空を搔て。大音を揚て。あらかあしと云て死しけり。屍骸を見るに。赤色にして火灸にあら人の如になり。手足もすくばりて。入棺することもなりがたかりけり。是正しく無間地獄に墮する相。現はれたるあり。其子は此に驚きて随分に追善を營み。改宗して淨土宗となり。信心堅固になりけるとぞ。又或諸侯佞臣の教に隨て伽藍を破却し。僧尼を還俗せしめ。佛像を鏝にて引切て火に焼き。或は河海へ投入。或は東司西淨の側に立たるあり。其人臨終に身大に腫て。熱すること焼か如くにして死せられたるとぞ。此も現に無間獄の相現せるなり。國主たる人のいよく善を修し。我が民をも教へて善を修せしむべきことなり。一國の王なれば。其國中の人の所有の善根も。惡業も六分が一。國王の善惡業となると。經中に説れたり。然れば國民善を修すれば國家泰平よして民榮へ。五穀豊か

に登る。若し萬民惡業を作れば。敵國まばく侵して。五穀稔らず。疫癘流行し。旱澇仍りに起る。此を以て例するに。一國一郡の諸侯も。其の領分の人の所造の善惡業。六分が一は。其の國主に屬すべし。慎むべし恐るべし。省みずんばあるべからず

◎第三十 唐の宋尉佛法を破して地獄に墮する事

唐の慧覺法師は。益州の綿竹縣。孝水の人なり。徳高く慈悲深し。他方に遊學して。後に綿竹に歸て。説法教化するに。諸人皆邪を翻して正に歸す。蜀の成都府の七十縣。皆競請して説法せしむるに。利益甚多くして。檀施山の如に積む。貞觀二十年に。綿竹の儒者宋尉と云者。佛法を毀謗して。慧覺の教化を受けず。曾て曰く。我れ佛を信せず。周公孔子を信す。然れども二度佛力を得たり。一には諸人我門の側に小便するが故に。我佛像を門の側に置くに。人小便せず。二には冬月雪降て。嚴寒骨に徹し。凜風膚を裂き。手龜り。頸縮る時に。木佛を破て。火に燒て自ら灸る。是の二佛の力なりと。聞者蹇心せずといふことなし。慧覺法師此を聞て。悲哀にたへず。書簡を便はして種々に曉諭して。佛法を信せよと勸む。宋尉怒て曰く。若し此の僧微異あらば試むべし。何の靈異かあらんとて。書東の慧覺の名を書たる處を取て。用て大便を拭ふに。即時に糞門裂て。脚起ことをぬす。喚て曰く。我れ死せんこと近しと。即ち慧覺法師を請して懺悔して。已後佛



に歸依し。經卷を書寫し。佛像を作り。僧を供養せんと誓ひけれども。正信やなかりけん一月か間。大に苦痛して。遂に死してげり。未來無間の苦しき幾何をや。悲しむべきかな。我朝にも神道を信じて佛法を破し。儒學に倣して三寶を謗する輩ら少なからず。況や數十年來。世清寧なれば學問はやりて。程子朱子の風を學ぶ者は初めて學に入て。未だ一卷の書をも解することあたへざる。黃口の豎儒も。五七卷の書を讀ば。即ち佛教を謗して異端なりと云。神道を學ぶ者は。釋氏を嫌て。天照大神の。曾て天魔と盟ひ玉へることを云。虛關禪師此の説を彈せり。剩さへ利を貪るか故に。諸國の神社の。社家と社僧と諍論斷ることなし。我か朝は聖德太子よりこのかた。佛と神とは本地垂迹の異にして。内證一體なること。處々の舊記に誌せるに。今唯一と号して佛法を排すること。却て笑に堪たり。如何ぞ一人の手を以て。古今天下の人の目を覆はんや。未來永劫の苦輪。かなしむべきかな

◎第三十一 濫大乘の人僻見の事

世に一等の濫大乘の人あり。初心未熟の荒凡夫。頓悟の法門を聞て。如來の密意。祖師の意趣を解することあたはず。文字は葛藤あり。何にかせんと云て。經卷を破て紙帳とし。又け襖とし。經を以て屏風を張。壁の腰張とする輩あり。俗士も邪見に入れるは。愛宕

の札。高野。熊野の札。寺より來れる祈禱の札を以て。襖の腰張とするあり。大邪見あさましきことあり。像法決疑經よ。文に隨て義を取は。三世諸佛の敵ありと云は寧ろ是にわらずや。昔の祖師學人の情執を破せんか爲に。木佛を燒き。經卷を燒捨て。猫を斬。母を害す。而も今時の淺識の輩。其跡ばかりを學んで。其實なき時は。文に隨て義を取らば。三世祖師の敵なりと云つべし。文字已に葛藤ならば。帟帳襖にも亦何ぞ心を留めんや。已に襖の寒を禦ぐことを知り。帟帳の蚊蚋の害を避ることを知らば。又何ぞ經卷の功德を生ずることをしらざる。又一等の禪者あり。唯講説を好み。而も談して曰く。因果はあることなし。人死すれば空あり。佛も無なり。祖師も無なり。今世に惡業を作るとても。未來をければ地獄餓鬼の苦もあることなし。佛を禮し經を誦するも。皆な虛妄の閑事なり。法花も梵網も皆を燒き棄よ。襖にせよ。我も昔しは因果ありと思へり。今止法眼を開て見るに因果あることなし。諸人疑を生ずることなかれと。又或人禪定を修し得ることあり。唯我心沙石の無心なるか如にあるべし。看經禮佛も皆地獄の業なりと教ゆ。庸愚の男。女此を聞て。下流船に帆を擧たるか如く快よく思て。今まで誦經念佛せし人も。即ち誦經念佛を打やめて。日夜に慳貪邪見。淫酒食肉增長せり。天魔の所爲にや。諸人此人を慕ふこと。蟻の腥肉を慕ふに似たり。是斷見の坑に入りたる者あり。一盲衆盲を引て。相引



て深坑に墮と云。是の謂か。既に禪者は教外別傳不立文字と云。何ぞ講説を事とするや。是多くの名利の賊を驅ることあたはざるが故なり。如來の拈花微笑。此講説にあらず。達磨大師。教相を講説ることを聞ず。彼宗密は禪海の巨鯨なりといへども。講説を多くすれば。尙時の人の毀りを免かれず。況や今時の頑才をや。然るを實に所得をふして。佛を罵祖を呵し。經を屏け像を破り。我慢の須彌。頂なく。貪欲の巨海。底をしらず。詩句及び世樂に耽著して。離るゝとあたはず。或人の現に魔民となれると下に記するが如し。或は法華。維摩。起信論等を講ずといへども。天台等の禪教共に細しき。祖師の疏鈔にも依す。唯胸臆の見を恣にして。漫に衆人を誑惑す。嗚呼悲いかな。流涕何の時か乾かん。若し看經禮佛も地獄の業なりといはゞ。謗三寶は何の業ぞや。若し因果なしといはゞ。汝は何ぞ剃髮染衣して。名を釋氏に偷み。身を伽藍に庇すや。若し與へて。因果なしと云は。向上の一路ありといはゞ。向上の法門は頓機に對して説くべし。何ぞ一向蠢昧の兒女。對して説や。未だ聞ずや。彼の不落因果の一句。既に五百生の狐身を得ことを。今時の人は人天戒善の機。或は念佛往生の機。或は眞言を持論して頓悟涅槃すべき機。或は結緣機なり。結緣等の機根は牛毛の如く。頓悟の機根は麤角に似たり。然るに人の機を見ることあたはざるは師の過あり。瑜伽論にも機に違して法を説は。罪深しと誠の玉へり。既に

機を辨すして法を説く。名利にあらずして何をや。若し奪て論せば。是自ら目瞶して。直に外道の邪見に入るあり。不信因果は一闢提なり。嗚呼佛種を斷せる者あり。老莊の儒釋に害ありといへども。尙老子も惡を止めて善に移ることを教へ。莊子も不善を顯明の中よ爲者へ人得て誅し。不善を幽暗の中に爲者は鬼得て誅す。人に明かに鬼に明かにして。而して後に獨り行ふと。いつて因果報應の理を説て。人を善に移らしむ。今時淺識の族らの講座に濫吹するは。老莊の見よりも尙懸かに劣れる者なり。買誼も此か爲に太息するに足れり。○又密學の徒。機かに凡即是佛の旨を聞ては。未だ其深奥を極めずして。即ち誇て曰く。我即大日。我即金剛薩埵。舉手動足皆密印あり。舌相言語皆眞言なり。邪正の心念皆三摩地なりと云て。酒を飲み五辛を茹ひ。綺羅を好み。妓童を愛す。絃歌の聲を聞ては愛執の情倍濃く。珍羞の味を嘗ては貪欲の心競ひ盛なり。富貴の門に趨ては諂諛の色面に現れ。瑜伽の壇に臨では欠伸の聲耳に聒し。若し持戒にして密教を學ぶ者あれば。即ち曰く。彼は小乗の人あり。唯眞言者は戒を持つべからず。如法衣を被べからずと。嗚呼悲しいかを。密教陵夷すること。一何ぞ是の如くなるや。我高祖初め勸操僧正に隨て出家し玉ひて。沙彌の十戒七十二の威儀を學し。後に延曆十四年。四月五日。東大寺の戒壇院に於て。具足戒を受て。比丘僧となり玉へり。而も御遺告の中にも。末世の弟子等



の。東大寺にして具足戒を受け。三介年練行せしめて。後に高野山に於て。密教を學しめよとの玉へり。又弘仁の御遺戒にも。顯密の二戒を堅固に護持して。淨戒犯することなれ。若し故に犯せば。佛子にあらず。金剛子にあらず。蓮花子にあらず。我弟子にあらず。我も亦彼か師にあらず。我か教誡を違せば即ち諸佛の教に違す。是を一闍提と名く。長く苦海に沈て。何時か脱することを得。我も亦永く共住して語りもせじ。往去れく。住することあかれ住することなれど。誡め玉へり。然るを自ら知すして戒を嫌ひ律を慢して。漫に表徳に誇る。甚しき人の狂亂するあり。悲ふべきかな。若し戒を小乘なりといは。高祖も小乗か。況や扶桑には小乗の人あきをや。又彼の密教の深旨を纒に解して。即ち即身成佛せりと思ふ人に。我試問はん。君か成佛の。三種即身成佛の中に。加持の成佛歟。顯得の成佛歟。抑又理具の成佛歟。若し顯得の成佛ならば。大日如來の如く。三無盡莊嚴藏を奮迅示現すべし。若し加持の成佛ならば。高祖の清涼殿の成佛の如く。何ぞ光明を放て。佛身を現せざるや。今表徳に誇る人を見るに。此二事あることあり。決めて知ぬ。加持顯得の成佛にはあらざることを。若し理具の成佛なりといは。地獄餓鬼も皆な本有在纏の如來なり。然らば君の即ち地獄の罪人と等しと。此時如何か答ぬんや。軒渠坐殺するに足れり。不空三藏は。既に除蓋障三昧を得玉へとも。毎日三時修法

を怠り玉はず。大師は即身成佛し玉ひしかとも。後には南山に移て。深く齋味を厭ひ斷ち。専ら禪定を凝し玉へり。又密嚴上人は練行年を積て。既に初位の三昧を證じ玉へり。未だ聞ず。上來の祖師。酒を嗜み。五辛を茹ひ。妓童を愛し。冰紈裘鞞を衣とし玉ふことを。又未だ聞ず。漫りに表徳に誇て。戒を破し持念を廢し玉ふことを。凡そ博學洽聞。異祖の如きことを得てんば以て止むべし。悉地の成就。三藏。大師。上人の如きことを得ば。又希ふ所ろなかるべし。今の人上來の祖師の德行なくして。却て上來の祖師よりも論達ならん。乃ち是上來の祖師よりも。勝らんことを務むるなり。夫密嚴上人。高祖大師。不空三藏には。容易に勝るべからず。上來の諸徳に勝て。即ち今時の淺識の分ならば。今時の淺識の宏才悉地の。即ち上來の諸徳の上に出たる者歟。吁誰か是を肯はんや。今時の淺識は。異生羗羊の凡夫よして。實に地獄の罪人あり。何ぞ理具の成佛に誇んや。法花經には。密意を以て若但讚佛乘。衆生沒在苦と説玉へり。實なるかな。龍泉太阿の劍とは。稚子に與へずと疏し釋し玉ふ。嚴誠汝にあるをや。阿字の一刀を以ての。生死涅槃の二つ胴を。一時に斬て。餘なけれども。我等が如き幼童。小腕に力らなきもの。使すべしらねば。生兵法大瘡の基ひなり。大日經にも尸羅淨無飲と説き。諸經儀軌にも。日日に入關戒を受よと説玉へば。先つ菩提心を堅固にして。戒を護持し。三業の過非を防ぎて。而して後に



表徳萬有の。三密の妙行を作す時は。所謂る虎の角を戴て行き。龍の翼を生せるが如し。  
 ○又朝比奈三郎。三浦荒二郎をよに。堅固の鎧甲を著せ。驍騎に駕し。王良を御とし  
 て。手に昆吳の劔を提げて。敵陣の中に入らしむる時は。向處の敵を亡さすと云となき  
 が如く。行人も亦爾なり。菩提心堅固にして。三浦 忍辱精進の鎧甲を被。持戒の馬に乗。  
 願力の王良を御とし。定の弓を取り。慧の矢を負。阿字本不生の。昆吳の劔を提げて。生  
 死の陣に赴く時は。煩惱の賊。天魔の軍を。亡さすと云ことなし。又合せて涅槃も斬る  
 。生死涅槃俱に斷するか故に。天魔も障碍することあたはず。諸天も擁護することあたはず  
 ず三大僧祇を一念の刃字に超。無量の福智を三密の金剛に具して。即身に成佛す。豈に頓  
 學成佛神通乘にあらずや。但し是は眞言の正機に約す。今時の人は多分は結縁機なれば。  
 眞言を念誦するを以て先とすべきあり。而るを纒に祕密の深旨の少分を聞て。即ち表徳に  
 誇り。煙酒食辛を恣にし。或は釋經の二根交會五塵成六佛事の文を僻解して。薩埵の大  
 樂妙適は。那羅那の娛樂なりと云て。二水和合成一圓塔をよ、云文を作り。男女交會を  
 以て。至極の佛境界と執する族あり。嗚呼諸天善神。何ぞ此よ罰を加へ玉はざるや。中古  
 立川流の聖教に。邪義頗る多し。宥快法印の寶鏡抄に辨するが如し。又阿吽義。及ひ不動  
 の愚抄。理趣經の愚解抄等に邪義少からず。辨まへずんばあるべからず。若し此等の義に

迷て表徳に誇る人は。結縁少なからずといへども。亦大邪見なり。護法善神の罰を蒙んこ  
 と必せり。上の經像を破り。塔寺を壞して。現報を得たる。事異なりといへども。罰を  
 得んこと同なるへし。若し夫れ風を追ひ日を逐ふ者は。驚駭の足にあらず。佛を呵し祖  
 を罵る者。豈羝羊の舌をらんや。嗚呼野干嗚師子吼を學んと擬す。悲いかな。痛い哉。  
 故に因みに此に辨して。是を後來の君子に遺すものなり

◎第三十二 眞言の末世相應の法ある事

問上に聞ゆる所。既に頓悟の機根は慶角の如く希なりといへり。而るを今時の人。眞言を  
 持誦して。頓悟涅槃すべき機なりと云ひ。是矛盾の説にあらずや。答六波羅密經に。末世  
 の重罪根鈍の者の爲に。陀羅尼藏を説玉ふ旨見たり。今時の人は。小乗の三藏を受持す  
 ることあたはず。大乘經典を讀誦し修行すること亦難し。而も諸の惡業の。四重八重五  
 無間罪を作り。或は大乘の經律を謗じ。或は經像を煇燒し。塔寺を破壞し。父母師長に孝  
 あらず。或は因果をしと云提。此等の人の爲に眞言陀羅尼を説玉ふ。而も文に。速疾に解  
 脱し頓悟涅槃すといへり。豈末世相應にあらずや。況や上に述る所の。準牝光明眞言等  
 。殊に易修易行にして。功德無邊なれば。別して末世相應と云つへし。又大佛頂陀羅尼は  
 。比丘の二百五十戒を破すると。比丘尼の八拜戒を破せるも。此の陀羅尼を誦すれば。戒



を遠得すといへり。具は下に述するが如し。無量壽の軌に曰く。無量壽如來の陀羅尼を  
 纒かに一遍を誦すれば。身中の十惡。四重。五無間罪を滅して。一切の業障悉皆消滅  
 す。已上無垢淨光陀羅尼經に曰く。若此陀羅尼を聞ことあらん者。五逆罪を滅して。地  
 獄の門を閉。慳貪嫉妬の罪垢を除滅去。命短からん者も。皆延壽を得て諸の吉祥の事。  
 成辨せむと云ことなし。已上大集經に曰く。若人十惡五逆等の罪。四重八重の罪を犯する  
 こと。大地の微塵數の如ならんに。此の咒を誦すること一遍すれば。悉く滅して餘なし  
 。若し身中に更に罪ありと疑ハ。即十方三世の諸佛を誦するまゝんぬ。若常に念誦すれ  
 ば定て大涅槃を得と文。寶積經に曰く。此の陀羅尼を誦すること一遍を経て。佛を禮す  
 ること一拜して。若し頭を擧ん時。是思惟を作して。我身中に猶更に罪ありと云念を生せ  
 ば。當に知るべし。是の人。即ち十方の諸佛を誦するに爲ぬ。若常に受持すれば福とし  
 て増せずと云ことなく。罪として滅せずと云ことなし。文。仁王經に曰く。若人一たび耳に  
 經は。所有の罪障悉皆消滅す。文。是の如くの無邊の利益。諸經儀軌の中に彌綸せり。然る  
 を人知らずして誦せず行せず。剩さへ眞言は有相なりと謗す。嗚呼惜いかな。梅檀香樹。  
 空しく賣炭人の手に度り。無價寶珠徒らに塵堆の中に弄。若し儻眞言を誦する人も。信  
 少なければ。猶ほ罪の滅せざらんことを疑ふ。豈に謗佛の罪にわらずや。經中の所説既に

明かなれば。疑を生せず常に念誦せよ。大佛頂。大隨求。尊勝。寶篋印。菩提場。寶樓  
 閣。寶髻如來。無垢淨光。千手千眼。一髻尊。阿閼。無量壽等の眞言陀羅尼の功德。具に  
 經中に説り。阿闍梨に隨て傳受して念誦せよ。一尊の眞言を誦するに。必ず一切の悉地  
 を圓滿し。願に隨て都率天及び西方淨土に往生すべし。乃至現世に佛身を得ることも。  
 亦甚難からず。況や世間少少の願望をや

通俗礦石集第一終



通俗礦石集 第二

◎第卅三 地藏菩薩の告シ蒙りて石像を掘出せし事

泉州大津に。正木長兵衛と云人あり。此人慶安の初め家を造らんとて地引などして。明日は礎固柱立など、定めしよ。其夜の夢に高貴僧の杖つきて來り玉ひ。長兵衛は告玉はく。我の此家の地中に久しく住する者なり。汝今度家を造らんとす。然らば願くは我を掘いだせ。若今度いださざれば。我何れの年にか出づべきとありければ。長兵衛は、と答へけり。又眠りたるに。曉に又夢らく。先の僧來て必ず我を掘だせ。忘る、ことなかれと再三告玉へり。長兵衛唯唯と答へけり。妻其の傍に臥しけるが。彼の兩三度の唯諾を。よく聞けり。さて夜明ても夢のことは人にも語らず。唯衆人に告て曰く。今日石居すべきなれども。思ふ子細あれば延引するなりとて。人を雇て。ひたすらに地を掘けり。衆人怪しみて。家主は狂せるやと笑ひけり。然るに七尺ばかり掘ければ。底に石あり。家主此を見てそれ損するな。靜に掘とぞ下知しける。掘出し竟るに。地藏尊の石像にてぞありける。其時家主諸人に告て曰く。昨夜兩回まで告を蒙りしま、かく掘りしなりとて。種々に供養じければ。諸人異口音にさてもく。不思議なる靈夢かなど。あやしみ尋みあへり。さてよく土を洗ひて拜するに。夢中に立かへらせ玉ひし後容に。少もかはらざりけり

彌信を起して。後園に小堂を造して安置し奉り。時々香花燈明を供養し。今現に泉州大津にあり。此事は嫡孫大津屋長兵衛。予よ語られたれば更にうかれたる事にあらず。誠に惟みれば菩薩の大悲は限りなしといへども。先つ有縁を度し玉ふ。然るに若此人。そのま措て其上に家を造りなば。自らも無量の罪を得て。現には災殃をまねさ。死してハ劇苦を受べきことをわはれみ。又尊像出させ玉へば。衆人の結縁少あからざることを知しめし。殊に夢を示し玉へり。家主の苦を抜き。衆人に樂を與へ玉ふ。拔苦與樂の悲願。ありがたかりける事どもなり

◎第三十四 河内高安郡山畑村石地藏の事

河州。高安郡。教興寺の北に。山畑村と云あり。其村に一りの農夫あり。田つくるに昔より我田の側よ。地藏尊の石像ましくけり。何の世誰の人か香花を備へ燈明を挑げん。久しく廢れて苔むし。あさましくならせ玉ひけり。然るに此男。舉手低頭の敬もなく。口稱南無の志もなかりけり。剩さへ田作るに妨ありとて。鋤を以て打ければ。頸より折て。下なる田へ落玉ひけり。彼男罪を恐る、心は露ばかりもあくて。却て快よしと思て。再び取舉むせで捨たりけり。さて彼男程なく煩ひて。頸に腫物生て。一年があひだ苦痛し。百療効しあらずして。終に翌年去歳の地藏尊を打折し日。我頸も折て落死しけり。其



子教興寺の忍空律師の許へ來りて。始末の因縁を語り。懺悔して追福回向を頼みけり。貞享の始の事にて。諸人普ねく知れることなり

◎第卅五 河内鬼住延命寺地藏尊の事

河州錦部郡。小西見村。樂樹山。延命密寺の。弘法大師草創の寺あり。縁起記録等は久しく絶て聞ゆることなし。然れども本尊地藏菩薩の尊像は。高祖の刻彫し玉へる石像あり。上古靈驗居多なりといへども。古記なければ聞ゆることなし。古來より地藏尊を寄附し奉りし田數畝あり。又小池あり中に鮒魚多し。或人竊かみ盜み取て食しけるも。其人程なく癩病を受て終に死しけり。又地藏堂にも非法濫行の僧住する時ハ必ず災殃あり。心善直信の人住すれハ。奇瑞多し。或は安産を祈り。或は病の除愈を祈るに。應すること月の水も印するが如く。水の器に隨ふに似たり。又此地は如意輪觀音應現の地なり。吾老和尚再び寺院を修してより已來。靈瑞少からず。但し人の疑を生せんことを恐る、か故に茲に記せず。誠に如意輪地藏ハ一體なれば。互相に利益を施し玉ふこと宜なるかを。請後來の君子。再び延命寺の靈應を記し續んことを

◎第卅六 河内長野村阿彌陀寺地藏尊の事

同郡長野村。阿彌陀寺に。一尺餘の地藏尊あり。傳らく聖德太子の作なりと。威容嚴乎と

して。拜する者畏伏せずと云ことなし。若人佛壇の扉を閉ずして。其近邊に倚臥する時は。必ず枕倒し玉へり。故に諸人敬畏して禮拜供養じ上る。又初ハ在家にありし故に。阿彌陀寺へ移し奉るあり。又唐久谷村に地藏尊あり。坐像にして尺有餘なり。若し五辛肉を食せる不淨の人。寺に宿すれば必ず枕倒し。又は寺外へ投出し玉へり。又堺十輪院の地藏尊。靈驗甚多し。中にも或時人來て掃除しけるも。雑巾を以て地藏尊の御頭を拭ける。其人俄に足腫て數日患みけり。住持護摩を修して懺謝せられければ漸く平愈しけり。又或時僕雜巾を以て尊像の面を拭ひければ。此も足大に腫けり。種々に懺悔して。後に漸く平愈しけり。是偏に地藏尊利生の方便なり。昔し唐の僧性菩薩末世の人の。三寶を敬まはざること多敷て。自ら二手を焼て佛に供し又後にハ身を燒て供養せり。而も諸衆に告て曰く。末劫の衆生輕慢にして心轉薄淡なり。佛像を見ること木頭の如く。經法を聞こと風の馬耳を過るが如しと悲しまれけり。實に三寶は尊敬すべきの極なるも。今時の僧。佛像經卷を自らの坐の上に置き。或は經を閱するも。指に唾を點て攤す。其罪いくばくそや。五百問論には佛像の上の塵をば。口氣を以て吹ざれといへり。されば世間の人。吾主人の面及び頭を吹ば。此を何といはんや。佛は天中天。人中尊あるに。不淨の口氣を以て吹べけんや。或は又人あり佛像の前に臥し經卷の前に臥す。或ハ床の挂物に觀音等の像を



挂て。其前に於て酒肉五辛を食ふ。是又大なる罪なり。若人主人の前に臥さば不敬なりと言て即ち命を失はるべし。然るを佛像經卷を敬せざるは。無間の罪にあらずや。又在家の人佛法僧を敬ふことをしらすして。罪を作ることも無量なり。俗の身として僧の上に坐して。或は誹謗し我は惡口罵詈す。其罪いくばくそや。仁王經に法滅の時は。比丘は地に立ち白衣は高座に坐すべしと説玉へる今に當れり。悲いかな。地藏十輪經に國王大臣等。出家の罪あるを或ハ捕へて禁獄し。或は殺し或は杖答すれば。無間の罪を得。國には水火旱魃の災天變兵亂等ありと説けり。今地藏尊多く罰を與へ玉ふは。衆生に三寶を敬まハしめんが爲なり。餘尊には少にして。地藏尊にのみ此事多きは。大悲深重の菩薩あればあ[5]

◎第卅七 阿州伊津の人所持の地藏尊の事

阿波國伊の津に森治左衛門と云者あり。行基菩薩の作の地藏尊を。父祖より相傳へて守本尊とせり。或時淨知寺の僧。此の本尊を強て乞ければ。是非なく與ぬけり。然るに其日より森氏が家内に奇怪の事あり。佛供を備るに。何方よりともなく。無量の蟻來り集る。又平生の簋の中にも無量の蟻生せり。食する時は水にて洗ひ除て後に食せり。是の如く蠅生すること五日にありければ。家内恐る、こと限りなま。又淨知寺にも同日より蟻生すること。森氏に同くして奈ともしかたし。森氏ハ地藏尊を淨知寺へ與ぬし故よやと思ひ。淨知

寺も此尊を迎ぬし故ならんと思へり。終に森氏より狀を書いて使价を淨知寺へ遣はし。始末の因縁を書いて。本尊を迎へ奉るべき由を申し遣はす。淨知寺も亦書を認めて本尊を送り奉るべき由を書いて使を發せしむるよ。淨知寺の門にて兩方の介行合たり。兩方共に不思議の思ををし。森氏か家へ迎へ奉るに。其日より兩方共に蟻失て聚らざりけり。諸人驚歎せずといふことなし。其後禪僧念首座と云者。此の不思議を聞て。強て乞ければ。森氏も爲方なくて與ぬけり。念首座喜びて隨分に供養し。禮拜懺悔せしかども。其夜より枕倒れ玉ひて。夜を寐させしめ玉はず。而も告て早く森氏か家へ送るべしとありければ。念首座いよく不思議に思て。心を勵まし禮拜供養せしかども。六七日が間毎夜かくの如くあるのみならず。又念首座か朝夕の飯に蟻生すること淨知寺の如し。あまり禁かねて持行森氏も歸しけり。森氏も本尊を送りし日より。飯に蟻生じければ。又例の如しと思ひ。今は迎へ取り奉るべしと言ながら延引しける處に。念首座持來てしかく語りければ。二人共奇特の思をなし。左右我家に有縁の尊なりとて。ますく信仰しけり。さて治右衛門家に迎へ入れ奉りて後ば。兩方共に蟻も生せざりけり。此事天和貞享の際の事あり。されば佛菩薩の昔しより崇め奉る。縁深き家に住し玉ふあるべし

◎第卅八 河内石見川藝及び藥師如來の事



河州錦部郡。石見川村の船井に。弘法大師御作の藥師如來の尊像あり。其の由來を尋ぬるに。往古に夫妻あり。貧しくて朝食夕食の煙もたへくなり。強ちに惡をも作らず。又善根を修する程のともをかりけり。されとも貞實の匹夫にてぞありける。或時一人の聖僧來て。一宿を乞玉ふに。夫妻共に申さく。聖僧を宿め奉らんは。一易く侍れど。四壁皇焉とあれはて、風雨の恐あり。一瓢空然とひなしくして奉るべき食物なしと。嗔咽ければ。聖僧の曰く我は諸國行脚抖擻の身なれば。或時は樹下よ雨を避て宿し。或時は石上に雪を拂て坐す。汝か家矮くともよも樹下石上には劣るまじ。剛て宿せしめよとありければ。夫妻共によろこびて宿め奉れり。さて聖僧問玉のく。汝等は何事を産業として露命を養ふやと。夫妻の曰く。何をなすべき便りもなく。妻木樵て直を得。朝三暮四の助と爲といへども。林中には薪を賣す。聚落は甚はだ遠し。壯年の時は苦辛を堪へて。遠く鬻といへども。今は老衰日に増て柴の扉の日暮に露の命の消ぬべきことを歎くのみなり。現世既に安穩ならざれば。後生善處の理のわもあらじ。唯冥より冥き道に入なんことを悲しむばかりありとて涙を流しければ。聖僧不便に思しめされて。即ち一夜の間に御長一寸八分の藥師如來の尊像を刻みて。夫妻に告玉はく。此佛は像法轉時の衆生に苦を抜き樂を與ぬ玉ふ。汝此の佛に歸依して二世の安樂を祈るべし。又此艸を異焼にして諸人に與て價直を得よ。

然らば汝か子孫孫に至るまでの。生計を得べしと。即ち自ら井を掘て示し。藥草の種子を蒔與て歸らせ玉ひけり。夫妻共に喜びて教の如く御作の尊像を安置し供養し上り。其藥を諸人に與ひけり。爾よりこのかた。天下に流布して諸人利益を蒙れり。是打身の妙藥なり。設ひ骨摧くるも外より糯黏にてねり。梅酢にて附。又内より酒にて晝三度夜三度用ゆれば。七日の間に平愈せずと云ことなし。聖僧又告玉はく此藥を服する時は。五辛肉食を斷じ。房事を止めて。潔齋清淨にすべし。然らずんば効あらじ。又他方よ於て價藥をすども少しも効しあらじ。汝も亦嫌恨の心を生ずることなかれと。故に今に至るまで此の誠を守るなり。彼聖僧は即弘法大師の化來し玉へりと云こと。後には覺りけり。此藥は本艸よも見ず。神農氏の未だ嘗ざる艸。軒轅氏の曾言ざる能なり。されば唐には名をも知す。唯吾朝にのみあり。此併ら弘法大師慈濟の方便あり。此藥艸石見川にのみありて。他郷には生ずることなし。故に石見川藥と号せり。和朝の醫書には聞記せるあり。文明の比。和州吉野郡の人。此尊像の靈驗を聞て盗みて歸り。僅に一年を経けるに。其處に水火盜賊等の難起り。又諸人疫癘を病ければ。此尊佛を盗みし祟りなるとて。即ち石見川へ持來りて種種に懺謝しけり。其後は彼村にも諸人病瘥て。諸難も長く止けり。嗚呼命なるか。天文の末よ火災ありて。財寶悉く焼亡し。古記録起る殘らず灰塵となれり。家主外



に在て。靈像の焼失し玉ふことを悲しみけるに。不思議や尊像は火中より飛出で、。傍に  
避玉へり。後に器物の下より出玉ひ今に至るまで安置し供養し奉る。寛永より元祿年中ま  
での船井の主人を。稻井源左衛門久吉と号す。入道して法名を道法といへり曾て和州宇和  
の郡五條の人來りて藥を求めけるに一貼與ゆけり其人道にてにせぐすりを。取代て先の人  
に與ゆける。其夜境界の中に藥師如來道法に告玉はく。昨日の藥師は道よて贖藥を取代て  
與ゆたり。今日此事を正さんが爲に人來るべし。必ず悔恨することおかれど。果して人來  
りて。しかく語りければ。道法其罪を免して。強て過非を正さざりけり。又和州天の  
川の邊。山西村の人來りて藥五貼を求めけり。一貼の紋銀二錢なり。五貼は青鳧三千二百  
字なり。而も山西の政屋は道法か親家なれば。求むる者誑りて。直の中に二錢を賤たま  
へと賤りければ。道法爲方なくて賤けり。さて其夜曉に藥師如來道法に告玉はく。今朝山  
西の人來るべし。悔恨の心を生ずることおかれど。道法夢覺て。今や夜旦ると待しに。扉  
を扣く人あり。誰何と問に和州の者ありと答ふ。山西の人にやと言ければ。使の人驚ゆけ  
り。さて藥の両少なく。又直も皆與ぬざりしと。我れは紋銀十錢を持參せしめたり。此事  
是非を正すべしと言けり。道法は如來の御告の空しからざることを思て。種々に曉して歸  
しけり。誠に大師稻井が爲に教へ玉ふ佛。及び神藥なれり。今に至るまでもかくの如き靈

應。しばく多かりけり。問佛菩薩の差別の心あることなし。誰人なりとも信する人の處  
に住し玉ふべし。されば佛像を多く持あがら。不信なる人の像をば盜み取て。禮拜供養す  
るに罪なしといへり然るに森氏か地尊藏。及び石見川の藥師佛。本の家に歸り玉ふことは  
何事ぞや。答來難の如く佛菩薩は差別なまといへども。盜み取程の人は。多くは不信の人  
なり。是に依て其所には住し玉はず。苟も信あらば至る所に佛を見奉るべし。何ぞ止畫木  
の形像のみあらんや。如來の法身を見ることも亦難からじ。若信なくんば畫木の形像を積  
むこと山の如なりとも。是の人は此未だ佛を見ざるなり。金剛經にの色聲を以て如來を求  
むるは。是邪道を行するなりといへり。況や不信ならんをや。若又正信ありて人の佛像を  
乞ひ受くる。念首座か如きも。道理應せざることあり。如何となれば。我は得て喜ぶとい  
へども。彼は失て憂ふ。若し寔に地藏尊を信せば。必ず自らの資財を捨て、。新たに作  
りて供養し瞻禮すべし。何ぞ強に他人の所持せるを乞んや。尊像の多ければ。結縁も亦  
多し。然るを自ら作らずして人に向て乞ふは。理に背けるにあらすや。故に念首座及び淨  
知寺にの住し玉はざりけり。さて又人の所持の本尊を直を出して買者あり。買者賣者俱に  
重罪なるべし。梵網の制の如し。又直を出すは罪なりと云て。人の所尊として秘する本尊  
を強て乞は。倍罪深かるべし。此多くの新よ作れば多の財を費すが故に。財を慳吝するよ



り起れり。人の本尊を乞受る人の癖として多分は不信なり。かくの如き人には。堅く與ふべからず。若又貧窮困苦にして。自ら財を出すことあたはず。而も信心堅固あれども本尊なくは。自ら秘藏せる本尊なりとも與ふべきなり。又地藏觀音等を印板として。有信の人に施す。其福廣大なるべし。唯不信の人には與へざれ。信の道の元功德の母たり。佛法の大海には信を能入とすといへり。

◎第三十九 天竺健陀羅國の畫像の事

昔し天竺の健陀羅國に。一人の貧士あり。平生釋迦如來の像を畫して供養せんことを願ふといへども。貧乏にして由なかりしを。備力して漸く一の金錢を得たり。喜で畫師の所に至て如來の妙相を圖せんことを囑へて曰く。一の金錢價直極めて少しといへども。我久しく如來の妙相を圖せんことを願ふ。冀くは我爲に圖繪せよと。畫工其の至誠心を感じて。價直の少きことを言す。圖せんことを諾しけり。然るに又一人有て來て一の金錢を與へて前の人の如くに囑けり。畫師二人の金錢を受て丹青妙を盡して如來の妙相を一丈六尺に描。時に二人同日に俱に來て禮敬す。畫工二人に一の像を示すに。一人は我が像なりと言。又一人も我像なりと言て争をひ。二人相視て疑ふ。其時に畫工二人又告て曰く。二人各一金錢を持して我に與ふ。但し價直少分にして二軀を描ぐことあたはず。然れども受る所

の金錢け毫釐も私するとなし。二金錢皆此一像に用ゐたり。若斯の言謬らざるは。佛像必ず神變を現じ玉ふべしと。言訖らざるに佛像腰より上は。分身して二軀と成て。光相いよく明らかなり。腰より下は一軀なり。其時に二人歡喜踊躍して去りぬ。其像今に在といへり。されば信心の有無に依るべし。信深き人の必ず我所愛を捨て、佛像を作るあり。本願經にも此旨を説れたり。但し人古佛を所持して修補し供養する志をなく。空しく打弄てあらば。乞受て修補し供養じ。歸依し讚歎し奉るべきなり。

第四十 和州の石地藏。童子の供を受玉ふ事

大和國。法隆寺の近處に一驅の石地藏ましく。坐像にて四尺ばかりなり。本より路邊にあれば。牛馬の塵にうづもれ飛鳥の集處とぞありにける。人此を悲まみて石座をいとなみ供養して高くなしける。近比其の傍に民家あり本より貧しくして。供佛施僧の善根もなく放逸邪見にして明し暮しけり。或年妻にをくれければ又後妻を娶ける。前妻に一人の男子あり。はや五六歳になりけり。後妻事にふれて憐みなく。つらくぞあたりける。或時午飯を炊き居けるに彼の童子。はやく食くはんとて啼ければ。繼母氣の毒に思ひ。何かな難儀あることを言付て迷惑させんと思ひ。不圖思ひ出して曰く。此の飯をあの地藏えまいらせて歸り來れ。しからば汝にも飯くはせんとて。一搏の飯を與ひけり。童子よろこびて即ち



持て地藏の方へ走り往き。前に飯を置て。地藏様まいれやとて語りけり。さて母問て曰く飯を地藏の手へ渡したりや。地藏はとりて食玉ふかど。童子答曰く地藏様事の外に長高く座高ければ。我か分にては。いかでか御手まではとゞき申すべき。前にそなへ置たりと。繼母大に怒り目を張聲を烈して曰く。是非に御手に渡し奉らん。若地藏とりて食し玉はずば。汝にも飯くはせじと叱呵言けり。童子はせんかたなくてなくく地藏の前に往座に上らんとすれども及ばず。搏食を手に持て人に言如に云けるのう地藏様此をとりてまいり玉へ。母の大にしかりて我にも物くはせじといはるゝに。はやくとりてくひ玉へやと。なくく申しければ。不思議やな石地藏。錫杖の御手をのべて。彼小兒が供じける搏食をうけとり玉ひけり。童子よろびて家に走り回り。繼母に向て曰く地藏の飯をとりて食玉へり。我にもくひせ玉へと。其時に母又大に怒り背を打て曰く。石像の飯をまいることやある。溝へ捨つらんと。ますくしかりければ。童子なくく言けるの。疑はしくは往てあれ見玉へ。正しく地藏の食玉へりと。母怪しく思ひければ往て見るに。右の手に搏食半分を持ち。半分は食し玉へる相貌にて口の邊に飯粒付てぞありける。時に繼母仰天して慚愧懺悔の心起りて。こは夢か現か。石像のかくし玉へることの不思議さよ。定めて我が慈しみなく慳貪邪見あると。童子幼稚の心とを憐み玉ひて。かくは現じ玉ふあらんと。涙を

流して密かに懺悔して歸りけり。其より邪見の心も少し直りて。子を憐れみて養育しけり。此事近郷の人々聞傳へて。日に彼の地藏尊を禮拜供養すること多かりけり。熟惟みるに童子は事にふれて執心薄く。正直にして。邪の心なし。故に金剛頂經には大樂金剛薩埵の内證を。世間の那羅那里的娛樂の如しと説り。那羅那里へ童男童女あり。文殊大聖は釋迦九代の祖師にして。現在北方の世界にては。歡喜藏摩尼寶積佛と現じ玉へとも。童子の形をあらわして。妙徳童眞菩薩と名け奉る。蓋し文殊の妙慧の。諸法に於て無執無分別あること。世の童子に類すればあり。昔五佛。晨朝に諸の比丘と共に。王舍城に入て乞食し玉ふ。世尊の相好光明普く照して千の日の輝にも踰たり路に二人の童子あり。一人をば闍耶と名け。一人をば毘闍耶と名く。遙に佛を見上りて。歡喜して細沙を持して勢と号して佛の御鉢に入れ奉る。小兒長身ければ。一人の小兒の肩にのぼりて。御鉢に入れ奉れり。世尊納受して即ち微笑し玉ふ。阿難佛に白して言さく。世尊は尊重にして容易に笑ひ玉はず何の因縁あつてか今微笑し玉ふやと。佛阿難に告玉はく。此童子實心恭敬して。細沙を勢と号して我に供養する功德に依て。我滅後百年に巴連邑の中に生して。轉輪王となり。姓は孔雀氏。名は阿育王と号して。正法を以て世を治め。我か舍利を收めて。國中に八万四千の塔を立べし。此沙を持して歸れとて。講堂の壁に塗玉へり。果して滅後百年に阿



育王出で、大に佛法を起し。閻浮提の王として。八万四千の塔を立玉へり。日本に二所あり。江州の石塔寺も四万四千の隨一なりと釋書に見たり。抑彼は沙鉢を眞佛に奉りて。輪王の果報を得たり。是は眞像を石像に供して繼母の呵嘖を免れたり。和梵域殊に。古今時異なりといへども。童子正眞の供養は替ることなし。彼は猶百年の後に鐵輪王の位を得たり。此は現に石像親たり供を受玉ふのみならず。邪見の繼母をして信を生せしめ。遐邇の男女をして福を植しむ。現世の利益廣大あれば。阿育王先生の施福よりも勝れりと謂つべし。現在の花報既にかくの如し。況や未來の果報をや。寔に童子は無執正直なれり。十二因縁の中にも。十五より巳前の童子をば。受と号して愛とは名けず。小兒は赤色の花を愛すれども。暫く弄するかとすれば。即ち揉て弄つ。此愛執少なくして無分別なればなり。淫愛の心なく邪智邪思惟を離れたれば。佛も納受し玉ふあらし。略出經に灌頂の金剛線をば。童女をして紡績しめよと説き。陀羅尼集經に灌頂の儀を説にも。童子をして寶幡を持せしめよと説く。伊勢内宮の巫女も。童女の未だ華水あらざるを用ゆといへり。皆是童子童女の邪念少なければ。佛陀神明の心にも稱故あり壹岐前司親輔が養兒の。六歳にして淨土に生じ。松室の童子の十四五の時に讀誦仙人となり江州童女の地藏觀音の夢想を蒙りて壽命を延べ。壬生村の童子の地藏の加被力に依て辭世の歌を詠じ。及び淨土に生せしか如

し。靈驗記等の中に童女童男の感應を得たること頗る多し。要聞の者は披閱せよ。只今時の人の設ひ成長の人たりとも。行は皆嬰兒の如くあれば。大日經には世間三個の住心を。異生羗羊心。愚童持齋心。嬰童無畏心と説り。末法今時の人は。設ひ智慧聰明にして。博學大才なりとも。童子の如くに正直ならば。佛の引攝も預り現世の悉地をも成すべし。又多くの愚癡なること猶童子の如くあれば。如來も嬰兒行とて。たば、して種種に教化し玉ふこと。猶小兒の哭を止んか爲に。楊葉を眞金と号して與るか如しと。涅槃經にも説玉へり。大日經の疏には。干將莫耶の利劍をば嬰兒は與へず。情に惜むにはわらざれども。運用の方便を解せざれば。却て其の身を傷るが故なりといへり。法華經には長者諸子及び窮子。飲毒諸子と説き。今此三界皆是我有。其中衆生悉是吾子と説玉へり然れば則ち佛は父母の如く。一切衆生は子の如し。佛一子の慈悲を垂たまふ。されば我等も童子童女の父母を慕ふが如く佛を慕ひ奉り。無分別にして正直ならば。など現世の悉地をも成就し。未來の引攝もあづからざらん。愍に邪智邪思惟を起して。或は世俗の書に耽りて文章を嗜み。漫に大乘の法門と号して放逸ある。是を小智は菩提の障とは説玉へり

◎第四十一 德行才智ある童子の事

問童子童女に有智有行の人あるは何事ぞや。答普現色身の前には地藏觀音藥王妙音等の菩



薩。童男童女の身を現して衆生を濟度し玉ふことあり。涅槃經にハ迦葉童子如來に祕密藏を問上り。法花にハ八歳の龍女南方無垢世界の成道を遂たり。花嚴經には善財童子。五百の童子と共に文殊童眞に參じ。乃至五十三の善知識に參せられし中に。慈行童女。有徳童女。徧有童子。徳生童子。善知衆藝童子等の菩薩あり。自在主童子ハ一万の童子に圍遶せられて。菩薩の算法を以て沙を計ぬたり。又不動明王ハ肥滿せる童子の形を現して行者を擁護し。猶大悲の餘りに。矜迦羅制多迦の二童子とあらはれて。行者に給仕し玉ふ。冰迦羅天童子は。我を供すること闕せして六個月を滿せば。我常に行者に隨逐して擁護すべしと誓ひ玉へり。又文殊の八大童子。不動の八大童子あり。皆是大菩薩なり。又舍利弗は七歳にして諸の論師に勝。鷄頭末寺の七歳の小沙彌は。大神通を現して五百の婆羅門を度し。奴伽王の禮せる七歳の沙彌に。跳て深瓶の中に入來る。須陀沙彌は七歳にして能く佛の問に答ふ。妙顏沙彌ハ八歳にして嫌疑を避る。善無畏三藏十歳にして我を統。十三に於て王位に登り。終に寶位を脱履して僧となる。荊州玉泉寺の慧瑜ハ。五歳にして大品般若を誦せり。又夫川棗七歳にして孔子の師とあり。蒲衣は八歳にして堯の師とあり。顛頊は十歳にして小昊の相たり。常譽は十五にして顛頊の相たり。甘羅は十二にして秦の上卿たり。王勃ハ十三に於て滕王閣の序を作り。李賀は七歳にして高軒過を賦し。如意中の女子ハ

七歳にして詩を能す。此類甚多し皆是精神專利の人なり。且つ幼にして學者ハ日出の光の如く。老て學者ハ燭を取て夜行か如しと。古人も誠めたれば。項橐已下の數子は。幼にして能學びし故に早く才智を得たり。況や佛法を學ぶ者は幼少の時より。其志操を選て佛弟子とあすべし。されば高祖大師の御遺誡にも赤子の時より寺に住せしめて。出家せしめよといへり。故に高野山の法は兒より剃髮せる者を衆徒として。晩年入道の者を雜へず。八百五十餘年來此式を闕となし。大師の遺誡誠は道理深きにこそ。是幼稚の者は志し正直にして法水を受ること易く。如來の心にも稱へるか故なり別して地藏尊は童男童女を濟度し玉ふこと。我朝に古來より言ならはせたり。子細あるにこそ。處々に幼兒の利益を蒙れること多かり

◎第四十貳 大坂天王寺屋父子地藏の引攝に預りし事

過にし延寶の比。浪速南御堂前に。天王寺屋。佐兵衛と云人ありき。淨土宗にてよりくは念佛することおもひりしかとも。能勤むと云程の事はなかりけり。或時地藏尊の利益廣大あるを聞て。一軀の木像を造立して。某寺に安置し奉りて。未來の得脱を願ひけり。而三年の後病死しけるが。妻子事の外に悲しみ。別て妻悲泣して七日七夜の間は泣やまざりけり。或夜の夢に亡夫莊嚴うるはしき衣を著して來り。妻に告て曰く。あまりに不歎さを



。我は地藏菩薩の救ひ玉へば。苦しみあることなし。徒に悲泣せすとも念佛せよと。其時妻おどろき悲喜交集る。冑子岩松側に臥たるが。亡父の來れるを同じく夢みて。のう母あれ父の來り玉へり。それをこそ居玉ふといへり。母子同く夢みて處も時刻も違はざりけるぞ不思議ある。妻も其より少しき悲泣も止みて。念佛を唱ねける。末子に五六歳ある男子あり。七日七日に寺へ参りけるに。幼稚の心に香花など持て彼地藏菩薩の前に供養して曰く。此の尊像ハ我父の造立し玉へば。我父ありと想ふとて寺詣の時は必ず香花を供養して稚なさを合せつゝ。南無地藏と唱ねけり。かくて九歳になりしが重き病を受けて死しけり。母悲しむこと限りなし。終に一眼を啼潰せり其時兄岩松が夢に彼童子來りて曰く。母のあまりに歎き玉ふ愚なることあり。我は地藏菩薩の許に常々住して哀愍を蒙ふれば苦しむことなし。なげき玉ふあと。時に兄問て曰く。此比七夜別時の念佛を唱ねて回向す。とゞきたりや。童子答て曰く。あるはど彼方にて常に此を聞と。さて夢さめて母に此を語りければ。いとゞなげきを重ねけれど。後には能思ひ開きて歎きも軽くあり。其より一家皆地藏尊を信仰し奉る。是偏に地藏菩薩の利益なり。上に言か如く小兒の供養は。正眞にして邪念なければ。別えて菩薩の御心も能く稱からし

◎第四十三 唐の惟岸法師及童子淨土に往生せる事

昔し唐しに釋の惟岸法師と云ありき。并州の人なり常に西方の淨業を修して十六想觀を勤められける。或時觀念の床を起て庭に經行せられけるに。忽に觀首勢至の二菩薩。空中に住立し玉を拜み奉れり。惟岸頂禮し歡喜の涙を流して曰く。幸に這の肉眼を以て直に彼の聖容を觀奉ることを得たり。佛說虚しからず。然るを世人是を信受する者希にして。此の實利を傳へて知ざること是我生前の恨なりと。時に倏然として二人の畫師有り來て坊に入る。是に語て淨土の菩薩の相を圖せしむ描さ竟て其畫師かさ消やうに失にけり。岸法師其弟子に謂て曰く。我往生極樂の期已に時至れり。誰か我に従て往者わらんやと。時に一人の小童子あり。進んで曰く。人間無常の境ひ誰か敢て久しく保んや。淨土無爲の都何ぞ樂ざらん。請師の命に従んとて即ち父母の所に至て辭して曰く。親子の道は天性なりといへども。亦因縁なきにあらず。人生の有待なる遲さと速と遂に要す一たびは離別せん。恩愛の悲みは迷の前の習あり。再び會せんと思ひ玉はば。願に隨て淨土に來り玉へ。我必ず半座を分て待べしと約して寺に歸り沐浴して。佛像の前に至り。趺坐して禮拜念佛し。忽ちに命終せり。岸法師其の背を撫して曰く。汝が何ぞ吾に前立て往やと。即ち弟子に命して助音念佛せしむること半時ばかりにして。目を仰て西方を見て。寂然として遷化せり宋高僧傳 佛祖紀 蕪惟るに此童子修行の功の積ざれとも。宿福の酬る所。佛陀の應ずる



所。速疾に往生せること。皆是小兒は造惡少くして。心正直をればあり。かくの如く頼に世榮を捨て、淨刹に往生を遂ること。羨しき事あり。今時は百歳の老翁もかく目出度往生せるはあま。耆域の西域に歸りし時に。沙門法行と云者。遺偈を望みしかば。守口攝ニ身意慎莫犯衆惡一修行一切善一如是得度世と唱はられければ。法行此偈は人口に膾炙す。八歳の小兒も亦能く誦す。願くハ緊要無上の妙法を示し玉へといふ。時に耆域答て曰く八歳の小兒も誦すれども。百歳の老翁も行することあたはず誦せると何の益かあらん。吾言少ありといへども。行ふ者は益多からん。此則緊切の法門ありと答はられければ。人皆信伏しけり。事殊なれとも思ひ合されたり。

◎第四十四 河内鳩原村の童子辭世の歌よむ事

河州。錦部郡。鳩原村。彌勒寺。文識の親族は小童子あり四歳にして。慈父を喪せり。文識は骨肉の親なれば寺へ呼て養育しけり。何ある宿業にや。此童子六七歳になりし比。又母をくれ。十五歳までには姉妹兄弟皆死して。孤露の身となりける。文識別て慈みて鞠育しけるが。平生地藏觀音の二尊を信仰し奉れり。元祿四年の春十六歳になりけるが何となく思ひけり。或夜の夢に道を行に亡せし姉來りて呼ければ。嬉しくて伴なひ行けば。程なく一字の堂に詣り。莊嚴美麗あること言盡し難し。燈明四方にか、やさ。幅蓋飄

羅たり中央には阿彌陀佛住し玉ひ。觀音地藏等の諸尊羅列して宛も淨土かどぞ覺へける。姉教へて禮拜せしめて。自らは奥へ入りけり。童子わががたく思ひて禮拜念誦すと思ふに夢はさめたり。さて師に此夢をかたりて。我命もなからふべからず。死期正に近かるべしと言。師も哀れみて種々に藥餌を進めければ。定業にやありけん。行潦の溜る、如くに日に衰へてぞ見ける。三月廿八日の夜師の坊を呼て硯紙を求めて言けるは。我は力なし師書たまへ。辭世の歌よみたりとて書せける

ありがたや命終十六想觀の

花のうてをにいたりいたれば

さて師に訣て曰く。公慈愛深くて。我を四歳より養育して。今十三年に至れり。深恩を報じ奉ることもかく。空く死することの本意なまよ。唯し宿業をればせんかたなし。我死しかば師も亦餘命まします。白すまは及ばねど。淨信を發して後世の營みをなし玉へど。合掌して師を拜みて。此今生の御暇乞なりとてあん啼けるが。廿九日の晝眠るが如くに死しけり。師の夢幻のこ、ちして歎き沈みけるも理ハりあり。其より文識も信心彌増長して。誦經念咒怠りなく勤められけり。此も童子の心正直なれば。二尊の加被力あらんか。山中に成立ける人の。殊も少年の身として。辭世の歌よみ。我師の恩を深く思ひ。訣に



も菩提を勧めけるこそ。千万不思議なれ。抑十六想觀の事は誰が説聞せけるやらん。偏に地藏觀音の方便にや。臨終に師を拜して深恩を謝しける心操を以て見るに。居常師に孝ありまこと推て料るべし。予元祿四年八月十二日より廿四日に至るまで。鬼住にて地藏本願經を講じ。又閏八月五日より長野村に於て。觀無量壽經を講せしにも。文誠怠らず聽聞せられたり。彌勒寺と長野村とは。山中羊腸の路五十餘町有しを。秋霖を冒て老僧の退心なく通ひて出座し。十六想觀の事を聞て。彼童子が辭世の事いよく不便と思はれければ。予か所へ來り。此童子始末の因縁を語りて。墨染の袂をしはられける。誠に一おはれにはべり。彼童子法名仁山慧春と号す。辭世の歌及夢を思合すに。淨土に往生せし事。疑ひなし。殊に師にも孝ありければ三福の中に孝養父母奉事師長と説玉ふ亦何ぞ疑はんや。近代には希有事なり。彼壬生村の童子五歳にして死し。地藏菩薩の加被力を蒙りて。辭世の歌よみけること。妙幢禪師の撰せる。地藏菩薩利益集に見たり。彼童子五歳にして死せんとしける時。父母殊に悲泣せしかばかくあん

なげかじを。しばし雲井にかくるとも

やがて生れん花のうてな

と讀畢て息絶けり。今の童子とは隻五隻八の異ありといへども。辭世の歌心相似たり。具に

は利益集にあり。八十の老翁もかく辭世して淨土に往生せることは。難かるべし。昔唐の白樂天杭州に知たる時に。秦望山に至り。道林禪師に問て曰く。何なるか。是佛法の大意と。師の曰く諸惡莫作衆善奉行。白居易曰く三歳の孩兒も也。慙慙道とを解すと。師の曰く三歳の孩兒も道得といへとも八十の老人も行ずると得すとありければ。樂天大に愧て信伏せりといへり。今の小兒は只道得のみにあらず。又淨土に往生せり。此を以て見れば八十の老人にも勝れり。さらば文を改へて五歳の孩兒の行じ得たれとも。八十の老人は道得るとも得るといふべしされば童子は心正直にして佛法に導く時に入り易く。深く罪福を信して。一念の善根も性靈より發起すれば功德深し。白山権現の一所に。熊眞水と云あり。本地地藏菩薩なり。或人道心を祈りて日夜に怠らざりければ。或夜の示現に。二歳三歳の童子の心になれと告給ひけるといへり。是も童子の心能く地藏菩薩の内證に稱るならん。然るを今時の僧姦童を養て。佛道に引入することあたはずして。只世間の藝能のみを教へて。或は世間の伎能をも教ずして。唯色を好て非梵行の境界とす。終に互相に愛執深くありて。或は命を喪あり。沙門の罪いかりぞや。かをしきことなり。經に説かく童子を姦する者は衆合地獄の別處。多苦惱處に墮して。銅柱鐵床の報ひを受と。但し是は在家の事なり。出家の犯は無間の業なり。地藏本願經に。伽藍の中よして不淨を行すれば。無間



地獄に墮して千万億劫出る期あしと説き玉へり。悲しきことなり。自ら省みて慎むべし嗚呼悲いかな。世濤季に及びてかくの如き輩らのみあり。上代もしかありけん。後白河の法皇の御言。少も違ひざりけり

◎第四十五 千手三河か事

昔し保元平治の比。紫金臺寺の大僧正。諱は覺性と申し上るありき。千手とて御寵愛の童子あり。能笛を吹き今様を誦ひける。僧正二心なく愛し玉ひけり。然るも又或處より三河とて。一きは優りたる美童入り來れり。殊に和歌を能く詠じ。瑟を能く彈しければ。千手がさらし衰へて見けり。千手本意を思ひ。御室の心あさくおはしますを怨み奉りて。所勞の事ありとて。我宿處に引込て出ざりけり。或夜歡宴の事ありて諸人聚會せしとき。僧正の玉ひける。千手は何事にか比日。我前に出ぬぞ。呼て笛吹せよ。今様誦せよと。近侍の曰く所勞の事侍りて。養生いたし侍ると。僧正是非に出よと宣ひければ。御使往て御氣色の趣しかくと言けり。千手胸打さはきて申けるは。所勞未だ愈ず。殊に身を漫りにして髪をもげづらす。やみつかれて侍れば。いかてか御前へ出べさと。使歸りて件の事申上げれば。容見ぐるしくともくるしからじ。是非に出よと再たひ御使ありしま。千手もせんかたをく出て出けるを見るに久しく蟄居して少し思ひ瘁たる躰なり。紋紗の

両面の水干にひばらこき雀みの集たるを縫たりけり。紫のすそこの袴を被たり。殊にあざやかに。そうぞきたれど。物思躰にて打涙ぐみて。つやく物をぬいはずなんありける。一坐の人々皆哀に思ひけり。さて御室の御前に。盃を置る時に。千手に今様誦へと仰りければ。新に自ら歌作りて

過去無數の諸佛にも。捨られたるをばいかがせん現在十方の淨土にも。往生すべき心なし。設ひ罪業重くとも。引攝し玉へ彌陀佛

と哀なる聲よて。くりかへしく誦ければ。一坐の人々皆袂を濡まけり。面白かりける酒宴の座。しめりかへりて興醒めてぞありける。僧正はあまりに不便と覺しめし。禁かねさせ玉ひて。自ら其の坐より千手を抱きて。御寢處に入らせ玉ひけり。其後諸人は多く酒飲退きけり。夜明て見れば三河はのや夜中に何地ともなくうせけり。こはいかにとさへぐに。御寢處の枕屏風に紅の薄襟に一首の歌を書付たり

尋ねべき君ならませば告てまし

入ぬる山の名をばそれとも

と手跡を見るに正しく三河か書たるなりさて至らぬ隈もなく尋ねさせ玉ひければ。終に行方しれずなりけり。御室の今様にめで。又千手を愛し玉ふを怨み奉りてなり。其後三



年を経て聞ゆるは高野山に登りて出家せしとなん往末能勤め行ひけるやらん。をばつかなし。此の二童子の心思ひやるに最哀に侍れど罪深きこと。ますく復不便あり。愛せし人の罪尙復極めて重きを悲しきことなる。五百五十年にもありぬらん。既に末法万年の初めれば。かくの如く僧の威儀皆かけて破戒無慚なりしなり。さりながら今時の僧を見るに。五百年前とは十倍も劣りて見ゆ。文覺の如き荒行に堪る人もなく。明慧の如く禪定を得たるもなし。西行法師。蓮性法師の如き世捨人も夢にだも見ず。人も世界も佛法も皆衰へて。唯煩惱のみ昔よりも勝れり。千手三河か心正直にして愛執の深きを。初めより正道に導きなば。松室の童子の讀誦仙人とあり。岸法師の童子の。浄土に往生せし風情の事はあるべきに。教ふる人のあしかりければ。かくの如き事もあんめり

◎第四十六 或人の寵童死して後夜々來る事

近比何の國とかや。禪宗の長老。姣童を愛して互相に情深かりけり。然る輪番周り來て。本寺に一年勤むべきに成ければ。彼童子を諭して曰。我輪番周り來たるま、本寺に一年住持すべし。本寺には童子を置こと禁制あり。汝に離る、こと暫もすれば三秋の如くなるに。今長く一年の別れ愁苦限りあしといへども。輪番の周り來るは一宗の美名榮幸なれば辭することあたはず。如何せんとなげかれければ。童子も悲みて曰く。有髮にて召し具し

玉ふこと叶はずば。出家せしめて具し玉へと申しけるを。長老も何をか因縁にして愛網を離れんと思て曰く。しからは父母の許さるるをば出家せしめす。父母に告よとて父の方へ歸寧せしめて。やかて木寺へとて行れける。童子歸りて長老を尋ね問に。はや本寺へ御渡り候なり。今は三十里をも踰玉ふべしと言を聞て。即時跡を慕ひ追ければ程なく退付て。種々に恨みかこちて。何とて我をば捨て、行玉ふぞやと泣涙ければ。長老も進まんとすれば本寺の制なり。避かんとすれば人目いかゞと思はれければ。先童子を賺さんが爲に。其より歸られけり。又種々に宥め諭して或處に用事あり。七日過て歸るべしと言て出られけり。然るに七日に至て歸らざりければ。怪しみて人に問に。本寺へ往玉ふあり。今は八十里も隔たりぬらんと語りければ。懸恨み悶焦れて忽ちに死しぬ。諸人且の哀れみ且は恐れながら葬しけり。其夜神魂即ち彼長老の方へ行て。長老の夢ともなく現ともなく目に。何とて情をくも我を捨て、行給ふぞと種々に恨み悲しみければ。長老も音を惜ます啼れけるを。旅邸の主聞て如何にと問は。夢みたるなりと答へて又眠るに初の如し。終に一夜は眠らざりけり。次の宿にても亦かくの如し。眠らんとすれば來りて種々に恨み悲しみければ。左右人目辱しく本寺の輪番も勤めがたくて辭し歸り。其より寺をすて、諸國行脚し念佛一三昧に住して一切所修の善根を。彼が菩提の爲に回向しければ。後に來らさ



りけり。其僧今現在して人にも此を語られけると。或人語りけり。明慧上人には常々天魔端正の童子の形を現して随逐し。種々に便りを伺ひけれとも終に便を得ず。上人に瞋恚を發さしめんと思て。鐵鉢の中に糞しけるを。上人知て涙を流して諭して曰く。汝數年我が便を伺ふ。我何を汝か爲し障得せられんや。汝か我を妨げんと思ふ心の勇猛なるを引かへて。菩提を求めなば。早く成佛すべきを。歎き玉ひければ。魔童子菩提心を起して去るといへり。今此の童子も魔の變せるにや。工夫若似し君意。成佛應先老釋迦といへること實なるか。是の如き事古今に例し多ければ。煩はしく記せず。一を得て万を知れ。慎むべし恐るべし。省みずんばあるべからず

◎第四十七 少年を畜ふべからずと云の辨並に智増悲増の菩薩の事

伏して 惟れば末世の凡夫は。事にふれて愛著生じやすければ。法花の安樂行品には樂て年小の弟子沙彌小兒を畜へざれ。又彼と師を同くせざれと誠の玉へり。但し法花は自行に付て説。大師は化他に約して赤子より寺に住せしめよと教へ玉へり。自ら法花三昧を得んと思ふ者は。年少の弟子を畜へざれとなり。又樂てと云字。字眼なり。法すら好むはあしかりなん。況や年少を好樂するをや。又南嶽天台俱に衆を領じ玉へる故に。自らの證位進まずとて歎き玉へり。何止年少のみならんや。止觀の第七に南嶽の四擇。天台の三術を明せ

り。披て見べし。自行に衆を領すれば其の爲に志を奪はれて自行立しかたき故あり。若一切の人皆衆を領せずんば佛法は絶ぬべし。殊に密教は師資傳授を本とすれば。大師は兒より取立ることを教へ玉へり。且密家には最後斷種の人とて。密教付法の斷ふるを重罪とするか故に。化他門に約まて衆を領するをさらはず。但し一生に悉地に入んと思ふ者の衆を離れて。知法の同法と俱に名山勝地に隠れて。一生衆人に交らざれ。しからざれば悉地を得ることあたはず。自力強盛にして後に人を利すれば。自も損せず又他も廣く利すべし。然れども損已益物は菩薩の常なれば衆を領して嫌はず。設ひ自分の證位進まずとも他を利するを本とするは。悲増の菩薩なり。衆を領せず少年の弟子沙彌を畜へざるは。智増の菩薩の攝なるべし。蓋し小乗の自調自度の心にも近かるべきか。理趣經には菩薩勝慧者乃至盡生死爲度衆生故而不趣涅槃とも説き略出經には三界極重罪不過於厭離。汝於貪欲處莫生厭離心とも説玉へり。不空三藏の毎日三時に修法し玉ひしに。或時壇上へ金剛薩埵現して。白毫の光明普く照して。汝悉地近かるべしと告玉へば。三藏呵して曰く衆生未だ度せず。吾何ぞ自度せんやと。其時に薩埵隠れ玉ふといへり。是を眞の大菩薩とは云べきなり。智増の菩薩は。先自ら無生忍を得て後に。自在に一切衆生を度せんと誓ふが故に。我か悉地を願ふも度生の爲なり。起信論には若衆生心怯弱にして。此世



界に住しては信心成就すべき事難く。退せんことを畏れば。淨土に生せんことを願へ。彼土には三途の名も無く終に退還することなくして。正定に住することを得といへり。十疑論に具に是を説り。六百年來西方往生を願ふ人。天下彌滿せり。是れ末世の人は勇猛の心あり。志性定らざれば。阿彌陀佛の超世の別願方に乘して。彼土に往生し。無生必を證し身を百佛世界に分て。自在に衆生を度せんと圖ればあり。但化他の心少くて極樂に生じなば。樂を受んとのみ思ひ。懈慢界に生じて進むことあたはず。辨へずんばあるべからず。

◎第四十八 梁の慧布法師及び三種菩提心等の事

昔し梁の慧布法師と云人あり。博學廣智よて諸人の仰ぐ所あり。西方を願ふ者を見ては。則ち告て曰く。方土の淨は吾が願ひにあらす。今願ふ所只衆生を化度せん。如何ぞ蓮花の中に在て。十劫樂を受んや。未だしかず三途の苦に處して救濟するにはと。終に七十に及びて攝化道行堪がたかりければ。衆に告て曰く。我命残り三年なるへし。但し老困にして道を行することあたはず。住世何の益かあらん。常に願はくは。生生世世に邊地の三寶あり處に生れて。佛事を作し衆生を利益せんと。穀を絶て食せず。陳の主救して醫師を遣はして診脈せしむるに臂を縮て許さず。遂に陳の貞明元年十一月廿三日に端坐して寂す。遷

化の前大地大に動く。七日にして即卒す。卒して手三指を屈す。持せとも又屈す。實に第三果を得たる徴なり。又大史奏して曰く。得道人の星滅すと。又臨終の前大衆に告て曰く。昨夜二菩薩來迎せ。一は是生身。一は是法身あり。吾已に許す。尋て諸天來り迎ふ。生を願はざるが故に許さざるのみと。慧布の心は大丈夫の意氣なり。悲増の菩薩といつべし。涅槃經の發心畢竟二無別。如是二心先心難。自未得度先度他是故敬禮發心と説む。菩薩は初發心より利他を先とするが故なり。慧布及不空の如きなり。淨土を願はずとも。上品上生に生して必ず一切衆生を度すべき器宇なり。唯菩提心なくて穢土を厭離せむ是三界の極重罪といへるなるべし。九品の中に上品下生の人。但し無上道心を發すのみにて往生すと説けり。然れ只菩提心程勝れたることはあらじ。此菩提心に顯密權實の異あり。上求下化の二心に出ず。此の二心を密教は勝義行願の二心と号す。淨土を願ふの勝義の菩提心を先とするに攝すべし。慧布及不空の如き淨土を願はず。生々世々に穢土に居して。衆生を度せんと誓ふは。大悲行願の心を先とするなり。故に自ら證位進まざるをも願みず。大衆を領して法燈を挑げ。正法を所持し人天を利益し。一切衆生成佛し竟て。後に我成佛せんと誓ふ。是を大悲闡提の菩薩と名く。三摩地の菩提心に住する人は。六大體性本有常住にして。佛と衆生と我と同じく六大にして異なしと信知す。穢土即ち淨土



。凡卽是佛にして。西方の阿彌陀佛は。我胸中の蓮體なりとしるか故に。西方を願ふといへども。欣水にもあらず。穢土を嫌ふといへども。厭離にもあらず。平等平等して自行自ら立し。化他自ら満す。是を智慧均等の菩薩といつべし。然れども無始の間隔の故に自行は易く化他は難き。今の世にも損已益物の心ある人は。救世の居士ありと知て恭敬すべし。況や智慧均等の人をや。但し身を法服の内に隠して利養を貪り。不淨說法を慚愧なきの輩は天下に彌綸せり。辨へずんばあるべからず。恥ずんばあるべからず。是亦師の過なり。詩に曰く餅之馨矣。維嚙之恥なりと。司馬公が曰く訓導不嚴師之惰なりと。夫れ師として弟子を能く教導することあたはざるは地獄に墮すといへり。經に或人大海を渡るに船動ず。諸龍出で、此中に沙門あり。是は我先生の師あり。教導のあしかりける故に龍趣に墮せり。其沙門を海中に沈めよ。恨みを報せんと云ければ。沙門聞て我罪あれば則ち海中へ沈みけり。さて船能行て諸人難を免れたりと説けり。菩薩善戒經にも旃陀羅等及び屠兒。惡業を行すといへども如來の正法を破壊することあたはざれば。必定して三惡道の中に墮せず。師として弟子を教呵することあたはざれば。則ち佛法を破す。必定して當に地獄の中に墮すべし。名譽の爲の故に徒衆を聚畜する。是を邪見と名け魔の弟子と名くと説り。豈恐れざるべけんや

◎第四十九 念佛者の癖並に闕支分念佛の事

問上に聞ゆる所。設ひ博學廣識ありとも童子の如く正直ならば。未來の引攝にも預り。現世の悉地をも成すべしと。是法然上人の。設ひ一代の法をよくく學すとも。一文不知の愚癡の身になして尼入道の輩に同じふし。智者のふるまひをせずして。唯一向に念佛せよといへると同とやせん異なるか。答大に同なり。但し童子は邪念希なり。一文不知の尼入道は平人よりも倍愚にして。倍邪見なるあり。故よ是の分喻あり。唯其の正直但信あるをとるなり。しかいへばとて渾て學問を絶するにはあらず。法然上人平生諸事を放下せしめ唯念佛の一行を勵し玉ひしに。弟子勢觀房と云あり。幼少の時より學問せで。老後よ悔み申されけるは。上人常に示し玉ひさ。學問を事とするは雜行自力なり。但し念佛の本願の行にして。往生の正因ありと辨るほどの學問の。したるがよきなりとありしを。空しく學問をやめし事の悔しさよとなげかれたり。念佛にて往生すとするほどの學問は。よほど情に入ずしては成がたかるべし。石川入道。道遍る。人に語られけるは故上人常に示し玉へり。念佛にて決定往生すと知程の學問はせよと。然るに我學問をせざりしことの本意あさよと。悲しまれけり。菩提の爲に學問せば何ぞ往生の妨とあらんや。高野山明遍僧都も曰く世間の學問は名利の爲なり名利の爲ならば學問すべからず。されとも因果の道理



を知るほどの學問はすべきなりと。或は初は名聞の爲に學問すれども。學竟ての深信信解を生して往生の正因となるあり。慧心の僧都の如し。されば小智の菩提の障りといへるハ儒學の事なり。或は佛法を學へども。諛に云阿房の早合点とやらにて。深く理を究めずして。已度の想をさせるを言なり。今時の人多くは是なり。小智は菩提の障なりとて學問をやめ。ひたすらは懈怠緩慢にして愚癡增長せる人あり。我試に問べし。小智は菩提の障ならば愚癡の何の障ぞやと。此時彼人如何が答んや。夫愚癡の釋論には根本無明と説。菩提心論には無始の間隔と名け。一經には本有の三障と言ひ。疏家は遍計所執と釋し。大師の微細妄執と談じ玉へり。皆同躰一惑にして即ち無明煩惱なり。三界輪廻の根本偏に是に由る。人天の善趣に生するすら猶此愚癡にさへらる。況や淨土に生せんをや。況や佛果を成せんをや。されば諸煩惱生必由癡故とも説り。然るをひたすらに愚癡に在るやうに教ゆるは邪教なるべし。前に童子の如くになれといへる。心正直にして六塵の欲少く。能く善知識の教を信受するをいへるあり。凡入道の愚癡の人。又是に異なり。善知識教へて殺盜淫妄。飲酒食肉は罪なり。能往生を妨ぐ。懈怠緩慢は佛の呵し玉ふ所る宜しく精進に修し玉へといへば。愚癡にして善惡邪正を分別することあたはず。教化を信受することあたはずして即ち曰く。でも持戒の我が好まざるなりと。然らば精進玉へといへば。で

も力及ばずと。能其根をさへひれば邪師の教を堅く執して改むることあたはざるなり。かく非を改むることあたはず。人天にすら生ずべからず。況や淨土をや。此をこそ小智は菩提の障にして。愚癡は一切の障りと云つへし。此のでもと云病はと重病はあらじ。かりそめの醫師の療治に及びがたし。されば邪人正法を説ば正法も邪法となり。正人邪法を説ば邪法も正法となるといへり。説法講談などせん人は。よく心得べき事なり。少も私の義を加へて。邪命不淨の説法をなさば。一盲衆盲を引て相引て深坑に落べし。衆人に邪見を生せしむる。自らの罪いくばかりぞや。阿鼻地獄足下あり。恐るべし悲ふへし軍書に心も剛にして要害堅く用心を應にせよといへり。而も智者の舉止をせずして念佛するは臆なり。五戒八戒菩薩戒具足戒等に住して。煩惱魔の賊容易に來らぬやうにするは。要害を堅くするなり。法然上人の意も是なるべし。問殺盜淫妄。飲酒食肉の往生を妨ぐと云ハ何の義ぞや。既に下品上生は十惡の罪人。下品中生ハ。破戒無慚にして不淨説法し。僧物を盜せる罪人。下品下生は十惡五逆具諸不善の愚人なり。此を往生の機とす。然るを上如くいはゞ經文及び如來の本願に違するにあらずや。答如來の本願として人に造惡を勸め玉ふことはあらじ。下品三生の人は。一生罪福を信することなく。諸の惡業のみ造れる人。臨終の時に善知識種種に教諭して如來の本願を説き。十二部經の首題を唱へて聞しめ。



三寶に歸依せしめ。慚愧懺悔の心を生ぜしめ。乃至苦逼して心念なりがたき人よは。口稱十念せしむる功德に因て。念念に八十億劫の生死の重罪を滅して。往生を得と説けり此は一生懺悔の心も亦く罪福を辨へざる人なり。今時の人は幼より如來の本願及び三福三心等の行を聞といへども行せず。豈止行せざるのみならんや。轉讀大乘。持戒堅固の人を誘して難行なりと云。而も諸の惡業をなせども。口稱さへすれば往生すと心得て。肉食しても南無阿彌陀。飲酒してもなむみだ。殺盜淫妄してもなむみだ。口占みて往生を願ふ。是猶風をやむ人の。寒風に赤裸にして走り回りて。我の藥をのめは。頓て平愈すべしと云て。養生の方便をしらざるが如し。何れの時にか平愈を得んや。智度論に曰く。佛は醫王の如く。法は妙藥の如く。僧は臆病人の如く。戒は服藥の禁忌の如しと。今時の人戒を持せざるは禁忌を知らざるなり。薩遮尼隸子經に曰く。若し戒を持せざれば乃至疥癩野干の身をも得ず何に況や當に功德の身を得べけんやと。月燈三昧經に曰く。若無戒智。猶禽獸。華嚴偈曰戒は無上菩提の本あり。當に具足して淨戒を持すべしと。法然上人の金剛寶戒章にも。無戒の人。畜生に同じといへり。然るを戒を難行ありと誘して持せしめざる。又師の過なり。猶看病人の病者。毒をあたへ。及び無養生を教るが如し。是罪皆說法者に歸すべし。夫下品三生の人は。臨終に慚愧懺悔念佛して。後念を續ざるが故に往生を得るなり。

されば天台の十疑論にも。臨終の心は善心猛利にして。尋て惡念生する間なく。十念と等しく命終すれば。決定して衆罪滅して往生すと釋せり。今時の人の慚愧の心無く。本願に誇りて罪倍深し。阿輪柯王の。我は阿育王の弟なりと思て。放逸にて國禁を破して禁獄にあへるが如し。如來の本願何ぞ衆生に造惡を勸め玉はんや。佛は大悲深重なれば。設ひ罪深くとも三心具足して名号を念せば。我來迎すべしと誓ひ玉へるあり。今時の人の念佛は。三心具足し。六字圓滿せるは少あり。尤も順次の往生はかたかるべし。五生十生も後に生ずべきか。をばつかなし。又眞言を誦するに清濁を亂り。長短の音韻に合せず。或は文字脱落すれば。闕支分念誦とて。功德かけて満足せず。一一文字皆金色佛と説は。闕文分の念誦は。所現の佛も支分不具足なるべし。率都婆を立しに鼻と思し處かけたれば。所現の僧も鼻かけたりと云こと。地藏菩薩利生記に見たり。地藏を香水に印せる人。多く地藏の現じ玉ひしにも。不具足なる多かりしと云こと。靈驗記に見たり。今此に例するに念佛も亦然あるべし。娑婆世界にて一人念佛を修すれば。淨土に一の蓮花生して其花後に來迎すといへり。されば行人勇猛精進なれば。其蓮花彌長大にして。花色光澤なり。懈心の人蓮花は。日に枯萃すといへり。然るに今時の人の稱名は六字具足せず。ないたと唱ふる人もあり。あんだつと云人もあり。ぬわいづねと云人。あいたと云人。なまいたんは



と云人。なつはいたつふと唱る人あり。皆闕支分なり。然らハ淨土にさける蓮花も。偏菊  
 あきの如くに。花葉不具足に發るなるべし。慣まざるべけんや。橘太夫ハ至誠心にて毎日  
 十念ばかり唱はしが。目出たく往生せり。必しも數遍の多きを善とはいはじ。丁寧ていねいに唱  
 て百八遍。一千八十遍誦せん功德廣大なるべし。闕支分の念佛は千日方唱はたりとも。橘  
 太夫が毎日の十念に遙はるかに劣るべきあり。法然の愚癡の身にまて。尼入道の無智の輩に  
 同じふし。智者の舉止をせずして。一向に念佛せよと勸め玉ひしハ。お學ある人の必ず自  
 の才に誇ほたつて。心は愈いよいよ向上かみあがりよなれとも。行は愈いよいよ下くだるなれば。自の才を用ひず。至誠心。  
 深心。回向發願心に住して。偏に本願を仰ぎ。中品上品の行よも至るやうに修せよとなり  
 。造惡の尼入道の愚癡に同して。破戒無慚飲酒食肉して。邪見に入と云にはあらず。心正  
 直にして善知識の教を信受するは童子の心。又老衰せる尼入道などの心なり。第一義諦に  
 於て心驚動せずと説るも深信信解なれば。童子の性精神顯利にして塵欲の爲に昏くらまされざ  
 る間ま信解せば。不驚動の地に至ること易やすかるべし。然らハ上品三生の人も。童子の如く  
 無執無分別にして正直ならば。往生を得べし。此を文殊童眞の妙慧とも言べきをや

◎第五十 如來出世の本懷の事

問法華經の如來出世の本懷なること。經中の明説。諸宗共に詳し。古今同じく談す。然る

に淨土宗には。念佛の法門は如來出世の本懷なりと談じ。戒系には戒を出世の本懷なりと  
 談す。是なりとやせん。將爲妄なるか。多岐に羊を逸す。請正路を示し玉へ。答淨土宗に  
 念佛を以て如來出世の本懷と云こと。震旦の諸師未た言はず。我朝中古已來の人。問此義  
 を談す。暗推の説なること明けし。然れども理を以て推すに又其義をさしあらず。今愚案  
 の法門を記して。之を諸方の君子に正す。理の當らざることあらば慈惠を以て指斥し玉へ  
 。今此義を述るに二種の趣あり。一には顯略趣。二には祕密趣あり。初に顯略趣と者天れ  
 如來の設教は皆衆生を度して三界を出離し。終に無上道に至らしめんが爲なり。然るに衆  
 生に三乘。五乘。七方便。頓。漸。顯。密の機あり。其相應に隨て法を説て衆生を救濟し  
 玉ふ事猶良醫の病に應えて藥を設けて衆病を療するか如し。根機万差なれば鍼灸十種なり  
 。遲速勝劣の異ありといへども。同じく濟生の教樂あり。法華に諸法實相の理を説き。三  
 乘を開會して一乘に歸し。佛の知見に開示悟入し玉ふ。是眞の出世の本懷なりといへども  
 。諸の衆生德薄く垢重して卒爾に悟入することあたはず。殊に末法万年の今は。戒苦を受  
 持する者すら猶希なれば。如來遙に末世を鑒みて。一衆生をも漏らさず度せんと欲し玉ふ  
 か故に。此淨土の教門を開き玉ふ。別して娑婆世界の衆生は極樂淨土に有縁にして往生の  
 業修し易し。されば古徳も諸經所讚多在彌陀と釋して。顯密二教の中に多く淨土往生の修



行を説き玉へり。中に付て無量壽經に。阿彌陀如來の超世の別願を説て。十方世界の無量の菩薩。皆樂淨土に往生せることを説き。又此の娑婆世界の。六十七億の不退の菩薩皆往生し。初心小行の諸の菩薩。少功徳を修習する者。無量無邊なる皆當に往生すべしと説く。乃至十方の佛國の。淨土往生の國の名号。菩薩の名をば佛の妙辯を以て一切の間説玉へとも。尙説き盡し玉ふことあたはじ。但略して説玉ふといへり。又末法の季に諸の經卷法門皆滅盡せん時にも。如來の慈悲を以て衆生を哀愍して。此無量壽經を留めて止住するごと百歳ならしめんといへり。されば智門に約して談ずる時は法華を以て出世の本懐とすといへとも。悲門に約して説く日は。淨土の一致は出世の本懐なること明けし。諸經滅盡して但此經のみ留るは豈如來の本懐にあらずや。又淨土の教は。上品の三生ハ大乘の菩薩。中輩は二乘。下輩は造惡の凡夫にして皆往生すれば。一切の機根を漏すことなし。一切の機根を一法を以て濟度すること本懐にあらずして何ぞや。されば天台淨影及び善導も。二藏の中には菩薩の攝。漸頓の悟入を辨ずれば頓教なりといへり。菩薩藏の頓。寧ろ本懐にあらずや。無量壽經に。佛彌勒に告玉ひく。設ひ大火の三千界に充滿するありとも。必ぞ踰て此經法を聞て。歡喜し信樂し受持し讀誦し説の如く修行すべし。如來の出世は値がたく見がたし。諸佛の經道は得がたく聞がたし菩薩の勝法諸波羅密は聞ことを得ること亦

難し。善知識に遇て法を聞能く行する事も亦難し。若し斯の經を聞て信樂し受持するは難か中の難此難に過たるはなしと説り。法花の方便品に四難を説と。今の五難と文義相似たり。難中の難又豈出世の本懐にあらずや

◎第五十一 唐の法照法師金色世界に至て文殊を拜する事

昔しもろこしに。法照法師と云人あり。衡州の雲峯寺に住して勤修懈らざりけり。或時小食の粥の鉢の中に於て。忽ち五色の祥雲を現す。雲の内は山寺あり。寺の東北五十里に五町一山あり。山下に湖あり。湖北に石門あり。入こと五里ばかりにして寺あり金色の額あつて大聖竹林寺と云。法照分明に見といへとも。心に疑ふ又佗日五色の雲鉢中に現じ。其中に五臺山の諸寺を現するに地皆金色なり。山林の穢惡あることなし。寶池寶臺宮殿樓閣衆寶莊嚴せり。文殊師利菩薩一万の聖衆と共に其の中に住し玉へり。又十方の諸佛の淨土を現す。粥を食し畢て方に滅す。然れとも心に疑て未だ決せず。院に歸て僧に問。曾て五臺山に遊ことありやと時に嘉延。曇暉と云二人あり。吾曾て五臺山に到る。鉢中の所見と異なることなしといふ。大曆四年の夏。衡州の湖東寺の内の高樓臺に於て。一夏九十日。五會の念佛道場を起す。然るに六月二日の未の時に。遙に祥雲あつて臺及寺を覆ふ。雲の上に諸の寶樓閣をならべ。檐を連ねて。金銀瑠璃彩を交へ光明赫奕たり。其の樓閣



の中よあまたの梵僧あり。各身の長一丈ばかり。手に錫杖を執て行道し玉へり衡州の諸人群り聚て此を拜する。阿彌陀佛及文殊普賢一万の菩薩と俱に此の會にいます。其の身の長高大あり。此を見る者歡喜の涙を流し歸依の首を低る。無始の罪障の霜は諸尊加被の光明に照されて忽に消に消。本具の功德の花は衆人信心の合掌に開けて自ら馨し。其日の酉の刻に至て所現の樓閣等漸く消ぬたり。晚に道場の外に於て一人の老翁あり。法照に告て曰く。師先發願して金色世界に往き。文殊大聖を觀奉るべし。今急に何を往ざるや。法照怪で答て曰く。時難く路艱めり何ぞゆくべさや。老人の曰く但亟かに往道路固に留難なしと。言訖て忽然として見ず。法照驚て道場に入り。重て誠願を發して設ひ火聚氷河ありと。我必ず退せず往べしと。一夏の滿するを遅しと待れける。八月十三日に至て。南嶽に於て同志四五人と共に至るに。果して沮礙なし。則ち五年四月五日に五臺縣に到るに。遙に佛光寺の南に數道の白光あるを見る。六日は佛光寺に到るに曾て鉢中に現せしと違ふことあることなし。其夜の四更に一道の光北山の下より來て。法照の身を照す。法照驚て堂内に入り。乃ち衆に問て曰く。是何の祥ぞや吉凶如何と。僧あり答て曰く。此大聖不思議の光あり常に有縁の人を照し玉ふと。法照歡喜して即ち光明を尋ねて寺に至る。東北五十里の間に果して山あり。山下に澗あり澗北に一の石門あり。二人の青衣の童子齒

ひ八九歳ばかりなるを見る。容貌端正にして其面滿月の如し。門の側に立て一人をば善財と稱じ一人をば難陀と云。法照を見て歡喜し問訊去て禮儀をあす。終に法照を引て門に入る。北に向て行くと五里ばかりにして一の金色の門樓あり。漸く門前に至るに大伽藍あり。寺前に金色の大なる額あり大聖竹林寺と号す。昔鉢中に現せしに少も違ふことなし。方圓二十里。はかり。一百二十の院あり。一一に皆寶塔莊嚴して。其の地は則純ら黄金を以て成す。流泉浴池寶樹行列し。微妙の蓮花池中に馥郁として殆んど極樂淨土の如し。法照寺の中に入て堂を見るに。文殊は西にあり普賢は東にあつて。各師子の座に坐し。説法の聲微妙あり。文殊の左右に一万餘の菩薩あり。普賢も亦無數の菩薩圍遶せり。法照の歡喜の涙せきあへず。二尊の前に至て禮をなして問て曰く。末世の凡夫聖を去こと遙にして知識轉劣り。垢障尤深して佛性顯現するに由なし。佛法浩瀚ありいふかし。何の法門の修行か其肝要なる。唯願くは大聖我疑網を斷じ玉へと。文殊告て曰く。汝今佛を念せよ今正に是時なり。諸の修行門念佛に過たるはなし。三寶を供養して福慧雙へ修す。此の二門要も捷徑なり。ゆゑはいかん我過去の劫の中に於て。佛を觀するによるが故。佛を念するに因か故。佛を供養するに依が故に。今一切種智を得たり。是故に一切の諸法般若波羅蜜甚深の禪定。乃至諸佛皆念佛より生ず。故に知ぬ念佛は諸法の王。汝當に常に無上法王を



念して休息することなからしめよ。法照又問て曰く。當に如何念すべきや。文殊告て曰く。此世界の西に阿彌陀佛あり。彼佛の願力不思議あり。汝當に繼念して間斷なかるべし。命終の後決定往生して永く退轉せざらんと。是語を説已て文殊普賢の二大聖。各金色の手をのべて。法照の頂ををで、授記して曰く。汝已に念佛するが故久しからずして當に無上正等菩提を證すべし。若善男女等疾かに成佛せんことを願はば念佛に過たるはなし。能速に無上菩提を證すべしと。即ち二大聖互に伽陀を説玉ふ。法照聞已て歡喜踊躍して疑ひ悉く除さぬ。又更に禮ををし已て合掌して立つ。文殊告て曰く。汝諸菩薩院に往詣して次第に巡禮すべしと。法照教の如くに瞻禮して遂に七寶の林園に至る。其林の果み纒纒熟するに。その大さ椀の如し。法照即ち取て此を食するに。甘美なること人間の所有にあらす。便ち食し已て身も意も泰然として安樂あること。聖果を得たるが如し。遂に二大聖の前に至て禮をなして退くに。前の二青衣の童子送て門外に至る。禮し已て頭を擧るよ。前の聖寺忽然と去て所在を失す。法照悲しみ歎いて乃ち碑を立て記す。今に至て存せり。又四月十三日又聖寺及文殊普賢並に佛陀波利三藏を拜し。後に又佛陀波利を隨て金剛窟に入る。又化人あり見所の聖寺の妙境を衆人に語り世間に流布して見聞の輩をして菩提心を起し。大利益を得せしめよと告。依て三十餘僧と俱に石を立て標記す。自後法照。花竹林寺の

處に於て一寺を建て竹林寺と号す。又大曆十二年十三日に法照弟子八人と共に東臺に於て白光數四を見。次に異雲。雲の間に五色の光あり。光の中に圓光紅色の文殊あり。青毛の師子に乗す。衆皆な明に見るに乃ち雪少し降る。及び五色の圓光山谷に偏ぬし。法照勇猛に勤めて年を重ね。遂に其の終を知ることなし。定めて文殊の淨土へ入りぬらん。具には宋高僧傳の第二十一に見たり。今案するに法照法師に文殊教へて念佛を勸め玉ふ事は文殊の西方の利菩薩なるが故なるべし。されば末世相應の行なれば。殊に金色世界を示し。衆人に西方の行を勸め玉ふなり。又念佛は諸法の王と云。疾かに無上菩提を證することば念佛にしくはなしと云も。亦出世の本懐たるにあらすや

◎第五十二 法華經は阿彌陀の三昧ある事

二に祕密趣と者。法花經は阿彌陀の三昧なり。故に阿彌陀佛を念するの即ち法花を念するなり。故に觀經には密意を以て。若し念佛する者は當に知るべし。此人は是人中の分陀利華なりと説く。法花を梵語には薩曇芬陀利經と名く。人中の分陀利花と説は。念佛する者は即ち人中の妙法蓮花なることをいへり。此に尙甚深の義あり。未灌頂の人には説さるべきなり。知法の阿闍梨に從て問へ。又高祖の法花の開題には。法花の梵名を現すは此の九字を以て。胎藏の八葉九尊の種子とす。胎藏の胎の六日即ち阿彌陀なり。又法華の序品には四種の阿字を説。是一經の。西方の



四親近の種子と心同じ。天雨四花。四阿修羅。四迦樓羅。四緊那羅。四乾闥婆。四佛知見。四大聲聞。四安樂行。地涌の菩薩の四人の上首。四要品。兩四の卷。四七の品。八方各四百万億那由他の土を淨じ。皆是西方の四親近の功德を表せり。又西方を蓮花部と号す。阿彌陀佛の八葉の開蓮花を三昧耶形とす。經を妙法蓮花と号して八軸あり。八十年の説にして。序に八大龍王を列ね。日月燈明佛の八王子あり。妙光法師には八百の弟子あり。大通智勝佛には二八の王子あり。八歳龍女は即身成佛す。多寶の塔は扉を西に排けたり。胎藏曼荼羅の義。皆是西方の徳にして。胎藏の曼荼羅を表せり。故に古徳の頌にも昔在靈山一名法花。今在西方一名彌陀。濁世末代名觀音。三世利益同一體といへり。觀音彌陀は因果の名あれば同なり。又四要品を心壽。眼。咽喉。の四に配するは普門品を以て咽喉とす。人若咽喉をくれば何ぞ人ならん。法花若普門品なくんば何ぞ妙經といへんや。又普門品の中に妙法蓮花の言なし。故に知ぬ一經の躰あることを。又壽量品の本地の常身と云壽の謂く無量壽佛。即ち咒字門あり。故に山王院の頌には阿字不生微妙體。即是衆生内心法。本來清淨如蓮花。故題妙法蓮花經と釋せり。此の咒字は即ち咒の咒あり。咒字を以て無量壽の躰とす。凡そ一切の男女の胸中に心の藏あり。三角赤色にして八瓣の筋あり。是を八分の肉團と云。又け干栗駄心と号す。狀未敷蓮花の如し。菩提心論に凡人心如合蓮花と説くは

是あり。男の上に向ひ女は下に向ふ。大日經に内心妙白蓮。八葉正圓滿と説く是なり。是の肉團の蓮躰に。七穴三毛あり。七穴より氣を生ずること霧の如し。此を悉多心と号す。慮知分別の心あり。此氣白色あれば。心蓮は赤あれども妙白蓮といへり。即ち此の霧の如くある氣。息風となつて出づ。斷。齒。唇。頂。舌。咽。胸の七處に觸る、時に。諸の言語となる。未だ言を發せず。口を開く最初に出る。自然の出息の即ち咒字あり。息風の命根の躰あり。大日經には命者所謂風ありと説き。或は咒字第一命と説く。一經には根本命金剛と説き。疏には風と着想あり想と者念なりといへり。此最初の咒字を。即ち無量壽命の躰。阿彌陀佛と云。故に方よ約しては西方に居す。西方は金を主る。金は風の精あり。時に約しては秋なり秋は殊に風多し。花落蓮成の時にして。萬物皆果實を成じ。宜あるかな成菩提の位とすること。此風大即遍法界の躰にして。内心の息風と。一躰にして二なし。故に心寂靜ある時は。息風も靜なり。乃至第四禪定に入れば。息風法界の風大と。一躰と成て。出入の氣絶するに似たり。本朝の明慧上人。第四禪定に入り玉へば。二日も三日も息風絶たるといへり。此の風大は此れ悉多心の外に顯れたるなり。故に心喜は音うるはしくして。笑ふ形あり。心又瞋れは言語うるはしからずして。瞋れる色あり。此全く内心外に顯れたるなり。故に心に阿彌陀佛を念すれば。其心即ち外に現はれて。口に南無阿彌



陀佛と唱へ手を合す。合掌は又合蓮花の形あり。二手の五指ハ五智五大なれば。即ち又心なり。唱ふる聲は聲字即實相の故に。此音即ち阿彌陀佛の形を現じ。又三昧耶身たる蓮花とある。唐の遼端及び吾朝の讚岐源太夫が死せし時に。口より青蓮花を生じ。源信僧都の胸より蓮花を生ずと云は。即ち佛の三摩耶身を現するなり。又即ち千栗駄心外に形を現するあり。此の内心の咒字蓮花の徳を。佛密意を以て妙法蓮花と説き玉へり。此蓮花をば人具足し誦々圓成せり。此を唯心の彌陀と号す。或は隱密して喩に約して。念佛する者の人中の分陀利花と説く。人人此蓮花を具足す。此を佛性と云。又即ち阿彌陀佛なり。一切衆生の内心に皆な阿彌陀佛を具足せり。又此の心蓮を即ち己心の淨土と号す。覺錢上人の釋に。名は西方に假とも實には法界に遍ねし。願を發して生せんと欲する此心則ち彼刹あり。九品の花臺は則ち性徳の心蓮を開き。無量の莊嚴ハ則ち恒沙の己有を顯はす。と云は此を以てなり。前に此土の衆生の極樂淨土に有縁なりと云も。有縁にはならず。我心即ち淨土。即ち阿彌陀佛なればなり。されば彼の國の皆な蓮花を以て莊嚴し。水鳥樹林皆法音を演。是れ息風は一切音聲の根本にして。悉多。千栗駄の二心なればなり。或ハ種子に咒字を用ゆ。咒字の鉢ハ咒字にして。即ち風大の種子なり。又咒字一鉢の深旨あれば。咒字に同じ。如來出世の本懐ハ。一切衆生を成佛せしめんが爲あり。然るに一切の菩薩。初めて佛

果を成するは。即ち無量壽佛となる。西方は成菩提の位なるが故あり。又智慧門と号す。法華に諸佛智慧甚深無量と説く。成佛の位の權實二智を歎せるなり。されば序品には大智文殊發起也。法說周には大智舍利弗先づ悟入す。是智慧門の經なればなり。又即往安樂世界と説く。四大聲聞等の初住に回心すと云も。圓教の初住は別教の初地なれば。即ち阿彌陀佛の位あり。大乘同性經に。釋迦及び彌陀は。初地の佛なること説けり。故に龍樹ハ初地の菩薩にして。西方に往生し玉へり。又上品上生に生ずる人は。即ち無生法忍を悟ると云は初地あり。古より法花を讀誦して西方に生せし人。數十百人。皆是法花は阿彌陀の三昧なるが故あり。然れば即ち法華を讀誦すると。念佛すると。功德同等にして異なることなま。尙法花は延て六万九千三百八十四字となすか故に淺略なり。名号は六字なるが故に深祕あり。乃至祕密の妙旨は咒字の一字なるが故に。祕中の極祕あり。此の咒字を強て妙法と号するが故に。略すれども漏れず。廣れども亂れず。如來出世の本懐。豈に阿彌陀佛の名号にあらすや。又西方の四親近の菩薩は觀音文殊彌勒龍樹なり。觀音は普門に出で。文殊彌勒は本迹二門の發起衆なり。龍樹は經中に出ざれども。此の菩薩は直に阿彌陀佛あれば。經の總鉢と云つへし。又如來の滅後に諸大乘經皆龍宮海藏へ隱沒せるを。龍樹菩薩出で。龍宮に入て誦出し世に傳へ玉へり。末世に法花を弘通するは。皆龍猛の力なり



。是れ自内證の法門なればなり。又龍樹は西方の金剛語菩薩と号す。此の菩薩は西方の中の西方にして。法部の中の法部の尊あり。諸大乘經を誦出し玉ふこと。亦宜ならずや。又語菩薩は舌を以て三摩耶形とす。舌は心蓮の枝條にして。蓮花の一葉の形あり。是言語説法の根本なり。故に法花を讀誦する人の。死して後に舌根壞せざる人多し。是阿彌陀佛の三摩耶身を得たるあり羅什三藏法花を翻譯去玉へは。茶毗の後に舌壞せず。本誓約に依るといへとも亦怪むべし。梁の僧崖菩薩は常に法花を誦して。後に身を焼て佛に供するに。心蓮花壞せず。唐の遺俗。及法相。宋の師蘊。皆法花經の力に依て。死後闍維するに。舌根壞せず。紅蓮花の如にして。幾度焼ども銷爛せず。彌鮮明柔輒にして。甚だ愛しつべしといへり。又唐の遂端。及び吾朝の讚岐源太夫が。口より蓮花を生ずると舌壞せざると。善導及少康。吾朝の空也の。口より阿彌陀佛を出現すると義同あり。佛像は應身なり。舌根及蓮花は報身あり。常に唱る名号經咒は。是法身を出現するなり。又餘の諸大乘經を讀誦する人も。舌根壞せざるあり。皆金剛語菩薩の三昧にして。即龍勝の誦出あれば。舌根壞せざること。理契當せり。又金剛語菩薩の眞言よ。うむむ花はと云。さば三身あり。不壞は金剛なり。不坏は語の義。説の義あり。字義に約せば。不坏は不壞の義なり。舌の壞せざること宜あるかな。不坏は性鈍不可得の義あり。性鈍の人も唯し經を誦じ念佛するに感

應あること知ぬべし。陳の慧恭法師。及び源太夫か如し。文字の火大の種子にして。舌内の所發なり。心の藏の火を主る。舌の心の藏の枝にして。赤色なり。文字の鉢即舌にして火なり。何ぞ世間の火を以て此を銷鑠せんや。諸經は皆な龍猛の誦出あれば。阿彌陀佛の誦出といつべし。大師の曰く本を尋ねれば妙雲如來と。妙雲如來の即ち阿彌陀佛あり。されば法花には三乘即一と開會せり。又轉讀大乘の人。西方に往生すること。理相應せり。然れば則ち阿彌陀佛を念するの。即ち法花を念するなり。故に念佛を即ち出世の本懐と云に妨げなし。況や文字門眞實の義を證得すれば。現世に初地に至ることを得。觀智の儀軌に法花に依て修行する者の現世に無上覺を成ずることを得と説又現生に初地に入ることを得と説り。是文字門本不生の理を證得すればなり。即身成佛又豈出世の本懐にあらずや。已上の祕密の義は密宗の肝要。相承の義なれば眞の照覽恐ありといへとも疑謗の逆縁尙權教の戒行に勝れば。俱に毒鼓の因縁を結ばえめんが爲に粗茲に記する者なり。尙無盡祕密の義ありといへとも繁を恐れて述す。要聞の人は明師に隨て問へし。阿彌陀の四重祕釋及び祕密念佛の義略して下に述るが如し。○又戒家に戒を出世の本懐と云にも顯略祕密の二義ありといへとも。無盡の妙旨の山臺地墨にあらざれば記することあたはず。但し見諦の阿闍黎に隨て受學すべし



◎第五十三 法花經を誦して舌根壞せざる人の事

問法花を誦して舌根壞せざる人古來幾何かあるや。答予か寡聞淺識なる多く得ることあたはず且つ南北朝の時には僧をも火葬にすることを許さざれば壞と不壞とを知ること難し。且く予か見聞の人を擧げば。天竺。支那。日本に於て。三十餘人を得たり。謂く後秦の羅竹。大唐の實叉難陀三藏を論に説る比丘城の人。唐の僧襲。靜琳。慧滿。荊州の比丘尼姉。妹。范陽の五族寺の僧。雍州の僧及。慧顯法師。釋の遺俗。呵擔。法相。五代の漢の洪真。宋の傳章。師蘊。永安。直淨。必才。從進契嵩。善繼禪師。可觀崔鑿南湖の法智法師。上虞の胡長婆。大元の端裕。景元。安民。道行。守珣。蘊能。有權禪師。吾朝にハ圓善法師。熊野の比丘。春朝法師。定照法師等なり。多分の法花を誦せし人あり問密呪を持し。念佛を行とし。諸大乘を誦誦し。禪定を修習せる人あり。又多くは西方淨土を願へる人なり○又昔し北齊の武成の世に并州の東看山の側に人あり。地を掘て一處の土を見るに其の色黄白にして。傍の土と異あり。尋で一物を見るに狀ち兩脣の如し。其の中に舌あり。鮮紅赤色あり。人此を怪んで事を以て奏聞す。帝諸人に問に知者なし。沙門大統。法上法師奏して曰く。我聞く法花を持する者は六根壞せず。是昔の持經者の墓ならんと。乃ち中書舍人高珍に勸して曰く。卿は是信向の人なり。自ら往て是を看よ。必ず靈異あるべし宜しく淨所に安置し

て齋を設て供養すべしと。高珍勸を奉て彼所に至り。龍の法花を持する沙門を集めて。手杖香爐を執て旋繞して咒して曰く。菩薩涅槃の年代已に遠し。像法流行す幸に謬りなくんば請感應を現せよと。諸僧同じく法華を誦す。繞に聲を發するに彼の土中の脣舌一時に鼓動す。響聲なしといへども讀誦の狀に似たり。見る者身毛豎すと云ことなし。高珍具に奏聞す。詔して石函を造て此を藏めて山室に遷すと云へり。續高僧傳の三十八。是は土葬にせし人の舌根壞せざるあり。現に金剛語菩薩の三昧耶身を得たるなり○又宋の杭州の紹嚴法師。法花二万部を誦して淨土に生せんことを欣ふ。俄に陸地の庭間に蓮花生することを感す。諸人群集して瞻といへり○又五代の温州大雲寺の鴻楚法華を講すること五十許座。一日講堂の中に忽ち蓮花を生ず。口中より蓮花を生ずると義同なり。皆三摩耶身を得るなり○又唐の烏龍山の少康法師。常に人を勸めて念佛せしむ。小兒を教へて念佛せしむるに。念佛する者には錢一錢を與ふ。小兒體慕して少康を見ては即ち南無阿彌陀佛と唱ふ。後に烏龍山に於て淨土道場を立て。諸人を教化す。所化三千人少康の面門を望むに高聲に南無阿彌陀佛と唱れば即ち化佛口より出づ。十聲するに十佛出ること珠を連ねたるが如し。即ち告て曰く。汝等若し佛身を見れば即ち往生すべしと。貞元二十一年十月に結跏趺坐して。身より光明を放て遷化すといへり。此は現に佛の應身を得たるなり。今の人も善導。少康。及び吾



朝の弘也上人の如くに勇猛に念佛せば。何ぞ決定往生を遂げらん。又何ぞ口中より佛を現せざらんや。口中より音に隨て佛出玉ふは。祕密の聲字即實相。名即實體の義なり。

◎第五十四 觀山の東塔院の圓善法師の事

釋の圓善法師常に法花を誦す。後に熊野の肉背山に往て卒す。其の後に沙門壹容と云者あり。行で山中に宿す。中夜に何者ともしれず法華を誦する聲あり。其聲甚微妙なり。壹容は我れより先に人ありて宿せりと思ふに。一卷一巻誦じ畢て禮拜懺悔す。天明て見に人なし。但し傍に骸骨あり。支体全く連なる。年月久しく經たると見て。青き苔遍はく生じ。宛も衣を著たるに似たり。獨鐵の口中に舌あり。紅蓮花の如し。壹容見て怪しみ所由を問んと欲て次の日も尙宿して去らざ。然るに夜に入て彼の枯骨法花を誦すること前の夜の如し。魔に至て壹容起て拜して曰く。既し經を誦じ土ふ必ず心も言語もあるべし。願くは因縁を語り玉へと。時に骨人答て曰く。我は叡山東塔院の僧あり。此に至て死す。平生堅誓を發して法花六万部を誦せんと誓ふ。存日才かに三万部誦して天せり。願力の故に尙經を誦す。今近く功を終んとす。功終らば當に兜率の内院に往生すべしと。壹容聞竟て骨人を禮拜して去る。翌年又來るに苦骨を見ず。定て知ぬ功終て上生せりと云ことを。

◎第五十五 熊野の比丘死して後經を誦する事

紀州牟婁の郡。熊野村に永興法師と云者あり。智行兼備はる。比丘を承興に従て學ぶ。小欲知足にして能く勤む。其の所持の具は法花一部。水瓶一つ。繩牀一つの外には一物もあることなし。比丘常に法花を誦す。一年あまり居して後に永興法師は床を施して曰く。我山を越て勢州に往んと欲すと。永興相別れて二人の銀鹿をして送らしめ。且糗を與て糧とす。行こと一日次の日二僕を返らしめ。并に經と糗とを與て。自ら水瓶と麻繩とを携へて獨り別れ去る。二年を経て熊野村の人山に入て木を伐るに誦經の音を聞く。累日止す。村人怪しみて尋ねれども見えず。往て永興に語る。永興山に入て深く尋ねるに一の骸骨あり麻繩に纏て二脚巖に垂る。傍に水瓶あり。永興見て是彼の比丘なりと知て。涙を流して禮拜けり。後三年までに尙誦經の聲あり。永興再び往て骨を收めて葬るに舌根壞せず。赤く鮮なること紅蓮花の如しといへり。

◎第五十六 春朝法師慈濟の心深き事

釋の春朝法師常に法花を誦す。音韻和雅にして聞者をして淨信を生せしむ。曾て圍園を見て悲て曰く。惡業を作て刑を受く。我如何此輩をして佛種を植しめん。我當に七遍獄に入て法花を誦して結縁せんと。即ち貴人の家に行て銀器を盗ひ家人捕へて獄に入る。皇子に春朝を知る人あり。廷尉に令して曰く。春朝は善人あり刑を加へざれど。春朝獄に入て法



華を誦す。其聲あはれにしてうるはし。罪人等聞て皆を合掌して涙を流してありがたがりけり。又廷尉夢らく白象獄所に聚る。諸天數もなく多く下ると。又大理卿夢らく普賢菩薩白象に乗して。手に鉢飯を捧て獄の門に立つ。人あり問て曰く何の故にか此來り玉ふや菩薩の曰く春朝に供すと。大理卿大に驚て廷尉に告ぐ。廷尉も亦夢を説て相共に不思議ありと歎じて。即ち法師を免して獄を出す。其後法師五六度獄に入る。廷尉議して曰く春朝の罪狀一二にあらず靈應あつて罪を免かるゝに依て恣に盜をなす。輕罪に準して別て已後を止めんと。獄吏北野に往て春朝の足を別んと欲す。法師聲を擧て法華を誦す。其音哀婉あり。官吏事竟て泣く歸る。其夜廷尉夢みらく少童告て曰く春朝上人は罪人を救はんが爲に七遍獄に入る。是菩薩の大悲方便あり。汝何ぞ心をさやと。廷尉身毛豎て悲み悔といへども甲斐なし。春朝法師終に北野に於て死す。鬪骸尙は毎夜法華を誦す。一僧有て鬪骸を取て山中に葬るといへり鬪骸猶法華を誦す。舌根の壞せざること知べし。況や慈悲心深くして死を怖れず獄に入る。眞の大菩薩あるをや

◎第五十七。定照法師の墓の事

釋の定照法師は仁和寺の寛空僧正の弟子あり。常に眞言を持誦す。又法華を誦す臨終に弟子は告て曰く。我屍を火葬にすることなかれ。死後猶法華を誦して一切を饒益すべしと語

り訖て。印を結て端坐して遷化する。門人遺命に隨ふに其の墓果して常に誦經の聲あり。或は振鈴の聲を聞といへり。具には下に記するが如し。此も亦舌根壞せざるの徴しかり。上來の人は皆な經王の力に依て。現に語菩薩の三摩耶身を得たるなり現世既にかくの如し。未來に淨土に往生すること何ぞ疑ひんや。羨しき事どもあり

◎第五十八。唐の遂端法師口中より青蓮花を生ずる事

問法花を誦じ及び念佛せる人。蓮花を感せる事幾人かあるや。答貧道か寡聞ある多く得ることあはばす。姑く九人を得たり。故に茲に記して同志の人に示す。二人の上に記するが如し。唐の明州德潤寺の遂端法師は何の所の人と云ことをし知す。姓は張氏なり。幼の時に師法花を授くるに遂端日夜十二時に誦して怠ることなし。一生の間幾千萬部と云ことをしるものなし。咸通二年に結跏趺坐して遷化する。須臾に口中より青蓮花七莖生ず。遠近奔走して瞻禮し。皆不思議ありと讚歎す。其の邑人龜を造て葬ふる。二十餘年を経て其墳しばし光明を放つ發て見るに形質壞せず。生るか如くにして蓮花も萎ますといへり。此の人は全身壞せずして。而も蓮花を感ぜり。其舌根の壞せざること知ぬべし。然れども勝れたるに約して今茲に列ぬるのみ

◎第五十九。播州の平願法師法花を誦して蓮花を感ずる事



釋の平願法師ハ。播州の人なり。書寫の性空上人に事へて常に法花を誦す。或時深山に草庵を結て經を誦するに。大風吹て庵を吹倒す。平願壓れながら經を誦して止す。忽に神人來て壁の破たる隙より引出して。摩頂慰誘して曰く。汝夙殃の故に此禍に遭といへども。經玉の力の故に身全きことを得たり。益勤めて誦せば安樂を得ん。今般の壓れたるは是轉重輕受ありと。平願歡喜して此より持誦彌勤む。即ち衣鉢を捨て法花を書し。佛像を描く。或時河端に於て無遮會を開て誓て曰く。我若し持經の力に依て。必ず當に安養に生すべくば。願はくは此地に於て必ず奇瑞を得んと。明日河邊に白蓮華一千餘莖生ず香氣馥郁たり。諸人群集して瞻禮し。驚き讚歎す。

◎第六十 一宿上人の事

釋の行空法師ハ何の許の人と云ことを詳にせず。五歳七道六十餘州。遍ねく行かずと云ことなし。到處二夜住せず。故に世に一宿上人と号せり。隨身の資具三衣尙全からず。況や其餘をや。只法花經一部を持して。暫も身をなたす晝六部誦じ夜も亦六部讀誦す。旅行の間若路に迷ことあれば天童此を教ゆ。若渴乏の時は。天女水を嚙びて與ふ。若し病苦ある時は天の妙藥自ら至り。粥粥乏しき時は天の甘露自然に現前せり。年九十にして鎮西に於て遷化す。臨終の時に天衣自ら身に纏ひ蓮花雙足を承く。又普賢文殊降臨して摩

頂し玉ふ。一生の間誦する所の經。凡そ三十餘萬部なりといへり。蓮花雙足を承るは口中胸間より生せると。事異ありといへども。餘人の臨終に蓮花に坐せるはなし。故に知ぬ經玉の力あることを

◎第六十一 常に法華を誦きて妙法蓮花を感得する事

釋の蓮長法師ハ持戒堅固にして常に法華を誦す。沐浴にあらざれば帶を解ず。晝夜臥すことなし。金峯山。高野。熊野。志賀。長谷。凡そ日本國中の所有の名山勝地に到て。必ず各法花を誦する事一千部あり。天性唇舌迅疾にして一月の間に千部誦す。臨終の時に手に不時の蓮花一莖を持せり。鮮白薰烈なり傍人問此花何よりしてか得たるやと。蓮長答て曰く。是則ち妙法蓮花なりと言訖て寂す。手中の蓮花も忽然として見すといへり。嗚呼我等も本淨の蓮體を具足せり。勤めて精進しなば何ぞ速に是の妙法分陀利花を證得せざらん。況や既に諸佛祕密の印璽を傳へたるをや

◎第六十二 念佛三昧を修して蓮花を感する人の事

釋の教員法師は何くの人と云ことを知らず。延曆寺に居して義學を業とす。兼て念佛三昧を修す。臨終の夜蓮花其の室に降ること雪の飛か如し。見る者は唯八人のみ。餘人は見ることあたはず。葬送耶旬の地。異香薫して七日が間だやますといへり。此人既に台教を聞



く法華を誦せること明けし。設ひ法花を誦せずとも。念佛三昧を修すれば蓮花を感せること亦宜ならずや。順次の往生決定して疑なき者なり。

◎第六十三 慧心僧都胸より蓮花を生ずる事

慧心の僧都諱は源信。和州葛木郡の人あり。睿山に登て慈慧大師を師とす。内に三部三密の妙旨を傳へ。外より三諦三觀の奧義を弘ひ。或時は馬鳴龍樹の摩頂讚歎玉ふことを夢み。或時は觀自在尊の命蓮華を授け玉ふことを蒙る。寛仁元年六月十日に。門弟子に告て曰く。我一乗の善根を以て極樂界に向向す。上品下生決定して疑なしと。便定印を結て端坐して遷化し玉へり。寂後胸の間より青蓮花三莖生せり。終に天子より此をめされければとも台徒獻らざりけり。さらば一莖を奉れとありければ。一本をまひらせけり。二本は文殊樓に納めたり。禁中へ奉りし一莖は。後に宇治の寶藏に納りけるとなん。實に此の僧都は法花の奧義を悟り。五種法師缺ることなく。秘密の妙蹟を探て三密觀行怠り玉はせずや。しかも往生要集を撰して無量の人に西方の淨業を勸む。青蓮花を感じ玉ふこと亦宜ならずや。

◎第六十四 讚岐源太夫發心往生の事

昔し讚岐の國何れの郡とかやに。源太夫と云者ありけり。佛法の名をたにしらず。殺生を

好み人を亡ぼすより外の事なければ。近きも遠きもおぢかそれたること限りなし。或時狩して歸りける路に。人の佛を供養する家の前をすぐ。聽聞の者集れるを見て何わざをすれば人々多かるぞと問ふ。郎等の云佛供養と云事し侍るなりと云。いでや興あり未だみぬ事ぞとて馬より下て。狩裝束のままながら。中を分入り庭むせに許多居たる人。是情あしとみるに。ひねつぶれて。ひらがりをり。こらの人のかたをこねて導師の法とく傍に近く居て事の心を問ふ。僧をそろしながら。説法をといめて阿彌陀の御誓たのもしき事。極樂のたのしみ此の世の苦しみ。無常のありさまをいふを。委細に説き聞す。此男云やう。いとくいみじき事にこそ。さらば我れ法師にありて。其の佛の御在ん方へ參んと思ふに道を知す。心をいたして呼奉んと思ふに應玉ひあんやと云。誠に深く心を起し玉は必せいらへ玉ふべしと答ふに。さらば我を只今法師になせと云。あれうのま、にてとむかくもいひやらす。其時郎等より來て今日は物騒しく侍り。歸り玉ふてその用意して出家し給は。宜しからんと云に。腹立て己が計にては我思ひ立たる事をば。争でか妨げんとするぞとて。眼を怒らかして太刀を引まはせば。恐れ戰て立のさぬ。大方今日の願主より始て。ありとある人色を失へり。近く居より只今頭を剃そらではわしかりなんと頻りに責むれば。遁るへき方なくて。戰や法師になしつ。衣裳袋乞てうち著て。是より西さまひさて。



聲のある限り南無阿彌陀佛と唱へて行。是を聞人涙をながして哀れむ。かくしつ、日を経てはるかにゆきく、末に山寺ありけり。そこなる僧のやしみて事の心を問。しかく、とありのまゝに云へば。貴とみ哀むこと限りあり。さて物ほしくおはすらんとて。乾飯を聊か引つ、みてとらせければ。露物くはん心なし。只佛のいらへ玉のんまを。山林海河ありとも。命の絶んを限りにて行んと思ふ心のみ深くて。其外には何事も覺すとて。尙西を指てよばひ行く。彼の寺にひとり僧あり。跡を尋ねつ、行て見は。遙の西の海きはにまし出たる山の端なる岩の上に居たり。語りて云はくこゝにて阿彌陀佛のいらへ玉へば。待奉るなりとて聲を擧て呼び奉る。誠に海の西にかすか御聲聞けり。聞玉ふよや今のはや歸り給ひね。さて七日ばかり過て又おはして。我なりたらん相貌を見玉へと云ければ。なくく歸にけり。其後云しか如く日比經て其寺の僧のまたいざなひ行て問へるに。本の處に露もかひらず。掌を合せつ、西に向ひて睡りたるが如くにて居たり。舌の端より青蓮の花あん。一莖生出たりけるを。おのく佛の如く拜みて。此の花を取て國守にとらせけるを。持上りて。宇治殿にぞ奉りける。功をつめる事はなけれども。一筋に憑の奉る心深ければ。往生する事又かくの如し。舌端に蓮花生せることは。現に阿彌陀佛の三昧耶報身を得たるあり。長明が發心集に此事を記るせり。

◎第六十五 畜生等佛を念して靈感を得る事

宋の天台山正等寺の觀公の。鶉鴒鶉鴒ハ哥鳥也を畜ふに能言て常に念佛す。或時立て穴の上にして死す。仍て此を葬ふるに。紫色の蓮花一朶生せりと。元照律師此贊を作り玉へり○又長沙郡の人。一つの鶉鴒鶉鴒俗に八兒を養ふ。僧の念佛するを見て即ち口に隨て念佛すること且暮にたぬす。因て此鳥を僧に與ふ。僧愛して畜に久しくして鳥死しぬ。僧哀れんて棺を具へて是を葬るに。俄かに鳥の口中に蓮花一朶を生ず。或人頌を作て曰く。有二靈禽一八兒。解隨僧口念阿彌。死埋平地蓮花發。我輩為人豈不知。統佛祖余思ふに此の二鳥は過去にて念佛者なりしに。少業にさへられて畜生道に墮せるなるべし。されども宿習の故に又念佛し。今餘歿既に盡て。蓮花の瑞を感じせり。決定往生疑なき者あり。須達が家の鶉鴒と事類すれとも。彼は小乗あれば生天なり。此は大乗あれば淨土に生せり。吾朝にも犬あり念佛する人の後にて念佛のまねするあり。後に淨土に生すべきをや。されば菩薩は畜生を見る時は。汝是畜生發菩提心と唱へよと梵網經に説れたり。况や鶉鴒などの類は人の口まねする鳥あれば。眞言念佛など唱へなば。口まねして功德を得。後には淨土に生ずべし○昔し阿難乞食して須達長者が家に到り。門より立て苦集滅道の四諦を唱へられしを。鶉鴒聞て苦集滅道と唱へて。門の側の樹に頤頤頤頤ハ鳥也頤頤ること七遍せり。其夜猫にとられて死す。



四諦を唱へし功德に依て。四王天より他化自在天まで次第に生じ。又第六天より四王天まで次第に生じ。上下すること七遍して樂をうけ。後に涅槃に入べしと説けり賢慈此は小乗の法あるすら尙六欲天に七遍生ずることを得。況や大乘の法及祕密真言乘をや。されば猫にも光明真言加持の土砂を飲しひれば鼠をとらせ。鐵砲の筒の中へも真言を誦し入。又は土砂を入れれば生類も中らず。又網罟も土砂を散ずれば。魚入らずといへり。此皆冥に不思議の功德あればなり。又獵師の言を聞に獵に出る時に道にて沙門に逢ば其日は獵を得ずといへり。此も出家は慈濟を本とするが故なり。又獵師の一念の慈悲心にても發り。生を殺すを哀れむ心。微塵許も發れば生類を得ずと。此も一念の慈悲は本有の慈氏菩薩の功德なり。一念の慈發るは即ち自心所具の彌勒菩薩出玉ふあり。生類を得ざること宜からずや。又慈悲の即ち佛心なれば。佛現じ玉ふなり○又大唐の貞觀年中に河東の裴氏鸚鵡を畜り。六齋日には。日中を過て食せず。人の口まねして念佛す。或時念佛十念を唱へて死す。裴氏わはれんで此を火葬にするに。舍利十餘粒を得たりと。されば是も宿習のるに。又裴氏か信深き故なり

通俗礦石集第一終

通俗礦石集第三

◎第六十六 河州八尾の地藏の縁起並に種々靈驗の事

河内國若江郡。八尾莊。西鄉村。常光寺の地藏故菩薩は。弘仁の聖朝に參議小野篁。自手地藏尊六體を刻みて。扶桑處々の名籃に安置せし中の一軀なり。立像六尺の尊谷にして。六道の群迷を濟度し玉ふことを表す。八百餘箱の勢朽すして。忍辱の膚濃なり。三十二相の姿。歴然として。哀悲の顔ばせ糝を含む。満月の面を仰げば則ち玄軌の雲忍り。青蓮の眸を拜すれば又罪障の露自ら消。掌上一顆の摩尼光を放ては。普はく三千世界の有情を度し。手中六環の金錫聲を振ふては。廣く二十五有の受苦を救ふ。爾のみならず名籃の狀たるや闍提救世の春の風には。池面皺を疊んで星霜の茲も古たることを顯はし。尸羅清涼の秋の月には。樹頭色を凝して感應の常に明かあることを示す。爰に應承の末の比。新治の西郷高田堂に油を鬻く處士又五郎太夫と云者あり。鬻而立の比より此の地藏尊を信して。常に寺に詣で、觀るに。物換り星移て堂塔大破に及べり。鳳鸞傾ひて扉をなし。朝霧僅かに香煙の色を侵す。鴛瓦塵て砌りにあり。夕月獨り孤燈の光を挑げたり。見に涙を催はして心中に願を發し。勤めて寶号を唱へて。再び伽藍を修造せんことを祈り。日に香花を備へ。夜夜に燈明を上ることを曾て怠ることなし。若し暇なくて他人



をして燈明を供養せしむる時は屢消ゆ。太夫自ら挑る時は竟夜あきらかあり。是のごとくして三十年に及べり。實に一へに地藏尊の内證に叶へるにやと。諸人俱に羨み貴みあり。時に兵革未だ止されば忽劇の中なるに。淨信怠ることなく。靈應を蒙ること。あけて計ふべからず。若人太夫に頼みて。家中の吉凶病患。身上の中天災難を問に。自らは一文不通の身なれども。地藏尊の加被に任せて。數珠を回らして卜ならひ言に。掌を指が如くに符合まけり。又災を攘ことを頼むに。所求満足すること響の應するに似たり。經に或現居士身或現商人身と説り。太夫は正に地藏尊の化身あるべしと。諸人貴みて隣國までも。其の名隠れあかりけり。是に依て公家より太夫の官を賜へり。武家乗馬の儀を免せり。康暦元年の春。郷内に瘡病流行するに。地藏尊を念じ及び太夫に祈願せしむれば。即時に平愈せすと云ことなし。又至徳二年孟夏の比。國王頭風を病て百療皆効しあらず。依て太夫に命して祈らしむるに。七日七夜を経て病たちまちに除愈し。靈夢かたぐ多かりければ。國主大に悦びて膏腹の田を割て。永く地藏尊に上り。同じく七月廿二日に常光寺へ參詣あり。郷内耳目を驚かし。遠近共に貴むこと諸國に隠れなかりけり。凡そ梵隱癡癖の輩らも地藏に歸すれば。忽に起居を快くし。聾盲瘡癩の類も太夫に頼めば。頓に清濁を語る。日日の奇特の耳目に舊たりといへども。人々の靈願は猶心肝に新たあり。遂

使して遐邇輻湊して貴賤男女老少俗僧をいひす。雲の如くに集まり星の如くに列て。地藏の寶号を唱ゆ。太夫か靈願を仰ぐに。諸願成就すること水の器に随ふが如し。靈感數百ありといへども具に記するに及ばず。其の尤ある者を撰んで大綱を録するに。一百餘條あり。別卷に記するか如し。他處の佛神は化機を讓て真如の扉をを閉かど疑ひ。自餘の菩薩の利物を與へて無爲の都に歸るかど訝かる。是に依て檀施山の如くに積て終に修造の願を果し。至徳三年二月二十八日に。十間四面の堂を建立して故佛を安置し上る。未だ一年を越ざるに功ごとく成ぬ。同十月十日は棟上げ。同十一月八日に安座なり伶人樂を奏し僧衆讚誦して迎佛の儀を刷ふ莊嚴の美麗なること往古にも優れり。深更雲收て満月の威容に従ふかと怪しみ。明鏡燈を含んで衆星も本尊を拱くかと誤まる。池水幅蓋の色を映して四十九院の輝はひ眼の前に現じ。松風琴瑟の曲に和して九品往生の樂身の底に明らかなり。諸人參詣して市を成す。青鳥飛て雨の如く。精米降て雹に似たり。俄かに堂上に堆きこと京をなせり。寔に上古にも未だ聞ざる消息なり。その、ち鎮守殿阿彌陀堂及び寶塔。小地藏堂等。太夫盛繼一生の間に建立すること居多なり。後より出家して明有と号す。明徳元年八月十四日に春秋六十四歳にして寂す。縁起の趣き大體かくのことし。一百餘條の靈驗記は天正己來の亂に紛失しぬ。嗚呼惜いかな。定めて殊勝の感應多かりけ



ん。歎息しても尙餘りあり。又五郎太夫の事は。能の興言にも八尾の興言とて昔より傳へて。日本六十餘州の人普ねく知れり。但し八尾を矢尾と書り。河州の八尾の事なるを人知ざりけり。興言も既に作れるは三百歳の先。太夫の靈驗多かりしを傳へたるあるべし。

◎第六十七 同地藏尊の佛舍利の事

常光寺に舍利堂あり。昔は寶塔に佛舍利を納めけるとかや。抑此の舍利は寛治二年より白河の法皇高野山に御幸の時。地藏尊に奉り玉ふ御舍利なり。法皇常光寺の地藏尊の靈驗あらたなることを聞し召て。鳳輦を廻らして此の寺に入り尊像を拜して後に。伽藍を出んとし下ふに俄に雷電霹靂して大なる氷り降て出玉ふことあたはず。供奉の月卿雲客も。こはいかにと怪しみ恐れけり。其の時に住持の僧奏すらく。地藏尊定めて法皇に所望の事あるべし。何にても本尊に供養じ玉は、雷雨霹靂ことを得べしと。其の時に法皇此の舍利一粒を以て地藏尊の御手に安じ玉ふに。やがて雨晴て天色清明なり。其の時に法皇又舍利を取て曰く。今高野山に請せんことを企つ。道中の守護の爲に先今度は預りて持し奉るべし。還るさに又地藏尊へ奉るべしと。即ち山門を出玉ふに雷電霹靂初より倍せり。法皇叙感あつて。即ち又地藏尊の御手に安じ玉ふに天色晴こと初の如し。其より晴天にて供奉の人々も逾淨信を生じ。安穩に高野山に御幸をなし奉れり。しかつしより此舍利當寺に

傳はりて。靈驗多かりき。慶長の末の亂に長曾我部ハ久寶寺に陳を取り藤堂和泉殿は河東に旅して戦ひし時に。常光寺は戰場とあれり。其時の住持の僧本尊を和州の達磨寺へ移し奉れり。和泉殿幕下の兵士等。寺中に亂れ入りて物取りし中に。或者此に佛舍利こそましませ。此を取て歸り信すべしとて。劫み取て勢州へ歸りけり。然るに彼の人の一家皆盲目となり。或は狂亂し口ばしりて。早く八尾の地藏へ歸るべしといへり。其外災殃多かりければ。八尾の佛舍利の祟りあるべしと驚き覺りて。忽ち八尾へ持参しけり。常光寺には何方へ失させ玉ふもしらでありしに。正保年中に見坊の僧に。夢中に地藏尊告玉はく。佛舍利歸らせ玉ふ西方へ迎に参れとありければ。悦びて即ち大阪船つさまで行き。如何行べき打案して居けるに。勢州の者舍利を持参して。八尾へは何方へ行き候ぞと問に逢て互相より由來を語りて。俱に歡喜の涙を流し。即ち受取り奉りて。今に常光寺にあり。予元祿四年十一月十日に常光寺へ詣して。本尊及び佛舍利を拜し奉る。尤も殊勝の御舍利なり

◎第六十八 同地藏尊の寶珠蓮池より出る事

慶長の亂に本尊を和州達磨寺へ移し奉る時に。左の御手の寶珠紛失しぬ。後に本尊歸らせ玉ひて。寶珠をかか故に新に作りて安置するに著す。幾度も安するに終に著すして落けり。諸人不思議に思ひ其ま、にてありしに。或時寺前の蓮池の蓮花盛りに開けたるに。寶珠



。一顆花臺に現じけり。或人見て此を取り本尊の御手に安するに。昔の寶珠よて能く掌  
 著き今にあり。又右の錫杖の御手の指損じ玉ひけるを。住持佛工を頼みて續ぐといへど  
 も終に著す。佛師いよく力を入れて續んどしければ。即ち目まひ絶入して續ことあははず  
 。寛永の初め久寶寺の住人。弓削屋の又右衛門と云者。平生此の尊を信して七日潔齋して  
 曰く。他人の續申さんはさもありぬべし。我は殊よ信じ奉れば續得べしとて。漆持て佛壇  
 に上り。此の程にて能かるらんと本尊を見上げ奉るに目眩て壇より落けり。若し古の  
 の作りし指。何方よりありとも出玉ひなばよく著べけれども。凡人の作り足せる指なれば  
 著ざるも理はりあり。寶珠と同じ例なり。靈像の不思議希有なる事どもなり

◎第六十九 同寺内に盜賊の難あき事

或夜光棍堂内に入て。戸帳を盗み出んとしけるに。出る道を忘れて夜の明るまで堂内を巡  
 りて居ける。看坊見著て捕へければ。光棍しかくの由を語りけり。又或時に老棍入りて  
 看坊の僧を捕へ縛りて。既に害せんとしける處に。地藏菩薩一人の僧となり來らせ玉ひて  
 。繩を解命を助け玉へは。盜賊も恐れて逃歸りけり。寔に本願經に説玉へる二十八種の利  
 益。一も違へざりけり

◎第七十 同西郷に横死の難あき事

古老傳へて曰く往古より。寺中及び西郷村へ。終に雷落す横難あることなし。又門前の  
 婦女ども。昔より難産あることなし。今に至るまで安産を得といへり。經中に主命鬼王發  
 願して擁護すべしとあれば。實にしかるへし。毎年七月二十四日は法會おかれは。河内國中  
 の貴賤男女集まり。及び隣國の人まで參詣して通夜し。寶号を唱る者。幾百千万人と云こ  
 とを知らず。中に付て男の少く女は多し。河内の諺に高野翁。矢田姥。と云て。高野山  
 は女人を禁ずれば。老翁のみ參詣結縁すべき山。矢田及び八尾は女人の參詣結縁すべき  
 寺なりといへり。豈當老嫗のみならんや。少艾の婦女は難産の恐れあれば。いよく參詣  
 して歸依し奉るべし。本願經の中に地藏尊を歸依し瞻禮し奉れば。諸願圓滿して安産を得  
 と説り。又地藏菩薩昔し因地に光目女及び聖女として母の苦患を救ひ玉へり。されば女人  
 に因縁深きこと又宜ならずや。又女人は五障三從の身なれば出離の時遅し。さればいよ  
 く大悲の菩薩へ別て救ひ玉ふなるへし。是又攝取の門なり。高野山は女人を禁ずるは。  
 抑止の方便なり。

◎第七十一 大坂佐渡島屋地藏尊の加被に依て壽命を延る事

大坂新町の花衢に佐渡島屋と云あり。慶長年中に十八歳にして頓死しぬ。親族會聚て悲  
 歎すれどもその甲斐なかりけるか。一日一夜を経て蘇生して語て曰く。我冥土に赴きて忽



ちに一の堂に至るに一人の御僧來り玉ひて。汝は未だ是へ來る者にあらず。今汝に八十三歳の壽命を與ふべし。閻摩に歸かなばいよく佛を念すべしと教へ玉ふ。彼の者喜びて問て曰く。御僧は何方に渡らせ玉ふやと。僧の曰く汝未だしらすや。我は即ち汝か國八尾の地藏なり。汝年來我を信するが故に今度汝が壽命を延與ふとありて。即ち失玉ひぬ。さて我は蘇へれりありがたしとて。歡喜の袂を露しければ。諸人一同に驚歎して南無地藏と唱わけり。それより諸方に聞傳へて八尾へ多く參詣しけり。佐渡島屋も毎年怠らず。七月廿四日に參詣し。寶号を唱へて恩を謝し上る。されども凡夫のあさまさは。八十三までと告ありし事をも打忘れて。津の國の存命ふべくもあらぬ難波人。短き葦の世を。百歳までも生んと思ひてありしに。八十二歳の七月に例の如く八尾へ詣りければ。毎年の事といひ。殊に頭べまは南山の雪を戴き。額に北海の波をよこたへ。腰背は梓の弓を張。箭の如くなる光陰既に迫りぬれば。茶店の者も能見知て翁様の定の命も今年にて候よ。後生を願ひ玉へと言ければ。八十にあまるうつせみのから。猶をしくやありけん。喜こばぬ氣色にて歸りけり。さて定めぬ如く寛文の初めに八十三にして死しけり。彼の茶店の主は羊の歩み近きことを教へ勵ませしむ。尙地藏の方便にや。ありがたかりける事どもなり

◎第七十二 同地藏尊火難を告示し玉ふ事

常光寺の僕或時火を疎慢よして寐たるに。あやまちて然わがり既に大事に及ぶ所るに。地藏尊一人の僧と成て來り玉ひ。彼の男を踏み起し。やれ火事よ何とてゆるくとは眠るぞと仰ありければ僕驚き起て即ち火を消して。火事になさざりけり。今に至るまで常光寺に燈柱有りて。諸人普ねく知れり。地藏尊火難を救ひ玉ふこと靈驗記等に。多くのせたりといへども。近代にかくのごとき明かなる示現は希有なる事なり

◎第七十三 大坂の童女母の壽命を祈りて感應を得る事

延寶年中に大坂何の町とかやに一人あり。久しく病て百療効なかりけり。其の子に童女あり生年十四歳なり。天性至孝にして正直柔和あり。本より八尾の地藏尊を信じけるま。母の病に侍する時にも偏へに地藏尊に祈り。願く此度母の病を愈し壽命を延させ玉は。我必ず裸よて八尾へ參詣し。御恩を謝し奉るべし。若又定業必死の病あらば。願くは菩薩の大悲神力。我命をとりて母の壽命を延かへさせ玉へと。丹誠を拙で誓ひける。誠に菩薩童女が祈念を納受やし玉ひけん。程なく母の病ひ平愈しけり。童女喜びて即ち正月十八日。餘寒猶甚しく指を墮し膚を裂。冽風に赤裸にて八尾へ參りけり。諸人怪みて意趣を尋ぬるに。上件の子細なれば聞人感涙を落さずと云ことなし。誠に地藏尊の内證に能く叶ふ故なるべし。況や裸にして苦行を忍ぶをや。今の人病苦甚はだしき時。或は横難



に逢し時ハ。心中に佛神に祈誓して。此病を痊し玉は、何を供養じ奉るべし。此難を免れしめ玉は、幾度三十三所を巡禮すべし。四國を巡禮すべし。伊勢熊野へ参るべしなど、誓ひながら。病ひ痊愈除きて後は。再び思ひ出さず。或は儼憶ひ出せども來年詣るべし。此の事を畢て詣るべし。我が娘を縁に付て後。我子よ家督を譲りて後。入道して後など、言て終願を果さす。其内には死して悔めども甲斐なきハ。今時の人の風俗なるに。此の童女の時刻を移さず。母の病愈ると即ち參詣せし。心の中思ひやられて殊勝なり。但し躰の行既の行など、云は。佛法になき事をれども。吾朝に昔よりいひならはせる事をれば。善事かと思て思なる人多く誓ふ事なり。然れども釋迦如來の因位にも法の爲には身を火坑になげ或は身に千燈を然し。千の釘を打玉ひし事あり。今の世にしては益なき事に思へども。苦行をも能く忍びて法の爲にし玉ふハ。唯心の勇猛主誠あることを表せり。今の童女も本より邪正を分つ程の智慧なければ。裸の行は善事なりとのみ思て。寒風に能く其の苦行を忍びしは。至孝の作す所。至誠勇猛の善心なり。されば其心操を取て。其の行を學ぶべからず。

◎第七十四 同寺看坊碩首座横死を免る、事

常光寺看坊の一代碩首座と云人あり。本は西國の武士ありしが。因縁ありて出家し。久

しく常光寺に住せり。随分の信者にて無欲慈忍の沙門なりけり。平生地藏尊を信に奉りて。我身世出世の事。皆あ地藏尊に任せ奉る由常にも口占まれける。後に和州王子村達磨寺の看坊と成て往れけり。或時郡山の城主。本多内記殿敗獵に出て達磨寺に來り。碩首座と相語り。蓋を傾けて舊さが如し。碩首座。富貴高官の人にも諂らはす。平座して古今の談話せられければ。逾本多氏の心にも叶ひ。在城の時は一月に一兩三度は。定めて達磨寺へ來りて。竟日談話せられけること大凡常なりけり。寛文の初達磨寺の佃子久三郎。博奕して負寺領の納金五兩を掠めけるが。事の露れんことを恐れて圖く。碩首座を殺し我罪を碩首座に蒙べしと。或日碩首座晨朝に起て盥嗽せんとせられけるを。久三後より來りて斧を以て腰を打ければ。八十の老僧なれば即時に倒れて絶えられたり。其の時に久三思はく身中に金瘡あらば。後の兪議ひつかし。只繩よてしめころさんにはしかじと。即ち麻繩を尋ね出し。頸に織ひしめんとせまよ。何ぢともなく七八歳可なる小僧の高貴さか來りて。手を取り足をとり繩を解して。縊りころすことを得ず。叱りて追に寺の香積へ行と見ぬて消失ぬ。又縊らんとすれば忽に先の小僧來りて障となり半時ばかりも隙を入れける處に。門外に衆人の聲して内記殿入來にて候と白しければ。久三狼狽して寺の後園の藪の籬を潜り堀を踰て逃けり。武士ども寺中へ入て碩首座を尋ぬるに。繩を以て縊らんとせ



し消息。斧にて腰を打し斧痕血の出たるあり。このいかに盜賊の入たるにやと。久三を尋ぬるに。見ぬす。後園の藪籬を潜りて逃し跡ありければ。内記殿入り來りて先づ氣付の神薬を碩首座にあたね服せしめ。武士及び中間百姓等に仰せて久三郎を追しむるに。國分にて捕へ歸りけり。さて碩首座をば内記殿より。外料及び醫師に命じて療治させ玉へば。程なく瘡み癒けり。久三をば禁獄して鞫問ければ。上件の趣き有のまゝ、又白狀しけり。此者ハ後に南都にて刑せられ磔となれり。碩首座ハ河内久寶寺の安井氏と舊知なりければ。來りて此事の始末を具に語り。此も偏に地藏尊の加被力ありと歡喜の袖を露はされけり。寔に時こそあれ諸侯の來れる時に當り。又地藏尊小僧の身を現じ來らせ玉ひて難を救ひ玉ふ事。希有奇特の利益末世といへどもありがたき靈應なり。安井氏ハ予が知己なれば。面會此の事を聞るまゝ、具さに書付侍るなり。又頃載地藏尊の靈驗。多く利生記利益集等に記して世に行ふはるといへども。何なる故にや八尾の地藏尊は。木の下。矢田。壬生の尊にも劣らざる靈像ながら。世に人の知らざることを恨み。結縁の普ねからざることを歎きて。辛未の十一月十日に八尾へ詣て。具さに縁起を拜見し。寺僧の口説及び安井氏の説を聞て。粗記すること件のごとし。又五郎太夫一百餘條の靈驗。今の世に傳はらざること千恨万憾なり。若し後の人盡編斷簡の中よも。此を得ば請梓行して世に傳へよ。

◎第七十五 大阪安道寺町油灌の地藏の事

浪華の邑安道寺町。一町目筋の四辻に地藏尊の石像あり。何れの代よりありといふことをしらす。人馬の塵にまみれ。狗糞の屎尿に汚れ玉へり。或は騮子など馬の沓を掛たり。若人病あれは此の石像を祈りて油を灌奉るべし。病を愈し玉へといへば。即時に平復すること神の如し。衆人ひたすらに油を灌けるまゝ。色黒く汚れ玉ひけり。俗此を油灌の地藏と号し奉る。近比堂を建て安置し奉るべしとて。近處の人々議しけれども。四衢道中にて普ねく利益を施し玉ふ本誓たるにや。種々に障ありて成就せずなりぬ。瓦屋の淨信叟は名實相稱ひたる。淨信決定の人なり。此地藏の靈像ながら。路邊に座にまみれ玉ふことを歎き。其の町の宿老に語りて迎へとり奉り。我宅の前裁に瓦葺の小堂を造して安置し奉れり。されば尊像は淨所に移り玉へども。諸人自由と結縁することあたはざれば。地藏の御意にも叶はざりけん種々の災殃あり。又淨信の銀鹿が夢に。我を早く本の所へ送り歸せと御告あり。此に驚きて忽ち初の所へ送り奉るに。初め迎へし時は十餘人して擔ひしに送り奉る時は僅に二三人にて輕々と昇擡けり。諸人一同に驚歎せずといふことなし。又大坂の風俗七月二十四日に地藏祭と号して。童男童女集り飲食菓子糍粩などを以て。彼の油灌の地藏の前にて供養し上る。又餘の町には各四辻に出て。夥しく供具を儲供養し上る。或



餘り大勢群が聚りて喧嘩ありしかば。奉行より制せられて。今は事隠便になれり。されども毎年七月廿四日には小兒ども各各に店の上或は座敷にて。小像の観音よめる。或は餘尊にても。土作の佛像にまれ。人形にまれ。皆これを地藏尊と号して。供養したてまつる。貧兒は地藏の勸進とて門々を巡りて。錢米等を乞ひ祭り奉る。此も地藏尊利生の百千の中の一なり。法花には乃至童子の戲。聚沙爲佛塔。如是諸人等皆已成佛道と説けり。今は現る地藏の尊像と對して供養し奉る。凡そ戯れに似たりといへども。中には又正眞の供養ありぬべし。未來の得脱たのめまきことなり。

◎第七十六 大坂天王寺西門通地藏尊利益の事

天王寺西門すぢに四尺餘の石地藏あり。誰人の造立安置せりと云ことをえらす。一人の信士あり。一間半四方の瓦葺の小堂を造して安し奉れり。彼の信士四十餘の時俄に死す一日を経て又蘇て曰く。二人の大なる男來て我を引立て、行。恐ろしと云はかりなし。我心中に誰人か我を助けて此の苦を救はんとおもふに。忽に彼の石地藏走り來り玉ひて我手を取て我を背に負ひ。二人の男を追ひ拂ひ歸へらせ玉ふと等しく甦生せり。此偏に地藏尊の御利生なりと喜けり。さて地藏尊の取玉へる手。十日程の間異香蒸して止ざりけり。其よりますます寶号を唱ねて信人となれりとぞ。これ無下に近き貞享年中の事なり。

◎第七十八 和泉寶滿寺地藏尊の事

泉州 泉郡。吾孫子郷。豐中村寶滿寺の地藏尊は御長一尺二寸の尊像あり。何の代誰人の作と云ことをしらす。世に子安の地藏と号し奉る。往昔の大伽藍ありて靈驗殊に揭焉あり。慶長の末の亂に伴野段右衛門と云者紀州勢を禦んが爲に向ひけるが此の邊の民屋伽藍一字も残さず焼却しぬ。呼鳴寶滿寺も佛殿僧坊剎那に灰塵となれり。万人悲泣して我が舍宅の焼亡せることを願みず。偏へに靈像の失せ玉ひぬらんことを歎きけり。寺前に放生池あり翌日風もなさに波立こと常ならず。或人怪み入りて見るに尊像池中にましくけり。諸人歡喜して小堂を造して安置し奉れり。しかつしより今又靈驗あらたなり。夜々光明を放ち玉ふことあり。有信の人へ此を拜見せり。現に拜したる者數十人なるべし。或は安産を祈り。或は除病瘰癧を祈るに求願を滿すること如意珠のごとし。寶滿寺の稱寔に空しからざるをや。彼の放生池今にあり。俗此を地藏の淵と号す。又段右衛門は次の日に討れたり。紀州の武士に龜田大隅と云者あり。太閤の時高麗へも入りて比類なきはたらさせる大剛の者なり。大隅伴野に渡り遂て組既にあやかりしを。伽藍を焼し討にやありけん。上田宗古と云者つゞき來て伴野が首を討取りけり。後に大隅宗古二人はたらしきの勝負を論じけるとかや。國治て後横田源兵衛と云者。伽藍の地を開きて田つくらんと思ひ。鋤を下



しければ。忽に目くらみ一時ばかりして即ち死しぬ。爵利生攝取抑止の二門相ひはなれず。去て利益を施し玉ふこと實に貴ひかな。抑子安の地藏と号し奉ること。安産を祈れば難なきがゆゆなり。且つ此尊は本一子の爲に生死入り今此の吾孫子の郷にあとをたる。安産の利益亦宜ならずや。弘誓甚深の海は奥津の海も磯ぞかし。闍提救世の方便は不盡よりも猶高石の濱の真砂も喩とするにたらず。況や經中に堅牢善女及び主命鬼王の誓約あるをや。

◎第七十九 洛陽の繪師中西氏か父地藏尊の加被を蒙りて往生の事

京。新屋町通。松原上る町に。中西善之丞と云繪師あり。近代随分の上手あり。且信ありて當時の名徳に見ゆけり。其の父を中西善右衛門と云。此者心善直信にして柔和温順なり。淨土宗にて若年より名ある僧には自他宗を簡はず必ず歸依しけり。已に半百の齡ひも過ければ。朝露電光の世を悟り。元祿二年に剃髮して圓室休西と号す。それより三十三所を巡禮し。歸りて後福王寺の慈門和尚より念佛の日課を受けて日夜怠ることなし。同四年五月の末より少し心地倒ならずありけるが。次第に衰へてあだし野の露と消るんこと。今日にや明日にやと待ばかりあり。休西いよく今般は命を延べからざることを知りて八月朔に孫を連て生土明神へ暇乞の爲にとて詣り。偏へに臨終正念往生極樂の事を祈りけり。同

しく六日より所勞重くなりて床に著き臥しけり。子善之丞種々に藥餌を進むといへども。休西は唯十二棘園の劇苦を厭ひて少も此世に存命んと云心なく。偏へに九品蓮臺の妙樂を欣つて早く彼の國に往生せんと喜びけり。九月朔日にありぬれば九の數ハ九品往生の願便ありとて。一日より臨終の用意して同しく三日に光明眞言加持の土砂を頂戴しけり。此の土砂は江府湯島の靈雲寺老和尚の數度加持し玉へるありとて。值遇の想をなせり。同しく五日の朝。胄子善之丞に語り。吾か臨終は彌近し。四五日の内なるべし。いよく左襟に心得よ。恩愛深しといへども一度は必ず相ひ離るべし。悲泣することなかれ。唯俱に念佛して往生の業を助けよ。世間の雜事を以て正念を亂ることなかれと。胄子は此を聞て絶入る心地して悲みけれど。孝養の志し深くて。面には父の命に順すといへども。背かよ佛神に祈りて今般の壽を延たまへと願ひ。名醫を迎へて種々に藥餌を進めけり。同日の午より次第に氣力衰へけり。六日に或比丘僧料らざるに來り玉へは。休西喜びて即ち五戒を受く。尙三拜等をも作せり。若は出家若は在家の病を問に來る人あれば。皆合掌して十念を請受けり。九月朔日の夜夢に。王宮の如き所に至り中に入りしかば。諸佛菩薩羅列し玉へり。此ぞ淨土ならんと私かに喜びけり。同七日の夜丑の時に繪像にもあらず木像にもあらず。霧の如く煙の如くにして地藏菩薩。東南方より來り休西に立向ひ玉へり。休西歡喜



の涙禁めへず。一心に寶号を唱ぬけり。又同夜寅の刻に五尺有餘の地藏尊現じ玉ふを拜みて往生疑ひなしと悦び。いよく勇みて念佛せしま。八日には却て氣も爽かになりけり。兼てより。一間を清淨に掃除ま。阿彌陀の三尊を挂奉れり。不動尊。地藏尊。紅頬黎色の彌陀。其外繪師あれば所有の繪像を懸て。二十五の菩薩ある臨終の屏風を立て。香を燒き花を供し。燈明を挑げて念佛怠らざりけり。八日の申の刻に胃子一人傍にありしに休西語て曰く。臨終前の念佛は三石六斗目すると兼て聞けり。我が今の念佛は一遍唱るも甚はだ太儀なり。我が死ぬ今夜の内をいでじと。然る處へ休西が舊知ありし僧。二十年の相見せざるが。洛西の槇尾山寺より來られしま。休西悦びて即ち此の僧を臨終の善知識と頼みて。倍怠らず念佛しけり。八日の夜亥の刻に正しく阿彌陀如來諸菩薩とともに來迎し玉ひ。光明赫奕として十方を照し玉ふを拜す。休西高聲に念佛して善之丞に告て曰く。今如來來迎し玉ひて光明赫奕たり。蠟燭の火を消せ汝等皆拜めとて。いよく高聲に念佛せしが。聲次第に靜になりて頭北面西にして眠るが如くに往生しけり。さて餘人の業障の雲厚く蔽ふが故に。來迎を拜見することあたはざりけり。臨終の後法に任せて廿四時置て。彼の僧を頼みて讀經誦咒怠らず回向しけり。九日に宇治の比丘僧來り玉ひしま。善之丞亡父に代りて歸戒を受け。大衣を借りて死骸の上に覆へり。六日の夜も臨終の爲に同

行の信士を誘ひて百万遍の念佛を唱へしか。九日の夜も同しく百万遍を唱ぬて追福しけり。近代希有なる臨終なり。是も偏へに地藏尊の加被力なり。中西氏平生地藏尊を信して印版どをし。有信の人には施しけり。此等の功積りてこそ。地藏尊の無邊身を拜し奉り。如來の來迎にも預りけり中西氏父子は予が知己あれば面會け此の事を聞て書付侍るなり

◎第八十 臨終用心の事

問中西氏臨終に種々の繪像を懸ることは是なりとやせん將爲非あるか。且つ臨終は一期の大要なり。如何が用心すべきや。答臨終に佛菩薩の形像を懸ること其理然なり。本穢土を厭ひ淨土に生じて諸佛菩薩と回會に處せんと欲す。故に平生恙なき時にも常恒に佛前に仕して禮拜懺悔すべきあり。況や臨終の時をや。されば諸尊を掛奉るべし。若し所狭くば我が平生の本尊のみを安すべし。又南山の行事抄に依らば天竺の祇洹精舎にも西北の隅。日光の沒處に無常院を造して。病人の必死の人を此中に安置す。堂を無常堂と号して。中に金色の阿彌陀佛の立像を安じ。面を西に向ふ。其像右の手は舉左の手にハ五色の幡を持ち玉ふ。幡脚垂て地に曳病者を安して佛の後に住せしめ。左の手に幡の脚を執り。佛に従て淨土に往くの意を作しむ。看病人諸の香をたき名花を散じ。燈明を供養して。諸の不淨臭氣を除くとしへり。されば祇洹精舎既に阿彌陀佛を安せり。然らば臨終には阿彌陀



佛を安すべし。若し都率往生を願ふ人ならば。彌勒菩薩の像。地藏菩薩。不動明王。及び弘法大師を安すべし。淨土を願ふ人ならば。阿彌陀佛の三尊二十五の菩薩。及び不動明王。地藏菩薩等を安すべし。不動地藏は内證阿彌陀佛に同なるのみにあらず。不動大日如來の智慧の至極忿怒の明王にして。四魔を降伏し玉ふ抑止門の尊主なり。臨終には死魔とて無量の魔來て。惡道へ引落さんとするが故に降魔の爲に安するなり。又千犯不捨離の誓ひ持戒破戒頼みあり。生々而加護の力ら有罪無罪の隔てなし。慧心僧都の妹安養の尼の靈應思ひ合すべし又地藏菩薩は大日如來慈悲の至極にして柔軟の相を現じ玉ふ。攝取門の尊主あり。況や復佛初利天宮に於て。娑婆世界の一切衆生を地藏尊に付屬して。彌勒の出世に至るまで一日一夜も三惡道に墮せしむることなかれと救し玉へり。其時に地藏尊。不以爲慮と云て。付屬を受玉ひしよりこのかた。我等衆生ハ皆地藏尊の所化として。身を地藏尊に任せ奉るれば。一日片時も忘るべからず。況や臨終の時に此尊を安せざらんや。又本願經の説に依るに臨終の人を攝取し玉ふ大悲本誓。此の菩薩にまぐりあし。必ず安置し寶号及び眞言を誦して往生淨土を頼み奉るべし。さて病人の屎尿吐唾あらば。速に除去して名香を燒さ。不淨の氣あらしむることなかれ。不淨なれば惡鬼使りを得。清淨なれば諸天影向するが故あり。次に臨終の用心を具さに明す二あり○初めに病人の用心を

いはゞ。經中の所説の如く。今此の娑婆世界は三毒十惡の煩惱の火熾りに然て。生老病死の苦しき。怨憎會苦。愛別離苦。求不得苦。日夜に身心をくるしむれば一も樂ふことなし。されば法花には三界を火宅に喩へ玉へり。故に死して此の世を去ることを少も悲しまされ。只死を喜ぶべし。我早く三界の火宅をいで、安養淨土に往生し。無生忍を證して身を百億に分ち。普ねく二十五有の中に入れて自在に受苦の衆生を濟度すべしと喜び願求すべし。財寶衣物等の人は譲り與ふべき物は。兼て堅固の時に書置して。臨終に心の亂れぬ覺悟すべし。世間に頓死多し。出る息入る息待ぬ世の中なれば。平生臨終の用心あるべし。或武士七月に頓死せられけり。繼子なければ如何と人怪みけるをば。知己の人言けるは。彼人は平生能心得たる人なり。毎年正月四日に書置して其年一年養ひ使ふ奴婢までに遺物をせらるよま。兼て開り。定めて亂る、ことあらじと。果して書置出で、家能く治まりけり。沙門は此に類すまじけれど。韓非子にも刻削之道。鼻莫如大目莫如小といへり。此意は木像を作るには鼻は大に作り。目は小に作れと云ことあり。如何とあれば鼻の大なるは何時削りて小にするもやすし。小なるを大にせんとする時は。木を加へざればならざるが故なり。目の小さは何時大にせんも自由なり。若し初より大に鑿たれば。小ますることありがたきが故あり。されば一切の人兼て臨終の覺悟して書置せば。何時死すとも其跡亂る



ことなかるべし。若し長命なれば何時書改めんも自由あり。鼻の削りやすく目の廣げやすきが如し。若し平生油斷して臨終に遺言せんと思ふ時は。或は病苦に逼られ。或は頓死すれば事皆を空しくあれり。小なる鼻は尙大にもなりぬべし。大なる目は尙小にも成しつべし。此の人は悔とも甲斐あらじ。寔に此の言は一切に通せり。今臨終の一に付ていはゞ。平生死は人の免かれぬ道なり善惡の因果空しからざること空谷の響の如しと知て。持戒清淨にして經を誦し佛を禮し眞言を持念し。施戒忍精進禪定智慧を修して。後生善處の業を積。利益衆生の事を作は。鼻を大にし目を小にするが如し。若し平生放逸して後生善處の行は老後に修すべしと思ひ。或は死後に追福を修せよとて。自ら行せざる。目を大にし鼻を小に削れるが如し。後に悔とも如何せんや。寧ろ子孫及び我が弟子に追福を頼まんよりは。自ら健かある時に善を修すべし。故に灌頂經に逆修の事を説り。莫道老來初學。道古墳多是少年人と古人も誠めたれば。老後に善を修せんと思は。大愚癡の至りあり。一日再び晨なりがたく。一期再び壯年なりがたし。何ぞ修善を老後の事と思らんや。兼て多く福を植。兼て書置して。臨終に心怯弱あらず。遺言遺物等の事に心を勞せず。此の世を去こと牢獄を出るやうに思て悦ぶべし。但し万事を放下して無相無念に住するも亦善るべし。若し在家あらば。吾妻子兄弟等の心の止るべき人を近けず。淨信の僧及び同

行の人を頼みて。常に側に住て時々我が心を勵まされしめ。必ず世間の雜事を我が耳に聞せ玉ふことなかれ。淨土の妙樂を説き聞せよと頼むべし。是病人の用心なり。○次に看病人の用心と看。病人の心に違はぬ様に看病して。定業必死の人と見は。よりく勵まして今般は必ず死あるべし。設ひ死せずとも用心してあしきことはあらじ。此の世に心を止めず往生淨土を願ひ玉へと。轉語を以て曉諭すべし。あらく言て病人をして臆患を生せしむることなかれ。又淨土を願ふ人あらは。觀經の三輩九品の往生の文。及び淨土の莊嚴受樂の事を説聞すべし。都舉上生を願ふ人ならは。上生經等に依て内院の妙樂等を説聞すべし。又其の人の一代の修善を擧て。歡喜勇進の心を生せしめよ。怯弱の心を生せしむることなかれ。若し頭陀の行人あらば。頭陀の佛の讚歎し玉ふ所ろ。佛の大弟子迦葉好て行玉ふに。佛讚歎して半座を分て與へ坐せしめ玉へり。君其の行を作す。必ず善處に生ずべしと讚歎すべし。若し誦經の人ならば君常に經を誦す功德無量なり。鸚鵡は四諦を聞て天に生し。大品には經耳品あり。涅槃經には常住の二字を聞くに惡道に墮せずと説く。況や轉讀大乘は往生の正業なり。必ず淨土に生じ玉ふべしと言へ。若し持律の人ならば。君持戒堅固にして三寶を住持す。一日一夜の齋戒猶中品中生の正因あり。况や一生の持戒をや。必ず淨土に生じ玉ふこと疑ひなしと言べし。若し説法師ならば。大德説法教化して衆



人に悪を止め善を修せしむ。功德廣大ありといへ。若し禪者ならば佛法は如説の行を貴じ多讀多誦を貴まず。君説の如く禪を修す功德無量なりと歎せよ。若し佐助衆事の人ならば汝僧事を經營して聖と同儕なり。沓婆は王種あれども羅漢の身を以て僧の知事となる。迦葉は泥を踏で五精舎を造り。祇夜は薪を破て僧の受用に供す。身子は地を掃ひ。目連は燈を然す。皆は大羅漢あり。汝が功德無邊なりといへ。若し眞言を持誦し。入壇灌頂。行法等をあせる人ならば。一度灌頂壇入る者は万億劫を経て悪趣に墮せず。況や祕密の行法を修せしをや。況や平生に眞言を念誦せしをや。一たび陀羅尼を耳に聞すら必ず天に生ず。況や自ら多く誦せしをや。若か功德正に金剛薩埵菩薩と等し。往生淨土疑ひあしと讚歎せよ。若し念佛者ならば。念誦する者は人中の芬陀利花あり。一遍南無阿彌陀佛と唱念するすら八十億劫の生死の重罪を滅す。況や一生の唱名をや。決定往生疑ひあるべからずといへ。又佛を圖繪し。或は木佛銅像を造り。經を書し。施を行し。伽藍を造營し。古寺を修補せし等の善事。各所應に隨て功德を讚歎せよ。凡そ一生の善事を擧て。病人の心に勇進歡喜の心を生せしめよ。智度論に説く。一生修善の人も臨終に惡念あれば。便ち惡道に生ず。一生造惡の人も臨終よ善念あれば。天上に生ずと。問臨終は少時あり何ぞ一生の行業に勝るや。答臨終の念は猛利に決徹して第二念を續ざるが故なり。又矢の弦を

離る、時に一分の斜あれば。的にあたらざるが如し。故に臨終の一念を第一とす。是以十惡五逆の人も臨終に善知識の教に隨て十念すれば。淨土に生ずとの説れたり。又万年の暗室も一燈に能く破し。千年の積薪も小火を以て燒き盡すか如く。臨終の一念能く多生の罪を滅し無量の功德を生ず。是に依て看病人の死期を能く知て。上の如くに佛菩薩明王等の像を安し。名香をたき。燈明を然して。一人は不動の眞言を念誦して結界を作。一人は微音に光明眞言或は念佛。病人の心に任せて同音に唱ぬよ。若し病人苦痛切にして唱ることあたはずば。病人の耳に入ほごに唱ふべし。又時々無常の聲を打べし。昔し天台大師臨終に維那に告て曰く。人の命終せんとする時鐘磬を聞へ。正念を増す。唯し久しく長く打て氣の盡るを期とすべしと。されば磬を打べきなり。甚だ大に打す又小にも打され。中分に打べし。乃至念佛及び眞言を誦して。病人末後の息風の出ると等しく唱ぬ台せよ。然らば決定して淨土に生ずべし。若し臨終の印明を傳授せる人ならば。兼て鹽麝せしめ塗香を手に塗て印に住し明を唱ぬしめよ。臨終の印明は祕密の大事なり。明師に隨て傳授すべし。昔し眞如親王の弟子隆海へ。端坐し印を結て死せしに。茶毗の後まで印壞せず。澄海律師も耶旬の後に至るまで印壞せず。勝尾の澄如も定印壞せずといへり。全身壞せざるは上なり。印壞せず舌壞せざるは其次なり。舍利を得るは復其次なり。千臂經に曰く若人



命終に定印を結ひ、當に知べし初地に入れりと。故に必ず印を結はしめよ。諸人集りて最後の水を手向。及び病人の身にあらく觸れ。或の喧すしく啼哭することなかれ。一も益なふして只大なる魔障となるか故なり。唯光明眞言。不動の眞言。念佛及び地藏の寶号眞言等を微音に唱へ。或は音を出さず唱へて。往生淨土を祈るべし。但し地藏本願經には高聲に誦せよといへり。又諸事の儀則偏へに覺錢上人の一期大要集及孝養集に依るべし。是れ通途看病人及び同朋等の用心なり。若復本不生の深理を解せる人ならば。安樂都史本來胸中等の義を説聞しめ。又六大平等不生而生不滅而滅の理を互相に談すべし。臨終に及て辭世の頌を作り或は歌或は發句などする者あるを。世人多く讚歎し羨ひは。甚だ愚癡虛頭の至りあり。必ず作すことなかれ。能く頌を作ては傲る意あり。兼てより工夫して戲論の心よ住す。甚だ哀むに足れり。○京五條の和光院の行泉房と云人歌を好む。平生文字觀を凝して松島の雲居和尚をも詰れる人なり。世人の辭世の頌を好みて戲論に走るを呵して。自らは健ある時に辭世と号して語を書れけり。是も自ら好むにはあらざれども。世人を驚覺せん爲ありとぞ其の詞に曰く

生死自在なれば辭世亦常なり。さればこそ行泉房は死れたれ。我身ながらも哀れなりけり。

とは是寔に綺語なれども。志の程貴かりけり○又世に一等の人あり。盡形壽の持齋を受ながら。少の病緣に詫して齋を破し戒を破す。多くの臨終に戒を破するあり。是大愚癡の至りあり。定業なれば頓死する者あり。雷に撃る、者あり。刀兵に害せられ。毒に中られ。食に中られて死するあり。然るを少時の命を延んが爲に。永劫の苦患を召く亦哀からずや。世の庸醫多くは勸めて破せしむ。是亦魔事なり。齒切て肯ふことなかれ。堅固に戒を持しなば佛天の擁護をも蒙りて。定業をも延ることあるべし。設ひ即ち死すとも早く如來の法身を拜すべし戒を破しなば延べさ命なりとも。惡鬼使りを得て却て死せんこと明けし設命を延とも何の益かあらん。木頭畜生と異なることなし。彼の飢渴して死せし比丘の早く如來の法身を禮し。蟲水を飲みて命を延し比丘の呵嘖を蒙りしが如し。慎まざるべけんや。昔し晉の廬山の慧遠法師。持律堅固にして中を過ての密漿をも飲ず病ひ厚きに及て諸人密漿を進めければ。遠法師の曰く。諸律部の中に開せる文あらば飲むべしとて。衆僧に命して掘へしむ開文未だ出ざるに遷化せりといへり。實に貴き心羨しきことなり。又或律僧好で蕎麥湯葛湯等を用ゆ。律の中に文あることなし。實に洋銅汁熱鐵丸なり。恐れざるべけんや。○又上よ言所の臨終には妻子兄弟を近けざれと云ふことは。昔し天竺に夫妻あり。厚く三寶に歸依して五戒の清信士女なりしが。夫先死するに妻別を惜みければ夫執を生



して死して妻が鼻の中に生して黒色の蟲となるといへり。又頃載或人の妻死する時に。夫傍に居して別を惜みけるに。妻手を以て夫の腕を握て即ち死す。死して後に其の手を離たんとするに終にはなれず。爲方なくて利刀を以て妻か手を切て。五指を一指つ、切りて取りはなちけれども。其の處陥みて輪子の如くになりけり。夫甚だ恐れて。妻の執心深かりけるを悲しみ出家となれり。慎ますんばあるべからず。恐れすんばあるへからず。

◎第八十一 南部岩手の想九郎が子の事

頃載南部の岩手に想九郎と云者あり。一子あり想九郎殊に此子を憐れみて。妹を聚りて與ぬけり。比翼連理の昵し借老同穴の契り淺からざりけり。然れども無常の殺鬼ハ時處を擇ばされば。二三年ありて彼の妻死しけり。死する時に夫別を惜みて。汝が死せば我も亦後妻を娶らじ。必ず出家して汝が菩提を資けんと言ければ。妻死苦の切なる中にも世にうれしげにて死しけり。其後一兩月の間は愁思切なれば。父に請て出家を求めしかども。一子のことあれば輒く出家を許さざりけり。さる程に昨日まで自身を墨染に改めんと思ひしが。飛鳥川の淵は瀬なる世の習ひ。寂寥の閨の中寒燈の光の陰に萱草生て。隻枕夢回る朝に孤影鏡に向ふ夕忘憂の物を嗜みければ。程なく娥嬋を慕の心はのめき出たりし折しも。父後妻を逐へければ。昔日み牽牛星を笑て私語せし婉孌の盟も。今は早晚しか忘れ

果て。色を好むの情深かりけり。さて後妻來りて閨中に入り。粉粧せんとて驚鏡を尋るに忽ちに失て見ぬざりけり。家には賓客多く來りて今や膳を出すといしめさけるに。何くともあくちんくと鳴る聲しけり。正しく金の聲なれば。上座の老宿ども怪しみて。人を外に出し見せしむるに磬打人もなし。然るにいよ／＼聲近づきて正しく其の家の極と思ひければ。天井を見るに彼の後妻が失ひし鏡みを。繩を以て結ひ棟に倒に鈎りて。旋轉すること速にして陶家輪の如し。誰打ともなけれとも此の鏡の鳴にてぞわりける。一坐の人々身毛豎て恐れけり。後妻は此の怪異に驚き怖れて親の家に歸りしが再度來らざりけり。夫も此に少し目醒て昔日の約束を思ひ出し。發りもせぬ道心を發して出家とぞなりける。此事延寶年中のことにて能知たる人予に語られけり。されば男女俱に愛執深けれど。殊に女人の多欲あること男子に百倍せりと經にも説かれたれば。女人の愛執をば恐るべきなり。故に法花には諸苦の所因は貪欲爲本とも説癡愛故生惱以諸欲因縁墜墮三惡道とも説たり。聲聞戒に姪姪殺妄と次第して愛縛を離る、を第一とする。此道輪回生死の根本なればなり。楞嚴經は大乗の祕密教なれど。若し姪を斷せずして禪定を得んと思はゞ。沙を蒸して飯となさんことを求むるが如し。是の處りあることなしといへり。

◎第八十貳 陸奥國四十九院氏か事



奥州の住人吉村治左衛門と云武士あり。累代將帥の材ありて李廣李陵か勇みをも凌ぎ孫子  
 吳起か謀りことを誑むく譽あり。治左衛門妻を娶て後は。深く色に迷ふこと義經の上古  
 にも踰。義貞の中葉にも過たり。春景長しといへとも花の前に。盃を擧ての猶日の短さこ  
 とを歎き。秋色悲しといへとも月の下に床を對すれば曾て夜の長さことを知らず。然れと  
 も春の花も發けば必ず散り。秋の月も盈れば必ず虧る習ひなれば。忽に無常の風にさそ  
 はれて。三十ぢにも足ぬ花貌ち。千里又耀る月の顔はせ。終に朝の露と消にけり。吉村氏  
 も俱に消るん心地しけれど。定業各別なれば。徒らに空房を守りけり。鴛鴦の衾冷か魚  
 燈の影荒じくて。或時は音を揚ても哭せんとすれど流脚は武夫なれば深く慎みけるぞ一哀  
 ある。爰に不思議の事あり。妻死してより夫深く戀ければ。中陰の中より妻夜々夫方へ  
 來りけり。夢かと思へども亦夢にもあらず。病ひかと思へども自ら苦しむことなければ。こ  
 は故二の魂神來るにやと。一たびは喜び一は恐れて膠漆の友にも此の事を語らざりけり。  
 左右するはどよ早三年にぞなりにける。其の比天下餓饉の者多かりしま。吉本氏も糜粥  
 を煮て餓人を救ひけるに。家僕乞人を普く見る中に手巾を以て深く面を蒙ふて日に來  
 る女人あり。伽子熟見るに亡せし主人の北の方に能く似たれば。即ち吉村氏も白さく。  
 人心同じからざることを其の面の如と云て。千万人の中にも面相肖たるはなしと曾て承り

しに。世には又能く背たる人も待り。日日來る。乞人の中に殿の北の方に露も違はず背た  
 る人あり願くは見玉へど。吉村氏驚きて隙より窺見るに正しく我が妻なり。ますく怪み  
 て伽子に命じて還る跡を認しむるに。亡妻を葬りし寺の四十九院の中へ入るかと思れば忽  
 ちに消ぬ。僕身の毛豎て戰戰歸りて有のまゝに申しけり。吉村氏少も騒がず。さては三  
 年來我が方へ來るもいよく實なりとおもへり。さて其夜例の如く妻來りて涙を流して曰  
 く。今は皆な顯し候ひぬ明晩よりは來らじ。三年の契に一人の男子を生せり。此を養はん  
 が爲淺間しく恥を忘れ。乞人となりて粥を乞へり。明日我が墓を見玉へ君に子を與ふべし  
 と言て。書消すやうに失にけり。吉村氏悲泣して夜の旦るを遅しと待て即ち寺へ走り行け  
 れば。上人出合て此よりこそ申し入るべく存し候よ。嬉しくも來り玉へり。今朝木明に四  
 十九院の中より子の啼く聲せしかば。怪みて此を見るに中に赤子あり。四方密しく閉て鍵  
 固く封せり。誰人の入るべき方をしと語りも畢ぬに。吉村氏其に付てこそ我。忽き來候へ  
 どて。三年來件の事を委細に語られければ。上人手を拍て彼赤子を與ねられけり。さて此  
 事世に隠れなければ。大守聞て不思議の思をなし。即ち其子を氏を改めて四十九院氏と賜  
 りけり。今現に四十九院治左衛門とて奥州に住せり。此の事親族吉村氏か物語を子が法弟  
 而會り聞て手に語りけり。是も女の愛執深くして死後までも夫の方へ來れるなり。甲斐の



信玄公の家臣。原加賀守の妻も死して後に來れること妙幢禪師の撰せる地藏菩薩利生記に見たり。此の事と頗る相似たり

◎第八十三 京の愚夫死して後も女の方へ來りし事

邇比洛陽に一人の男あり。東山八阪の花衢に行て或る遊女と深く契りけり。さて程なく病て死しけるに。死後にも猶彼の遊女がりへ時々に行て遊びけり。遊女問く君此の比は御所勞の由を聞つるに。今は平愈し玉ふや尙憔悴し玉へりといへば。彼の男大半は平愈しけれども未だ全分快からず。君に會ことも久しからじとかこち泣て。凡そ毎度に此の如くなりければ遊女も怪しみけり。其後半ばかり過て。彼の男が朋輩八阪へ行て遊び戯れけるが。遊女に語て曰く君が淺からず契りし男も。久しく病て此の三月に死しぬと言ければ。遊女心得す其の人こそ時々來り玉ふなり如何に説話を宣ふぞと言。時に彼の人いよく死したる子細を語りけり。其言ば未だ訖らざるに彼の死せし男又來りて。我が朋輩を見んと即ち逃て。後の東司へ往けり。遊女驚きて東司へ走り行き尋るに見へず。身の毛豎て歸りければ。彼の朋輩も膽を潰しけり。さて彼の遊女はそれより二月程は病みけるが。其の後彼の男も來らざりけるとなん此も無下に近きことなり。愛執の深きこと女人のみにならず。男子もかく深き例し多し。恥すんばあるべからず

通俗礦石集第三終



通俗礦石集第三末

◎第八十四 上總國馬槽大師の事

高祖弘法大師は高野山に入定して全身散せず今現に住し玉へり。昔し延喜帝の夢に見玉ひて衣を乞ひ玉ひしかば。觀賢僧正を勅使として衣を贈り玉ひしよりこのかた毎年三月二十一日に御衣を更上る。山上山下の士俗傳らく。毎年改め更る衣の裳に土著けり。是れ全身今に住して十方に往來し。有縁を救濟し玉ふ徴しなり。設ひ其の衣の裳には土著ずとも。身を百億に分ち變化等流の身。十方世界に現じ玉ふこと何ぞ疑はんや。爰に中葉沙門の身を現して上總を巡り有縁を度し玉ふ時。一の家に至て宿し玉ふに。一りの處女あり姝好して人多く慕ひけり。沙門の威儀閑雅なるを見て心に悦ひ。凡人なりと思て隙を伺て情を通じけり。沙門種種に説法して曉すといへとも更に聞入す。若し情を遂せんば必ず命を斷へしと。種種に誨ければ沙門許して夜に入て我か臥せる處に来るべしと約す。處女悦びて夜來て抱くに。初めは彼の僧かと思ひしに僧にてはなくて馬槽あり。處女この妖物なりと思て驚き欲火稍靜まりぬ。夜旦て見るに彼の沙門は行方を知す。只馬槽の中に弘法大師の尊容明に描けるあり。處女驚きてさては大師の來り玉へるあり。あさましくも聖者を汚し奉らんとせりと。自ら改悔して父母に其の由を語りければ。即ち彼の馬槽を

以て本尊として一寺を建立し。馬槽大師と号し奉る。今現に上總にありとぞ。此も處女の心甚だ恐ろしきことなり。彼の道成寺の事思ひ合されて悲し。彼は凡人なれば終も苦趣に墮す。此れは聖者なれば善趣に導き玉へり。舍利弗は聲聞なれば瞿伽離が謗を受けて。瞿伽離阿鼻も墮し。彌勒は菩薩なれば外道をして信を生せしめしが如し。事異なれども頗る相ひ似たり。○又昔し新羅國は義湘法師と云あり海東花嚴宗の鼻祖なり。天性英奇にして早く出家せり。唐土の教宗鼎に盛なることを聞て。元曉大師と共に大唐に赴く。元曉大師は道より。歸り玉ふ。義湘法師は獨り退くことなく。總章二年に登州の岸に達し。分衛して一りの信士の家に到て留連す。家に少女あり善妙と名く。義湘の容色挺特たるを見て。衣服を飾り靚粧して巧に媚情を通して誨く。義湘の心石の如にして轉すべからず。少女種々調けども答へず。時に善妙女頓に道心を發し。義湘の前に於て大願を矢て曰く。我生々世々に和尙に歸命せん。大乘を習學去大事を成就し玉は。弟子必ず檀越と爲て資縁を供給せんと。義湘はそれより大唐の長安に赴き。終南山の智儼三藏の所より於て。康藏國師と同學と成て花嚴經を學び。德瓶云に滿藏海に遊戯して。後に新羅國に歸る。善妙女ハ終に嫁せず義湘の歸るを待ち。法服并に諸の汁器を辨集して篋笥に盈て、供養せんとを期す。義湘歸る時登州の善妙か家に到り。信士に謝して即ち船に乗して去る。善妙



女海岸に到て法衣等を贈らんとするに義湘の船已に遠く出ぬ。善妙女即ち咒して曰く。我本眞實心を以て法師に供養す。此の言妄なくは是の衣篋必ず飛で船に入と。言訖て篋を駭浪に投ぐ。其の志の深さを龍神も納受やしたりけん。時に疾風あつて衣篋を吹て船中に送ること鴻毛の如し。善妙女衣篋の終に義湘の船に入るを見て悦ひ。復誓て曰く我れ願はくは此の身大龍と成て。義湘の船を扶翼して恙なく國に到らしめ。大法を傳へしめんと言訖て身を海中に投るに。忽に大龍と成て形を伸て天矯たり。或は躍て舟の底に蜿蜒たり。其の船果して恙なく終に新羅國に著ぬ。義湘國に歸て普く名山靈區を見る。義湘念はく大華嚴の教福善の地にあらすんば興るべからずと。時に善妙龍常に隨て擁護せしが。即ち義湘の心を知て乃ち大神變を現す。虚空の中に於て化して一里四方の大石と成て。伽藍の頂に蓋てまきに墜んとす。諸僧驚駭して四方に奔走すれども。義湘は善妙が所爲あることを知て遂に恐れず。寺に入て經を講ず。國王此の靈異を聞て田莊及び奴僕を施す。義湘受ずして曰く。我法は平等にして高下貴賤共に均し。八不淨財何の莊田奴僕をか用ん。貧道法界を以て家とし。孟耕を以て稔を待つ。法身の慧命此に藉て生ずと。終に華嚴宗を海東に廣めて大に佛法を弘通すといへり。故に沙門となりても猶恐るべきは女人の媚態なり。されば法華にの處女寡女に近かざれ。諸の優婆夷及び比丘尼の蹶笑を好む者に親近

せざれと誠め玉へり

◎第八十五 大坂の女生身に人の妻を讒殺せる事

大坂何の町とかやに一人の男あり。或中年の女と共に一家に奴婢と成りて年を送れり。此の男彼女と年し久しく契らひて。我必ず汝を妻と爲べしと常々に言けり。年期既に満じければ彼男其の家を出で、他町に家を借りて商賣せるに。終に初の約を忘れて新に年少き女を娶りて棲けり。初の女此の事を聞て身を悶て恨み瞋り終に病となれり。或時午後に臥して居けるが。大息つきて遍體に汗しげるを。傍なる人何事にかと問ければ。目は血の如くに成て曰く。今暫らく眠るに憎さ男めが家へ往て思のまゝに振舞て歸ると夢みけりと云。口を見るに血多く著たり。傍なる人身毛豎てぞ恐れける。さて其時に丁て彼の男が家に。夫は他行して妻唯一人居たりしに。あつと言て死しぬ。死骸を見るに何物の所爲やらん。亢を嚙切りて殺しけり。後に男歸りて隣家に問ふ。隣家の人の言く。四十可の女人家の戸外まで來れるが。物に恐るゝ氣色にて。予が家の土間を通りて裏へぬけ。君が家に至るかと思ふとあつと云聲しけりと語る。男聞て正しく我が初めに契らひし女の所爲なることを知て。即ち出家せり。彼戸外にて物に恐れたるは祈禱の札に梵字あるを恐れたるなり。後に彼此聞合せて諸人恐れ悲しめり。此の事近比の事にて。町の名も聞しかど忘れたり



○又河内澁河郡。久寶寺の人平野に妾を藏し置て夜々通ひけるに。或夜川事多くて夜半までに行くことを得ず。丑の上刻に平野へ行に前より挑燈程の火來れるを見る。人の來るがと思ふに石橋の處にて行合たれば即ち指て見ざりけり。狐の火にてやあるらんと思て。終に彼の妾が家へ到て常の如くに臥しければ。妾語て曰く今夜の君あまりに遅かりつるまゝ。待疲れて眠りたる夢に久寶寺へ迎に行けるが。石橋にて君に逢て嬉しくて歸ると見し。夢も能く圓ものなりと語りければ。男身毛豎て彼の火は即ち妾なりと覺て。其の後へかれくになりて終に通はざりけり。是亦執心の深き故あり。又心の藏は火を主る。密教に悉多心は白色圓形と建立せり。されば夢は獨頭の意識の所爲なれば。夫を思ふ第六意識獨り行しは。火に見たるも理わりなり是白色圓形の能き證據なり。又人魂の飛も白色の物ありといへり。是も亦同じ意あり。○因みに記す攝州昆陽の清兵衛と云者。或夏の夜山田村へ行ければ。道に火ありしを妖物あり打殺さばやと思つて追けるま。彼の火逃て山田村の知己の家より到り。二階の窓より入れり。清兵衛不思議に思ひ戸を叩きて入りければ。主人遍體汗し太息ついてあらみろしといへり。清兵衛何事ぞやと問に。主人の曰く夢に見陽に行きしに。何人やらん我を追て家の前まで追付たり辛くして命を延べたりと云。清兵衛しかくと語りければ大に恥けり。是も近比の事なり。心は火あること例證一にあり。

らず。又攝州六甲の郡も或人本妻あるに傍に妾を持ちけり。妾事の外に嫉妬深くて後には病て終に死す。其の死骸本妻の穴に食付て殺しけり。無下に近き事なれば夫の名を斥す。左右癡愛の執。嫉妬の念はと恐ろしきことはあらじ。慎ますんばあるべからず。

◎第八十六 下總國般若塚の事

昔し中葉弘法大師。沙門の身を現して關東を巡り。有縁を度し玉ふ次で。或る有徳の信士の家に屢來り玉へり。信士は淨信決定の人にて常々快く供養し奉りぬ。或時沙門信士に語て曰く大般若の功德莫大の經なり。況や經の中にも末世に東北方の衆生此經を書寫去轉讀して無量の福を得べしと説玉へり。竺乾より扶桑國は東北方に當るなれば。信士若し此經を書寫せば即ち如來の懸記に叶へり汝が子孫苗裔に至るまで富貴安穩あるべしと。信士答て曰く欽て仰を承り侍れども。六百卷の經なれば多くの僧を請し奉るとも。輒く功を成じ難かるべしと。其時沙門の曰く憂慮することあかれ。番墨及び筆は我れ自ら辨ずべし。汝は唯机及び一字の假屋並に六百挺の蠟燭を辨備せよ。我一人して書寫し與ふべしとありければ。信士歡喜して忽ち假屋を造り蠟燭六百挺を調へけり。沙門去て自ら經の紙及び筆墨を負來り玉へり。さて信士告て曰く今夕は吉日なり。書寫し始むべし。我彼の假屋の中に入らば必ず觀る見ことをかれと。堅く誠めて六百挺の蠟燭を持して假屋の中



に入り。堅く扉を閉玉ひけり。信士誠のを蒙るといへども心に疑ふらく。一人して書寫を初め玉ふに燭の多きさへあるに。堅く見ることおかれし誠の玉ふは怪が中の奇怪なりと思て私かに戸の隙より覗き看るに假屋の中變して廣大になりて。六百挺の蠟燭を悉く然し列ね。彼僧分身して六百人となり。六百の机の前に坐えて一時に書玉ふ。ありがたく不思議に思ふに忽ちに六百挺の蠟燭皆不消けり。あさましと思ふ處に彼の沙門出ての玉はく。のぞくことなかれと誠めしに。約を乖て見るが故に大般若成就せず。然りといへども少しばかり書初めたり。此をも供養せば全部の功德に替ることあるべからずとて。其夜何くとも去り玉ひて再び來り玉はざりけり。さて彼の經を拜見するに。正しく高祖の御筆なること溢れおし。六百卷の各初を三行つ、書玉へり。彼の信士約を乖かすんば皆満足成就すべきとて。臍を噬れども及ばざりけり。さて彼の經を藏めて一寺を造し般若寺と号す。般若を書玉へる處を今に般若塚と名く。近郷の疾疫災殃等に此の經を請して供養するに。利益掲焉なること谷の響の空しからざるが如し。其經今にあり。爾來今に至るまで十九代家富み榮ねけり。延寶の比の主を大圓道伯居士と名く。此の人に相見せし僧の物語を予面會り聞り。大師處々の利生勝て計ふべからず。中には是は希有の事なり。因みに記す。今の人大般若の轉讀するに。初め七行。中五行。後三行。讀を轉讀と心得。一一に

殘さず讀を眞讀と号す。大なる僻が事なり。一一に讀を轉讀と名づくるなり。眞讀の名目は經疏の中に未だ出處を見ず。此の僻解よりぞれにも轉越とも轉繙とも書さける。片腹痛き事ともなり。○又次に大師遊行して河内の國木の本村に至り。午時に或家に到て粥を乞玉ふ。家主の曰く今麥を煮し待る暫く待玉へ。麥飯は二度煮されば能く熟し惜むにはおらずと。大師の曰く。我今甚疲れたり待ことを得じ強て食せしめよとわりければ。即ち供養し奉れり。さて午齋竟て家主に告玉はく。此の世界おらん限りは汝が家には麥飯を二度煮ことを用ひざれ。一度にて能く熟すべしとて去り玉ひぬ。其の後に彼家に麥飯一度に熟しけり。河内の俗此を木本のたくく飯と呼べり。其家今にあり。實に聖者を供養し奉る功德無邊なるをや。今の世にも大師の世に應じて攝化利生し玉へるあるべし。信敬せずんばあるべからず

◎第八十七 長州三隅村に大師稻を請玉ふ事

長門國大津の郡三隅の中村に喜右衛門と云農夫あり。片夷中の事をれば佛法を聞ることおなし。何を勤むと云こともなかりけり。人のゆるしたる無欲正直なる男にてぞありける。寛文二年の十二月盡日に。行脚の僧來りて一宿を乞玉ふ。喜右衛門宿をかしけり。明れば正月元日なり。片夷中の風は元日に僧を見ることを諺に。此男の心よく宿をかせるも誠



に奇特の志しなり。彼僧元朝風に興て誦經し玉ふまゝ。喜右衛門語て曰く。我の苦しからずといへども隣家に經の聲聞えなば他人嫌ふべし。微音に誦じ玉へど。僧の曰く我誦經の音は壁外に聞ゆることあらじ。憂慮し玉ふなどて。久しく誦じ玉ひぬ。朝飯已に竟て喫茶し。昨夜の一宿主人の芳情忘れがたし。春中より來りて必ず謝すべしとて歸り玉へり。さて寛文三年三月廿日に苗代をこしらへ稻を蒔ばやと思ひ。二十一日の朝苗代に行て見るに。一夜の中に何人の蒔たるやらん皆稻を蒔たり。喜右衛門怪しみて諸人に問に知る人なし。田の畔及び中を見るに人の跡あることなし。人々聚集りて寔に凡人の所作にあらざり。不思議に思ひけり。或武士來て見て曰く。四國には弘法大師稻を蒔玉へる例しあり。今朝三月廿一日なり是れ當に大師の蒔玉へるなるべしと。喜右衛門驚て曰く。さることこそ候はめ。大盡日に宿かし候御僧こそ不思議の僧にて侍れ歸さに春中以來りて恩を報ずべしとの玉へり。實に大師の來り玉へるなるべし。是も大師の蒔玉ふならんとて。歡喜の涙を流せり。時に信せざる者あつて曰く。若し大師の蒔玉へるならば神變の利益あるべし。試よとて癩者彼の田の水を飲に即ち善く言ふ盲者眼を洗ふに兩眼忽に明なり。さてこそ大師の蒔玉へるありけるとて。國中の貴賤男女群り集りて拜し。後には誰が言傳ふともしらぬ火の筑紫の人も皆來り。四國。中國。畿内。北國までも聞て。衆人參詣して利益を

得ること無邊なり。ちんば。いざり。癩瘡。つんばう。疝氣。寸白。頭痛。目眩。凡そあらゆる痼疾愈すと云ことなし。唯し人の信不信によれり。或は稻の穂を抜て去る者あり。或は水を瓶及び竹筒に盛て去る人あり。土を裏みて歸る人もありけり。喜右衛門には諸人財寶を與にけれの俄に大富人となれり。あまり夥しく人集りければ。大守大江の綱廣卿。江戸にあつて大樹へ白し。台使ありて實否を正されけり。喜右衛門が田の二町四方ばかり近處は。皆諸人踏つふして墜場の如くになしけり。今茲は早魃にて五穀みのらざれども。三隅の村は諸方の人の宿をせしまゝ。夥しく賑ひて豊年にあへるよりも數倍の利を得て。皆を富人となれり。寔に大師利濟の御方便りがたかりける事どもあり。田中に集りし青鳧過半は喜右衛門及び村人分て取り。殘る財寶にて三隅の熊野權現の宮寺に於て御影堂を造立し。新たに尊像を作りて安置し。並びに寺院を造營して遍照山發光寺と号す。大守厚く信して若干の供料を寄附して彼の寺今にあり。第二世第三世の住持の子が莫逆の僧あり。故に面方聞て記するのみ

◎第八十八 河内の人高野山に燈籠を釣りし事

河州錦部の郡星野村に清兵衛と云者あり馬を養て塚へ往來し人の荷物を取せ。三日市へ通りて産業とそしける寛永の比かよ東國の武士。草蓑に金子を納て馬に乗り高野山へ上り



けるを。星野村の騶子此を乗せけり。騶子金囊を見て忽ちに偷盜の心發り武士に言て曰く。此の道は盜賊多し。金銀を齎持玉れば能く心を付玉へ。紛失すとも我れ如何ともする。となし管はじと。武士此の語を聞といへともやさしき人にて。比しる五月の事あれば。井手の蝦蟇の聲に賞で。早苗とる五月乙女の謠を愛し。三河の八橋にはあらぬと杜若の笑るを詠めて。はるくさぬる旅をしく。萬浦もしらぬ思ひに。金囊をも心に懸ざりけり。騶子隙を伺て彼の金囊を偷み。深田の中へ踏入れて藏しけり。さて三日市の宿に到て武士金囊を失へることを騶子に語るに。さてこそ。豫め偷まれ玉ふあと白まけりと詰ければ。武士道理に結て空手にして高野へ登りけり。本此の金は奥の院に燈籠を釣りて。大師に供養し奉らん料ありけるを。空しくなして本國にぞ歸りける。武士の心の中何ばかり悔しかりけん。推量れて哀あり。さて騶子は夜に入りて彼の深田へ行さ。金囊を取出して家歸へり。其よりぞ今に至るまで家富ける貞享の初め清兵衛へ他行して妻家ありしに。何くともなく高貴僧來りて言はく我は高野山に住する僧なり。曾て清兵衛に金子を預けたり。今ハ利息數倍になれり。少利上をせよと仰ありければ。妻心得ず我が家は富めり。他の財を借りしこと覺へず。但し夫久しく借るなるべしと思て。夫は他行いたし候ま、歸りて後仰の如く告べしと答へけり。さて聖僧門外へ出玉ふかで見ると消失せ玉へり。清兵衛

歸りて後妻しかくの由を語りければ。吾曾て金を偷みしこと憶ひ出しければ。惘惜の情深くて。金を上るべき心もなかりけり。又半月あまりを過て先の僧來り玉ひて。何とて利上をせぬぞ急ぎ利上せよ。然らすんば災殃のるべまど。あら、かに仰ありければ。妻身の毛堅て應諾えぬ。さて夫にもありのま、に告ければ。夫も不信の者なれどもさて大師の乞玉ふにやと驚き。災殃の來らんことを恐れて急ぎ高野山に登りて奥の院に燈籠を釣りて供じけり。此の事近郷に隠れむく諸人普しく知れり。佛財法財を掠むること無間の罪あれば。大師哀愍して驚覺し玉へり。又河内の高貴寺に寛文の初め開帳ありて。散錢多ありしを。或人看坊の他行を知りて顔に墨を塗夜る來りて。財寶悉く取りて懐にし出んとせしが。護法神の所爲にやありけん。又ハ現に自罰を蒙るにや。棚を見るに大師に供せし祀祀あまたありけるを。一つ取りて食ひければ喉につまりて即時に死しけり。明日諸人集りて墨を洗ひて見れハ近處の人なり。左右の評議に及ばず隠密しけり。昔し彼の實盛が討死せし後に墨を洗ひて見しハ。美名を天下に施し。今の世までもやさしく聞ゆ。今此の人の顔を墨に染て糞と討死せしは。醜名を今の世に傳へたり。墨に染ることは同しけれども。彼此の心操天地懸かに隔れる者あり。是も偷み得ば無間の罪いよく重くて。千萬億劫流轉すべきを。大師の御方便もや偷み得ず。現には醜名を得たれども。未來の苦患



少し輕かるべし。ありがたき御方便なり。凡そ大師に歸依奉れば現安世穩後生善處を得ること例し多し。或は逆或は順。或ハ罰を與へ或は利生を施し玉ふこと。偏に地藏尊の悲願に異ならず。或説又大師の本地は地藏尊なりといへり。或説には如意輪觀音なりと傳ふ。寔に南海に生を受けて。南天の教を弘通し。終に南山に入定して。寶珠を室生山に納め玉ふ。彼此契當せるにあらすや。

◎第八十九 河内の人大師に歸命して業病痊る事

河州古市の郡譽田村に極貧なる匹夫あり。一向宗にて善を修することをもしらす。日に十惡を造するより外の事はあかりけり。妻を娶て一子を生ずるに海月などの如くに五體骨なきて。三四年を経て遂に死しぬ。夫妻悲ふといへとも甲斐なし。然るに妻復懷妊せしかば夫貧苦の中も殊に嬉しく思ひしに。妻平産せしを見れば男子あり。夫是にて始めの憂を脱れていたはり養育するに復海月の如くにて骨なく十二歳なるまで歩むことあたひされば。夫妻俱に悲しふこと限りなし。貧苦と子の病との悲しみのあまりに。或時夫婦互相に瞋りて惡口罵詈す。時に妻彼の子を嘗て曰く。かく宿世つたなく貧窮下賤の身を受るさへあるに。汝が如き業病人を子とすることあさましきかな。ねぢころさん不便あり。早く出去て乞食せよとて音をも惜まらず啼かこちければ。彼の子悲しく思ひ俱に啼哭て思はく。

父母の瞋れること道理なり。子としてハ父母を養ふべきに。我今十二歳になれとも立居さへあらで空しく食物を費し。いとハ父母の愁苦を増す。嗚呼如何せん淵瀬にや身を投ん。縊れてや死せん。乞食するも父母の辱ありと思ひしが。又思はく高野山は古佛の淨土にて弘法大師今現に住し玉ふと聞けり。いづくにて死するも同じことなり。匍匐まはりてなりとも高野に詣りおぼ宿業をも消滅し。未來も善趣に生すべし。設ひ詣り得ず途中にて死すとも心は高野へ詣るべし。況や路程才かに十里あまりなれば。五六日の中には到らん。その中にはよも命は盡じと思ひ。父母又向て曰く。我れ子とあるといへとも父母を養ふことあたはず。今暇をたまはれ高野山に詣して此の業障の重さ身を大師に奉りて懺悔すべしと言ければ。父母瞋のあまりにいづくへありともゆけども戸外推出しけり。さて彼の蹙たる童子にじりまはりて姨母の家に到り。我は高野を詣るべし路の糧を施し玉へといふ。姨母おはれみて鉢袋を與へければ喜びて其の家をにじり出で、行はどに。次の日に四里ばかりを行て鶴原村の辻堂に到りて臥しぬ。童子の事なれば貧苦病苦の切あるさへに。恩愛の情忘れがたく。竟夜ら古郷の事を思ひて。泣々大師の寶号を唱えけり。夜明に現の如くに何くともなく高貴き僧來り玉ひて問玉はく汝は何人ぞと。童子の曰く我は譽田の者なり。高野山に詣らんと思ひ侍るありと。僧の玉はく一不便あり。高野山へは此路を行べから



す。是より小西見村に出で。それより。岩瀬。清水。天見を越わて行べしとて去り玉ひぬ。童子うれしくて思はく。只今の御僧は大師の來り玉へるあらんに。我が足の蹇たるを加持してたべと白すべかりしを。あらかるし南無遍照金剛と唱へて泣けり。それより小西見へ出んと思ひ堂の柱にとりつきて不圖立ければ。忽ち足に足たちてけり。童子は夢の心地しうられしくありがたぐ。泣々大師の寶号を唱へ足ばやに歩みて。終に高野山に詣り。或寺を頼て二三年の間だ給仕せしが。又思はく我當山に登りしことも父母の心を安んせん爲あり。石の上古郷の事を思へば。父母は。いかに哀れと念ふらん。三年になりぬ。足た、ずしてありや。死せりやとわび玉はんも悲し。我既に病瘡に健にあり。盍ぞ譽田に歸らざるどて。即ち大師に御暇を乞ひて古郷へ歸へり。父母に相見して始末の因縁を語り。俱に涙を流してそれより後は。能く父母を養ひて今現に譽田に居す鍛冶屋なり。是も近き天和年中の事にて近郷の人々普ねく知れり。寔に童子の志し殊勝な哀れなれば。大師の納受し玉ふも理はりなり。彼の唐の阿足師の神變を現せると。今の大師の御利生と。古今特殊に和漢域異あれども。蹇者を救ひ玉ふことは一般ある者なり。

◎第九十 河内の人死して後に追福を乞ふ事

河内錦部郡太井村に七郎右衛門と云者あり。平生正直にして妄語綺語を言ことなく。殺生

偷盜を犯せることもあかりけり。或時薪を樵けるが我が家の邊に神祠の林あり。圖らざるに小木三四本を伐りけり。さて程なく病て死しぬ。宮寺に秀音と云僧あり。菩薩戒を受持して如法に勤めけり。或夜彼の死せし男夢にもあらず。現にもあらず來りて曰く。我一生邪まなしといへども一度小木を偷み伐りたる罪にて。今日夜に三度づ、身の肉を削り血を搦らる、苦しみを受く。苦痛具さにのべがたし。願はくは經呪を誦して回向し玉へど。秀音聞といへども此を信せず。唯狐狸の妖たるにやと思へり。然るに又次の夜も來り。又次の夜も來て上の如く言けるま。問て曰く何くの木ぞやと。彼の靈魂の曰く我が偷みし木は人普ねく知れり。他人に問ひ玉へ。唯慈悲を以て早く追善を垂玉は。未來際まで恩恵を忘れじと。其時秀音涙を流して回向すべき由諾ひければ。喜びて歸りけり。さて即ち大佛頂陀羅尼及び理趣經等を誦して回向しければ。苦思をや免れけん次の夜よりは來らざりけり。此事村の人に問に偷み伐りし木は氏神の木にして普ねく知り。其の株机猶新にぞありける。既に來り告しこと妄ならざれば苦を免れけんことも實なるべし瑜伽論の第一にも中有を健達縛と名く香を尋ねて行が故にといへり。今秀音弟子に行法させて。名香を燒るゆね香を尋ねて來れるなるべし。されば少しの罪も必ず苦報を受るが故に慎しむべき事あり



◎第九十一 浪花の人死して後夜々来る事

貞享の初め大坂安道寺町の三休橋すちに。庄左衛門と云者あり。針鐵を伸るを産業とせり。此者か僕死して其夜より庄左衛門が方へ毎夜來れり。言詰る常の人の如し。さて庄左衛門に向て言く。我れ一生悪事をさせることなし。然るに先年醫者の方より米一石借て御邊へ進せたり。其の直ひ未だ渡らず。必らず忘れ玉ふことをかれ。早く償ひ金子を與し玉へど。庄左衛門身の毛豎て恐れけり。かくの如く毎夜來れる故に甚だ懼れて。友人市郎兵衛に語る。市郎兵衛は心剛にして何事にも恐怖せぬ者なれば。聞て曰く。何ぞ死したる人の來ることやはある是れ狐の妖たるあるべし。我一太刀は斬殺すべしと云て。我友の内血氣の勇ある者を伴ひ。共に小刀帶て行けり。夏の事ありければ一つの蚊帳に三人臥して庄左衛門をば中に臥さしめ。今夜は恐れあるべからず若し來らぬ我等刺殺すべしと。さる頼もしげに言けり。さて子の刻ばかりに何となく三人共に攔み立るやうに恐怖なりけり。小刀抜て持けれども猶もそろしきこと言ばかりなし。時に庄左衛門は市郎兵衛に抱きつき戦慄けり。家の中めさくと鳴りて。彼の死せし者の聲して庄左衛門と前夜の如く言語けりその形も煙の如く霧の如くにて現に見ゆ。市郎兵衛平生とは相違して。以の外に臆病神付て中々討殺すことなしてあき。鼻息も得せず直み居て。寐ぬに明ぬとかあしむ夏の夜

を。年をみ經るやうに思ひて。旦ると即時歸りけり。さて庄左衛門も其家に堪かねてやがて宿を替けり。此事は其の處へ伴ひ行て現に見聞せし人の説を予面告り聞けり。有徳の僧を請して回向追福せば來るまじきを。金を伸す産業せしかとも。名と實と相違えて甚は貧しかりし故に。追福せざれば久しく來れるあり。一あはれある事なり。地藏本願經に七七日の間に追福回向せざれば。中有の間に無量千万の愁苦ありて追福を望むと説けりされば。因縁ある人には必ず廻向すべきなり。又少しの米を偷み少の木を伐りしは。其の報ひなんぞあるべきと愚人は思へども小罪も必ず報あり。地藏本願經にも小惡を輕して罪なしとすることあかれ死後に報あり。纖毫も必ず受く。父子至て親しけれども岐路各別あり。縦ひ相逢ふとも敢て代り受ることなしと説き玉へり○昔し小那坂摩三藏幼して酒肉五辛を食せず母教へて曰く汝若し酒肉五辛を食して未來に報ありとも我れ代て受くべしと賺して食せしめられたり。或時油煎するに三藏誤て手を燒玉ひて。母に向て曰く我今手甚だ痛。我か苦に代り玉へど。母答へて曰く痛みは汝が身にあり。何ぞ代ることを得んや。爾時に三藏詰し曉して曰く。酒肉五辛の苦報も我身にあり。現世の小苦すら代り玉ふことなし。况や未來の大苦をやと。ありければ母言なく恥られけり。世に愚かある人の。人に肉食を勧め。或は飲酒を勧め。或は持齋の者を勧めて非時食せしめて。其の罪は